

九州大学留学生センター紀要

第33号

目 次

(論 文)

初級者対象の日本語反転授業

— 地域の日本語教室への提言とともに — …………… 小 山 悟 …… 1

日本経済2024～日銀の政策転換は円高をもたらすか? …………… 今 井 亮 一 …… 27

(報 告)

基幹教育の日本語 …………… 郭 俊海・大神智春・脇坂真彩子・楠木理香 …… 49

日本語研修コース …………… 大 神 智 春 …… 57

筑紫・大橋地区日本語コース — 2024年度 — …………… 小 山 悟 …… 65

Japanese Academic Courses (JACs) / 言語文化基礎科目・日本語

…………… 楠木理香・脇坂真彩子 …… 69

2024年度 伊都キャンパス・病院（馬出）キャンパス日本語補講コース

…………… 柴 田 あづさ …… 83

農学部・工学部の学士課程国際コース生に対する日本語教育

— 2024年度の実施状況 — …………… 柴 田 あづさ …… 91

日本語・日本文化研修コースの報告（第24期生）…………… 郭 俊 海 …… 95

Fostering Global Citizenship: The Long-Term Impact of Kyushu University's JTW Program

…………… Chisato Nonaka …… 101

Annual Report for Japan in Today's World (JTW)

A Brief Review of the 30th Class (Oct. 2023—Jul. 2024)

…………… Chisato Nonaka, Masa Higo and Ryoichi Imai …… 111

2023年度“AsTW2024”実施報告 …………… 生 田 博 子 …… 117

令和6年度海外留学派遣支援事業

学部生・大学院生共通基幹教育科目「世界が仕事場 I & II」…………… 生 田 博 子 …… 121

2023年度九州大学留学生センター・留学生指導部門報告

（カウンセリング関係）…………… 黄 正国・肥後裕輝 …… 127

論

文

初級者対象の日本語反転授業

— 地域の日本語教室への提言とともに —

Flipped Japanese Classroom for Beginners A Proposal for Community Japanese Language Classes

小 山 悟*

〈要旨〉

本稿は筆者が担当する九州大学大橋キャンパス日本語初級クラスの実践報告であり、小山(2020)の続報(実践編)である。本コースは学習時間が1学期30時間しかなく、既存の教科書をそのまま使うことはできない。そこで、小山(2020)では「文法は規則と表現の2つに分けて考える」と「語彙は共有語彙と個別語彙に分けて考える」の2つを軸に本コースの実情に合った教材(シラバス)の素案を示した。しかし、授業の進め方については「予習先行で行う」という以外、具体的な提案はできていなかった。本稿ではまず、当時の教材(シラバス)がその後の実践を経てどう変わったのかについて報告し、次に、その教材(シラバス)に基づいて現在どのような授業を行っているのかについて報告する。ここでのキーワードは「反転授業」である。その後、本授業を受講した学生の評価と見学した日本語教員の感想・コメントについて報告し、最後に、同じような環境で日々試行錯誤している地域の日本語教室の教員に向けた提言を述べたい。

キーワード：反転授業、学びのサイクル、地域の日本語教室

1 本報告の背景

本報告は小山(2020)で提案した「日本語初級クラスのシラバスデザイン」の続報(実践編)である。

筆者が担当する大橋キャンパスの日本語授業は、芸術工学府に所属する大学院留学生向けの課外授業として行われているものであるが、予算等の問題もあり、授業時間数は各学期30時間(90分×週2回×10週間)と少なく、レベルも4つしかない(表1)。そのため、「初級1」以外には学習者間のレベル差が大きく、どの教員も対

応に苦慮している。加えて、受講者も学位取得を目指す正規学生(研究生を含む)もいれば、建築デザインの勉強に来た短期留学生や外国人教員もいるというように多様で、唯一共通するのは「日本語学習が来日の主目的ではない」という点である。日本語学習に対する意欲は一定程度あるものの、ゼミでの発表や入試が近づけば学業優先となり、途中で辞めてしまうことは珍しくなく、学会出張や研修旅行などで出席できないことも少なくない。実態としては学内に設置された「地域の日本語教室」と言うてよいであろう。

*九州大学留学生センター准教授

表1 大橋キャンパスの日本語授業

コース	授業内容	クラス数
初級1	総合	週2回×1
初級2	総合	週2回×1
中級	会話／作文・文法	週1回×2
上級	会話／作文	週1回×2

中でも難しいのが「初級1・2」で、2学期60時間で教えられる教科書がないというのが理由の1つである。既存の教科書の多くは学習時間を250～300時間と想定しており、オーソドックスな使い方をしたのでは4分の1も進まない¹。とはいえ、覚えるべき語彙を絞ったり、重要とは言えない部分を飛ばして先へ進むというのも難しい。初級の教科書の多くは積み上げ式の教授法を採用しており、前の課で学習した文法や語彙が一定程度定着していることを前提に次の課を学習する仕組みになっている。そのため、そこで学ばずだったものがその先の課に既習事項として出てくれば、結局は教えざるを得ないからである。受講者の大半が半年または1年の短期留学生だったなら、『NIHONGO FUN & EASY』のようなサバイバル会話中心の教科書を使うのも一案であるが、初級2のクラスには学位取得を目指す大学院生が毎学期半数近く（またはそれ以上）いるため、その学生たちのことを考えれば、ある程度の知識の積み上げは必要であろう。「ならば、60時間で無理なく教えられる教材を自前で用意しよう」と考え、その素案を示したのが小山（2020）であった。

2 小山（2020）で述べたこと

2-1 学習内容を見直す

素案を作るにあたって最初に行ったのは「学

習内容の見直し」である。『JF 日本語教育スタンダード』（国際交流基金 2017）では、初級に相当する「A1」と「A2」の到達目標を以下のように定義している²。

【A1】

- ・具体的な欲求を満足させるための、よく使われる日常表現と基本的な言い回しは理解し、用いることもできる。
- ・自分や他人を紹介することができ、どこに住んでいるか、誰と知り合いか、持ち物などの個人的情報について、質問をしたり、答えたりできる。
- ・もし相手がゆっくり、はっきりと話して、助け船を出してくれるなら簡単なやり取りをすることができる。

【A2】

- ・ごく基本的な個人的情報や家族情報、買い物、近所、仕事など、直接的関係がある領域に関する、よく使われる文や表現が理解できる。
- ・簡単に日常的な範囲なら、身近で日常の事柄についての情報交換に応ずることができる。
- ・自分の背景や身の回りの状況や、直接的な必要性のある領域の事柄を簡単な言葉で説明できる。

一方、表2は初級の代表的な教科書3冊の学習内容を示したものである。最も軽い『げんき』でも132の文型と1,700の語彙、317の漢字を学習することになっているが、果たしてこれほど多くの文型や語彙を学ばないと、「身近で日常の事柄について情報交換したり、自分の背景や身の回りの状況を説明したりできる」ようにならないのであろうか。

この疑問の背景にあるのは山内（2009）の調査結果である。山内は『みんなの日本語』で学習する文型・文法が実際のレベルの学習者の発話に頻繁に現れるのかをKYコーパスを使って分析し、「初級文法とは丁寧形の文法、つまり、普通形を作らなくて済む文法である」（山内 2009: 47）と結論づけている。要するに、丁寧形の文法（『みんなの日本語』で言えば1～13課

で学習する文法) さえ使いこなせれば、中級(下)レベルの会話はできるということである。

表2 初級の代表的な教科書の学習内容³

	みんなの日本語	げんき	できる日本語
想定学習時間	300時間	200～250時間	350時間
文型	約150	132	245
語彙	約2,000	約1,700	約1,900
漢字	536	317	326

語彙についても同様である。語彙は多ければ多いほどいいというのは確かであるが、一方で必要な語彙は一人一人違うというのも事実である。例えば、教科書の第1課で自己紹介の練習をする時、趣味に関する語として「映画」や「音楽」「旅行」を教えることに異論を唱える教員はいないであろう。趣味以外の話題・文脈でも頻繁に使う語だからである。しかし、「刺繍」や「山登り」はそれを趣味とする学生にとっては必須語であるが、教科書に載せて学習者全員に覚えさせる必要はなく、そのような語まで取り上げては、覚えるべき語彙の数は無限に広がってしまう。

そもそも「外国語」は学習の初期段階における記憶の負担が大きい。中でも日本語はひらがなとカタカナだけでおよそ100字あり、加えて300字程度の漢字も覚えなければならない。最低限必要な文型・文法だけを先に学習し、文字や語彙は後からゆっくり教えようと思っても、積み上げ式の教科書では文字と語彙もいっしょに学ばなければ先に進めない。非漢字圏学習者への配慮が見られる『げんき』でさえ、アルファベット併記は最初の2課だけで、それまでにひらがなもカタカナをマスターしなければならず、語彙も87語⁴(1課で30語、2課で57語)

覚えなければならない。

そこで、独自教材の開発にあたっては「あれもこれもと欲張らず、週に1度授業の前に60～90分程度自学自習すれば無理なくついていける(完走できる)こと」を基本方針とし、学習内容についても以下のように方針を定めた。

1. 文法は「規則」と「表現」の2つに分けて考え、前者に重点を置く。
2. 語彙は「共有語彙」と「個別語彙」の2つに分け、前者を450語以内に抑える。
3. 話題は各課で学習する文型・文法の使用が不可欠となるものを選ぶ。
4. 文字の学習は急かさず、じっくりと取り組む。

以下、詳細を述べる。

2-2 文型・文法

意識的な文法学習なしに言語を習得することは、子どもは言うまでもなく成人でも十分に可能である⁵。しかし、それには相当量のインプットに触れる必要があり、学びも偶発的・付随的にしか生じないため、効率が悪く時間もかかるという難点がある。それゆえ、本授業のように学習時間が限られている場合には、効率よく習得するための「補助」として文法学習は必要不可欠と考える。

問題は何をどこまで学ばせるかで、本授業では以下の2点からこの問題を考えた。1つは、日本語の初級文法には認知的な処理の観点から「その内側にあるものは教える順番を変えても大きな問題はないが、それを超えて順番を入れ変えることはできない」という大きな「壁」が3つあるという点である⁶。1つは「丁寧形の文法」と「普通形の文法」との間にある壁で、も

う1つは「単文」と「複文」の間にある壁である。『みんなの日本語』で言うと、前者は13課と14課の間、後者は20課と21課の間にあり、ここまでは「形」の学習という言葉でまとめることができるであろう。そして3つ目が、どの教科書でも境界がはっきりしないのだが、「形」の学習と、それをどのような場面や意図で使うかという「機能」の学習との間にある壁である。例えば、受身文である。受身形の活用を覚え、受身文を作れるようになるだけなら「形」の学習と言えるが、何らかの被害を受けたことを強調するために使うという点に着目すれば「機能」の学習ということになる。

もう1つは、文法は「規則」と「表現」の2つに分けられるという点である。例えば、「書いてください」と言えるようになるためには、まずは「書く」という動詞をテ形に変換できなければならない。そして、それには日本語の動詞が大きく五段動詞と一段動詞の2つに分けられることを知っていなければならない。教室用語として理屈抜きに覚えさせる場合を除けば、活用の「規則」に関する知識は必要不可欠である。しかし、それは裏を返せば、テ形の作りさえ知っていれば、そこに「ください」や「います」、「もいいですか」をつけるだけで「表現」の幅は大きく広がるということでもある。同様に、普通形の作りさえ知っていれば、文をつなぐことができ、連体修飾節やトキ節も使えるようになる。

以上の2点を踏まえ、本授業では、従来の積み上げ式教科書に見られる文型・文法の提示順序に基本的に従いながら、「規則」の学習・習得に重点を置き、初級1では丁寧形の活用規則を、初級2ではテ形やナイ形、受身形などの動詞の活用規則を中心に学習を進めることにした(表3)。

表3 初級1と2の学習内容(小山2020)

課	初級1	初級2
1	名詞文	辞書形
2	これ・それ・あれ	テ形
3	存在文	ナイ形
4	動詞文I	タ形
5	動詞文II	可能形
6	助詞	受身形
7	イ形容詞	使役形
8	ナ形容詞	普通形
9	形容詞の過去形	意志形
10	比較	条件形

2-3 語彙

一方、語彙については、文法と違って「AよりBを先に教えることはできない」というような階層性がないという点と、先にも述べたように「必要な語は一人一人違う」という点を考慮し、「個別語彙」と「共有語彙」の2つに分けて考えることにした。前者は学習者個々のニーズに合わせて各自が自主的に覚えるべき語のことで、後者は授業を円滑に進めるために学習者全員に覚えもらう語彙のことを言う⁷。教科書の例文や練習問題、ペアワークは共有語彙だけを使って作るようにし、初級1は250語、初級2はプラス200語を上限とした⁸。使える語彙が限られるため、例文は同じような内容のものばかりになり、教材としては面白味に欠けるが、反面、同じ語に何度も出くわすことで、ある程度自然に覚えられるというメリットもある。

2-4 話題

滞在期間の短い短期留学生のことを考えれば、「デパートで」や「居酒屋で」のような日常生活に直結した場面会話中心の方が喜ばれるのではないかと考えた。しかし、先にも述べたように、初級文法には認知的な処理の観点から見

て3つの大きな壁があり、「理解しやすい順番」というものがある。本授業の主目標を「規則」の学習・習得に置くのであれば、話題の選択においてもその課で学習した規則の使用を促すものを選んだほうが学生たちの負担も少ない。その上で「学生たちが身近な日本人に聞かれそうなことは何か」「そこに何がしかの日本事情的な話題を盛り込めないか」と考えた。

2-5 文字

初級1は非漢字圏出身の短期留学生在が受講者の大半を占めているということもあり、記憶の負担を減らし、規則の学習に一定程度注力できるようにするために、ひらがなの読み書きは学期の前半に数週間かけてゆっくりと習得させることにした。また、カタカナも読みの練習だけを学期の後半に行うことにした。そのため、学習者に配布する「教科書」も以下のように第3週までは例文をアルファベット表記優先で書くようにし、文字も少し大きくした⁹。第4週からは表記の順番を入れ替え、第7週からはひらがな表記だけにした。

第1週～第3週

Watashi wa TANAKA Keiko desu.

わたしは たなか けいこ です。

(I am Keiko TANAKA.)

第4週～第6週

わたしは まいにち べんきょう します。

Watashi wa mainichi benkyo: shi-masu.

(I study every day.)

第7週～第10週

これは おいしくない です。

(This is not delicious.)

漢字については日本語への興味・関心を高めるため、日常生活でよく見かける漢字を毎週4～6字ずつピクトグラムのように記号として学習させることにした。以下(図1)は独自に作成した漢字学習用の教材で、下部のイラストをヒントに各漢字(注・危・禁・止)の意味を推測し、選択肢(a. stop, b. dangerous, c. caution, d. prohibition)の中から選ぶというものである。



図1 漢字学習プリント

2-6 授業の進め方

授業は週2回の授業を「文法」クラスと「会話」クラスに分けて行い、前者ではMoodleにアップロードされた教科書の文法説明(図2)を読み、練習問題の答えを解答用紙(図3)に記入してくることを宿題として義務付けた。授業で教師の説明を聞く前に一度自分で考えてみることで疑問が生まれ、その疑問を授業で解消することで理解がより深まると考えたからであ

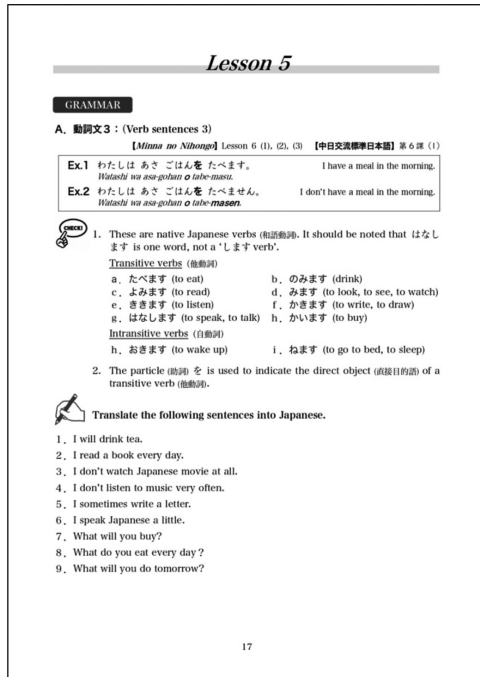


図2 初級1教科書(第5課)

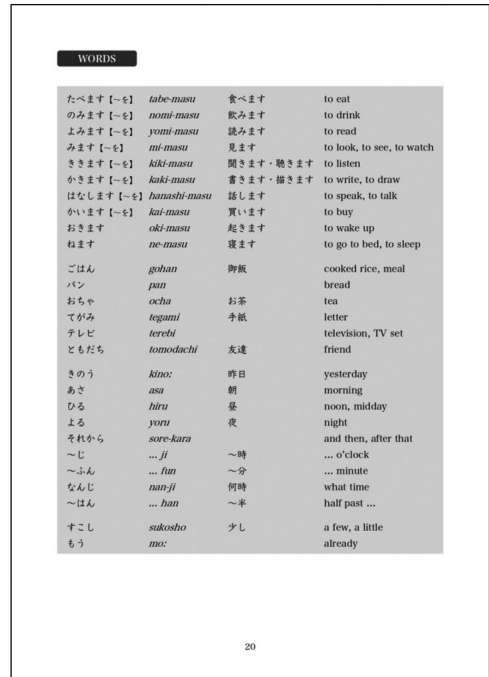


図4 教科書語彙リスト(第5課)

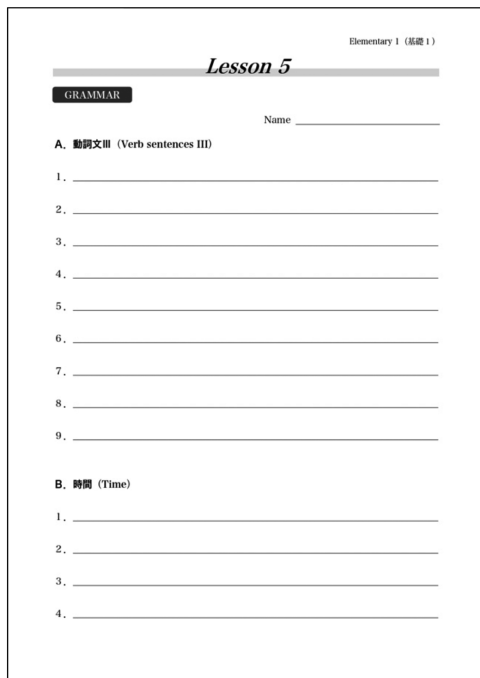


図3 解答用紙(初級1:第5週)

る。また、問題は英文和訳が中心で、各課の最終ページにある語彙リスト(図4)を参照すれば解けるようになっている¹⁰。なお、解答は「アルファベット表記可」とした。練習のために学習途上のひらがなで書かせたいところであるが、それを義務付けると、答えを書くだけで時間がかかり、学生たちの意識が文法より文字を書くことに向いてしまう。そのため学生たちには「今学期の終わりまでにひらがなで書けるようになればいい」と伝え、まずは文法の理解に注力できるようにした。そして授業では、筆者が補足説明をしながら練習問題の解答をした後、市販のリスニング教材やインフォメーション・ギャップ・タスクを使って活動中心で進めることを提案した。ただし、具体的に何をどうするかについては述べておらず、今後の課題として残された。

以上が小山（2020）で述べた内容（概要）である。しかし、その後実際に授業を始めてみると、いくつか改善すべき点が出てきたため、今回授業内容を再度見直すとともに授業の進め方についても改めて検討することにした。

3 学習内容の見直し

表4は改訂した2024年度後期のシラバスである。初級1の主たる学習内容はこれまでどおり「丁寧形の活用」で、提示順序を一部変更した程度で大きな変更はない¹¹。初級2についても「動詞の活用規則」という方針に変更はないが、受身形・使役形・意志形・条件形の4つを外し、学習内容を大幅に削減した。代わりに、初級1で学習していたマス形を使った文型の一部（例、「～ませんか」「～ましょう」など）を第1課で学習し、テ形・タ形・普通形の3つを2週に分けて学習することにした。結果、本授業の学習範囲は初級1は丁寧形の活用規則（最初の壁まで）、初級2は普通形の活用規則（第2の壁まで）となった（巻末資料1・2）。

表4 初級1と2の学習内容

課	初級1	初級2
1	名詞文	マス形
2	これ・それ・あれ	辞書形
3	存在文	テ形Ⅰ
4	動詞文Ⅰ	テ形Ⅱ
5	動詞文Ⅱ	ナイ形
6	助詞	タ形Ⅰ
7	イ形容詞	タ形Ⅱ
8	ナ形容詞	可能形
9	形容詞の過去形	普通形Ⅰ
10	比較	普通形Ⅱ

一方、語彙については初級1が200語から243

語に増えたが¹²、初級2は196語に抑え、全体で439語とした（巻末資料1・2）。

4 授業の進め方に関する新たな工夫

4-1 反転授業

授業の進め方については、「反転授業」（バークマン&サムズ2014）の考え方を新たに取り入れた。

反転授業は、アメリカの高校で化学を教える2人の教師が、部活動の遠征試合などで授業を休まざるを得ない学生たちのために実験の様子をビデオカメラで撮影し、それをいつでもどこでも見られるようにしたのが始まりである。その後、2人は「それまで学生たちの目の前であるのが当たり前だと思っていた実験を録画し、それをクラス全員が事前に視聴してくれたなら、これまで十分な時間をかけられなかった実験後の応用課題にじっくりと取り組ませることが出来る」という点に気づく。こうして生まれたのが、文字どおり、授業と自宅学習の役割をひっくり返した反転授業であった。これを日本語の授業に当てはめると、それまで授業であるのが当たり前だと思っていた文型導入を事前に文法書を読むなどして予習させれば、より多くの時間を会話などの応用練習に使えるようになるということである¹³。

以下はスリーエーネットワークのホームページに掲載された『みんなの日本語』の指導手順である¹⁴。

- ①文型1の新出語彙の導入
- ②文型1 導入・練習A・B・C
- ③文型2の新出語彙の導入
- ④文型2 導入・練習A・B・C
- ⑤会話表現の導入

⑥会話

⑦問題（宿題）

これは Audio-Lingual Method の「①理解→②模倣→③反復→④変化→⑤選択」という指導手順に沿ったもので、従来型の授業では学習者に予習させることは想定しておらず、新たな学習はその課の新出語彙と文型を導入するところから始まる¹⁵。授業後に行うのはその日の復習（⑦問題）や語彙の暗記、文字の練習などである。

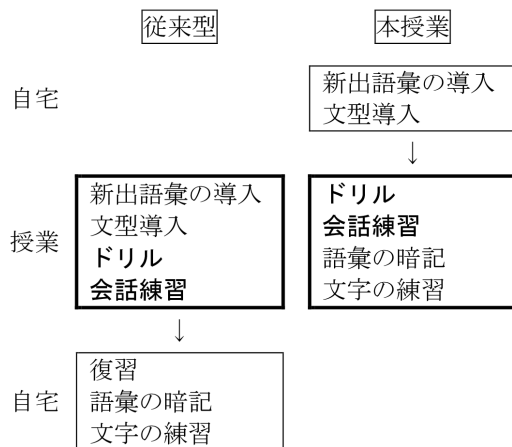


図5 従来型の授業との比較

現実問題として、週に1～2度クラスに来るだけで日本語を上達させることは難しい。そのため、何某かの自学自習は必要である。小山(2020)ではそれを復習ではなく予習に使うことを提案したのだが、語彙の暗記や文字の練習は相変わらず学生たちの自助努力に委ねていた。しかし、その努力ができる学生とそうでない学生の差は大きく、学期の後半になってもひらながなが読めない学生が何人かいた。そこで、現在はそれを授業内で行うようにしている（図5）。文法の予習を義務付ける一方で、自宅学習の一部を授業に取り込むことで、授業と自宅学

習の重点・役割を反転させたわけである。それが、前回は使わなかった「反転授業」という用語を本稿で使用した理由でもある。

4-2 反転授業の利点

実感レベルではあるが、反転学習の利点は3つあるように思われる。1つは授業で教師の説明を聞く前に一度自分で考えてみることで「理解がより深まる」という点で、これは前稿でも述べた。

2つ目は文型導入後に行う「言語活動の効果が高まる」という点である。従来型の授業では新たな文型と語彙を学習した直後にドリルをし、ペアワークなどの運用練習へと進んでいた。理解の早い学生たちはそれでも問題なかったが、そうではない学生たちは完全には理解できないまま、どこかモヤモヤした気持ちを持ちながら練習していたように感じられた。しかし、予習で生じた疑問を授業の冒頭で解消すれば、すっきりとした状態でその後の練習に取り組むことができ、練習の効果も高まると期待される。

3つ目は「自学自習の負担を減らせる」という点である。何かを覚えるというのは非常に単調で退屈なものである。自分が受験生だった時のことを思い返してみても、通学時や昼休みなど、ちょっとでも時間があればコツコツと英単語を暗記する努力ができたのは、受験という人生を左右する一大事が目前に迫っていたからであって、それと同じ努力を本授業の受講者に求めることはできない。彼らにとって最優先事項は学位の取得や建築デザインの勉強であって、少しでも時間があれば、その時間を自分の研究に使おうとするのは当然であろう。一方、文法の予習は短時間で集中して行えるため、例えば「日曜日のこの時間だけは日本語の学習に使う」というように割り切って取り組むことができ

る。また、説明を読んで文法規則を学習し問題を解くというのはどこかパズル的な要素があり、学生たちも楽しんで行えるであろうし、他の学生と相談しながら行うこともできる¹⁶。

4-3 暗記は授業内で

問題は、語彙の暗記や文字の読みの練習を授業内の限られた時間でどう行うかである。語彙については先に述べたように覚えるべき語（共有語彙）を大幅に減らし、練習問題や例文に同じ語彙が何度も出てくるようにすることで、ある程度自然に覚えられるようにした。また、教師が読み上げた語彙を聞いて意味（英語）を選ぶクイズを各課の終了時（または終了後）に行うことにした¹⁷（図6）。

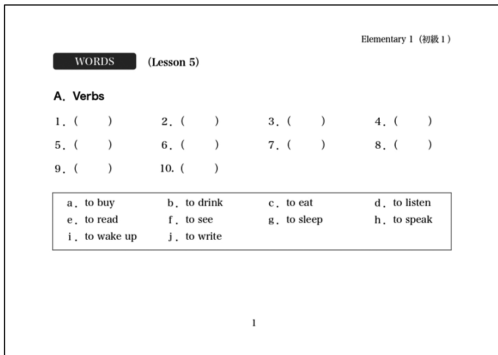


図6 語彙タスク（初級1：第5課）表面

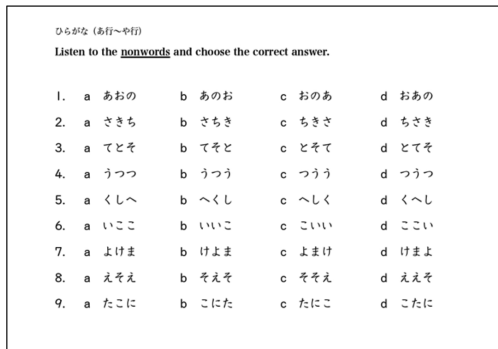


図7 ひらがなタスク（あ行～や行：表面）

文字については、まず、読み書き以前の「文字の認知」から練習を始め、毎回五十音表を2行（10文字）ずつ覚えさせることにした。具体的には「い・こ」や「さ・き・ち」など、形のよく似たひらがなで無意味語のセットを作り（図7）、教師が読み上げた語を選ぶという練習を毎回授業の冒頭に行う¹⁸。

4-4 予習の予行練習

予習を徹底させるために新たに始めたのが「予習の予行練習」である。これは、本来は授業前に行うべき文法の予習を、第1週の授業で一度だけ授業内で行うというもので、学生たちは1人黙々と練習問題を解き、頃合いを見計らって答え合わせを行う。結果として授業時間の大半を（他の学生とほとんど交流することなく）個人学習に費やすことになるのだが、それがこちらの意図するところで、授業の終わりに学生たちに以下のように話している。

「これでわかったと思いますが、授業で文法を勉強するのは時間の無駄です。みなさんは文法を勉強するためではなく、日本語を話せるようになるためにこのクラスに来ているのでしょうか？ならば、文法は来週からうちで勉強し、クラスではたくさん話す練習をしましょう」

そして、翌週からは宣言どおり文型導入はせず、答え合わせから始める。授業の流れ（事前に何をし、授業で何をするか）を理解することで主体的に学ぶ姿勢を身につけさせ、ゼミの発表準備などでたまに出席できないことがあったとしても、自学自習によって補い、途中でついていけなくなるというようなことがなくなるようにしようと考えた。

5 授業の流れ：初級1クラス

初級1の2024年度後期の受講者は19名で、全員が建築デザイン等の勉強に来た短期留学生である。この中には既習者が4名(全員非漢字圏)含まれている¹⁹。出身地域別の内訳は非漢字圏出身者が14名、漢字圏出身者が5名である。

授業は以下の3点を目標に進めた。

1. 丁寧形の活用をマスターすること
2. 助詞の基本的な意味と使い方を理解し、文が作れるようになること
3. ひらがなの読み書きとカタカナの読みができるようになること²⁰

以下、第5課の「動詞文2」を例に進め方の手順について解説する。

第5課(動詞文2)の場合

1日目

- ①文字の読みの練習
- ②予習の答え合わせ
- ③タスクA
- ④タスクB

2日目

- ①文字の読みの練習
- ②語彙の確認
- ③トピック会話
- ④漢字の学習
- ⑤その他

なお、小山(2020)では1日目を文法クラス、2日目を会話クラスとしていたが、現在はそのようなはっきりとした区分は行っていない。

1日目

①文字の読みの練習

授業では最初にひらがな(カタカナ)の練習を行う。学生たちには授業開始前のコースオリエンテーションで国際交流基金のEラーニングシステム「MINATO」(<https://minato-jf.jp>)にアクセスし、ひらがなを自学自習しておくよう指導しているが²¹、習得状況は学習者によって異なる。そこで、4-3で述べた「文字の認知」に焦点を当てたタスク(図7)を使い、毎回五十音表を2行(10文字)ずつ覚えさせていく。スケジュールは巻末の資料1に示したとおりである。

ひらがな(ここでは「あ行~や行」)の定着が確認できたら、次に語彙レベルで読みの練習を行う。図8のタスクシートを配布し、ペアまたはグループで一語一語読む練習した後、スライド(図9)を見ながら全員で答えを確認する。ここに出てくる語彙の中には共有語彙の範囲外のものもあるが、学生たちには「これはひらがな

ひらがな語彙(あ~や行)				
Read aloud in pairs.				
ここ	そこ	あそこ	せかい	うみ
やま	はな	いぬ	ねこ	むし
うち	へや	いけ	えき	みせ
ちかてつ	ふね	なつ	あき	ふゆ
あめ	ゆき	あさ	のみもの	にく
さかな	やさい	すし	おかし	おさけ
つくえ	いす	かさ	くつ	くつした
ふく	かお	あし	ひと	ちち
はは	あね	あに	むすめ	むすこ
うえ	した	すき	あつい	さむい
あたたかい	たかい	やすい	すこし	あか
あお	こたえ			

図8 ひらがな語彙タスク(あ行~や行)



図9 ひらがな語彙タスク(スライド)

なの読みの練習であって語彙の練習ではないので、これらの語の意味を覚える必要はない」と伝えている²²。

② 予習の答え合わせ

文字の読みの練習が終わったら、次は学生を1人ずつ順番に指名しながら予習の答え合わせをする²³。その際、PowerPointを使ってスクリーンにも正解を投影し、学生たちはそれを見ながら自分で(図3の解答用紙に書いた)答えを添削する。間違えた時や疑問が生じた時はその場で質問し、疑問を解消する。

③ タスクA

疑問が解消されたら、文法フォーカスのタスクを使ってその日学習した文型の定着を図る。図10は「曜日」と「時間」、「～から～まで」の使用を促すタスクで、学生たちはこれを手元に

置いて(相手から見える状態で)、互いに質問し合い、空欄を埋める。この間教師は介入せず、学生たちは質問がある時に教師を呼ぶ。

見た目的には Information-gap task であるが、していることはドリル(例、『みんなの日本語』の練習Bや練習C)と変わらない。違いは、教科書を見ながら教師主導で練習するのではなく、教師の手を離れ、他の学生とペアで、時に相談しながら練習する点である。そのため、学生たちには自主的な会話の練習をしているように感じられるようである。




④ タスクB

タスクAが終わったら、もう1つ別のタスクを行う。図11は「～時に～ます」と「～時から～時まで～ます」という2つの文型の使用を促すタスクで、「田中さんは何時に起きますか」、「何時から何時まで勉強しますか」と聞き合

Elementary 1 (初級1)

Student A





1. Ask and answer questions. Fill in the blanks.

Ex.    

にほんご (nihongo) りょうり (ryouri) いけばな (ike-bana) ダンス (dance)

Wednesday _____ day Monday _____ day

10:00-12:00 _____ - _____ 13:00-14:30 _____ - _____

4.    

さどう (sa-dou) しゅうじ (shu-ji) とうげい (tou-gei) カラオケ (karaoke)

_____ day Friday _____ day Sunday

_____ - _____ 17:00-19:00 _____ - _____ 14:00-15:30

Q: にほんごのクラスは なんようびですか。 [What day of the week is Japanese class on?]
 Nihongo no kurasu wa nan-youbi desu ka?
 A: すいようびです。 [It's on Wednesday.]
 Su-youbi desu.
 Q: なんじから なんじまでですか。 [From what time until what time?]
 Nan-ji kara nan-ji made desu ka.
 A: 10じから 12じまでです。 [From 10 to 12.]
 Ju-ji kara ju-ni-ji made desu.


1

図10 タスクA (初級1：第5課)

Elementary 1 (初級1)

Student A

2. This is Ms. Tanaka's daily activities. Ask and answer the questions. Fill in the blanks.



2

図11 タスクB (初級1：第5課)

う。これも見た目的にはInformation-gap taskであるが、していることはドリルである。

以上が1日目の授業内容である。課によってはタスクA・Bの前にタスクの遂行に欠かせない語彙の確認をしたりすることもあるが、答え合わせが終わったら、「活動中心で授業を進める」という基本方針は変わらない。

2日目

①文字の読みの練習

2日日も1日目と同様、図7のタスクを使ってひらがなの読みの練習をするところから授業を始める。前回の正答率が低かった場合には同じタスクを再度行った上で次のタスクを行う。その後、ひらがな語彙の読みのタスク（図8）を行うのも1日目と同じである。

②語彙の確認

前の課（ここでは第4課）で学習した語彙の確認タスク（図6）を行う。

③トピック会話

この課の話題である「週末の出来事」について、自分が週末に実際にしたことを、前日のタスクで練習した「～時に～ます」と「～時から～時まで～ます」などの文型を過去形に変えて話す練習をペアで行う。時間に余裕があれば、ペアを変えて2～3度繰り返し練習する。

④漢字の学習

2-5で示した漢字タスク（図1）を使って、日常生活でよく見かける漢字の学習を行う。漢字に興味を持ってもらうための練習であるため、覚えることは要求しない。

⑤その他

最後に、時間に余裕があれば、ひらがなの書きの練習を行ったり、市販の教材を使ってリスニングの練習を行ったりする。

6 授業の流れ：初級2クラス

初級2の2024年度後期の受講者は12名で、内訳は非漢字圏出身者が7名、漢字圏出身者が5名である。短期留学生と正規学生（院生・研究生）が混在するクラスで、以下の3点を到達目標とした。

1. 動詞の活用（辞書形・ナイ形・テ形・タ形・可能形）がスムーズにできるようになること
2. 普通形の活用が一定程度スムーズにできるようになること
3. 「子供の時の夢と今の夢」や「日本へ来てからの生活の変化」などの身近な話題について辿々しいながらも話せるようになること

以下、第2課の「辞書形」を例に進め方の手順について解説する。

第2課（辞書形）の場合

1日目

- ①活用の練習
- ②予習の答え合わせ
- ③タスクA
- ④タスクB

2日目

- ①語彙の確認
- ②活用の練習
- ③タスクレビュー
- ④トピック会話
- ⑤その他

1 日目

①活用の練習

授業は PowerPoint を使ってクラスで辞書形の活用を練習・確認するところから始める。

②予習の答え合わせ

活用がある程度スムーズにできるようになったら、初級 1 と同様、1 人ずつ順番に指名し、予習の答え合わせを行う。その後学生の質問に答え、疑問点を解消する。

③タスク A

最初にこの課で学習する「〇〇さんの趣味は（辞書形）ことです」と「〇〇さんは（辞書形）のが好き／上手です」の 2 つの文型を使って自分の趣味や特技について話す練習を行う。学生たちはタスクシート（図12）を手元に置いて互いに質問し合う。その間教師は机間巡視を行い、学生の質問に答える。これも初級 1 と同じである。

④タスク B

次に、この課で学習する文型の練習と初級 1 で学習した文型の復習を兼ねたタスク（図13）を行う。テーマは「子供の時の夢と今の夢」で、タスク A で練習した「～は（辞書形）ことです」と「（辞書形）のが好きです」に加え、もう 1 つ「（辞書形）のは～です」を非過去と過去の両方で使わせる。また、初級 1 で学習した「～たいです」と「～ます／ですから」を使って、なぜそのような夢を持つようになったのかについても話させる。教師の役割はここでも机間巡視と、学生たちの質問に答えることが中心である。

Elementary 2 (初級2)

Student A

Work in pair. Ask and answer the questions.

○〇さんのしゅみは _____ ことです。
 ○〇さんは _____ のがすきです/じょうずです。

	しゅみ	すき	じょうず
たなか	?	?	?
なかもら	かいものします	おいしいもの たべます	ピアノ ひきます
やまもと	?	?	?
よしだ	えいが みます	しゃしん どります	おかし つくります
こが せんせい	?	?	?
いのうえ せんせい	ほん よみます	おんがく ききます	おしえます

1

図12 タスク A（初級 2：第 2 週）

Elementary 2 (初級2)

Student A

Explain about current and childhood dream of each person.

	こどものとき		いま	
	ゆめは？	どうして？	ゆめは？	どうして？
たなか	パンや はたらきます	まいにち パン・たべます 【～たい】	せんせい なります	べんきょう おしえます 【おもしろい】
なかもら				
やまもと	ピアニスト なります	ピアノ ひきます 【すき】	アメリカ いきます	えいご べんきょうします 【～たい】
よしだ				
こが	がが なります	え かきます 【すき】	えいがのかいしゃ はたらきます	えいが つくります 【～たい】
いのうえ				

2

図13 タスク B（初級 2：第 2 週）

2日目

①活用の練習

2日目も初日と同様、PowerPointを使って辞書形の活用を練習・確認するところから始める。その後、教師が読み上げた活用形を聞き、意味を選ぶ練習を行う(図14)。

Elementary 2 (初級2)

LISTENING

1. Listen and choose the meaning of the words.

1. () 2. () 3. () 4. ()
 5. () 6. () 7. () 8. ()
 9. () 10. () 11. ()

a. to buy	b. to come	c. to eat	d. to make
e. to play	f. to read	g. to speak	h. to swim
i. to teach	j. to wait	k. to watch	

図14 活用タスク(初級2:第2週)

②語彙の確認

次に、教師が読み上げた語彙を聞き、意味を選ぶ練習を行う。形式は初級1(図6)と同じである。

③タスクレビュー

1日目に行った2つのタスクの復習するのがタスクレビュー(図15)である。中でもタスクBはこの課で学習した文型だけでなく、初級1で学習した「～たいです」などの文型も非過去と過去の両方で使うため、難易度がかなり高い。学生たちは悪戦苦闘しながらどうにかタスクを完遂するが、定着には程遠い状態である。そこで、タスクシートの文字だけを抜き出したハンドアウトを用意し、今度は正確かつ流暢に文が言えるようになるまで各自練習を行う。

従来の教授法では、小さな単位から大きな単

位へと練習が進むのが原則で、語から文、文から談話へと(教科書の文字を見ながら)ドリルを繰り返した後、最後にinformation-gap taskなどを使った会話練習をするのが一般的であった。しかし、本授業ではタスク練習をした後にドリルをするという逆の順序になっている。

Elementary 2 (初級2)

Lesson 2 Task Review

Practice until you can say it fluently.

A. 今の夢 (current dream)

(1) のゆめは dic. form ことです。 My dream is

- たなかさん・ゆめ・せんせい・なります (田中さん・夢・先生・なります)
- なむらさん・ゆめ・にほんごのせんせい・なります (中村さん・夢・日本語の先生・なります)
- やまもとさん・ゆめ・アメリカ・いきます (山本さん・夢・アメリカ・行きます)
- よしださん・ゆめ・いしゃ・なります (吉田さん・夢・医者・なります)
- こがさん・ゆめ・えいがのいしゃ・はたらきます (古賀さん・夢・映画の会社・働きます)
- いのうえさん・ゆめ・としょかん・はたらきます (井上さん・夢・図書館・働きます)

(2) は verb-stem たいです。 I want to

- たなかさん・せんせい・なります (田中さん・先生・なります)
- なむらさん・にほんごのせんせい・なります (中村さん・日本語の先生・なります)
- やまもとさん・アメリカ・いきます (山本さん・アメリカ・行きます)
- よしださん・いしゃ・なります (吉田さん・医者・なります)
- こがさん・えいがのいしゃ・はたらきます (古賀さん・映画の会社・働きます)
- いのうえさん・としょかん・はたらきます (井上さん・図書館・働きます)

図15 初級2タスクレビュー(第2週)

④トピック会話

最後に、この課で学習した文型を使って、学習者自身の「子供の時の夢と今の夢」について話す練習をする。図16はその時配布しているハンドアウトである。1ページ目の冒頭に「子供の時の夢は何でしたか。どうしてですか」と「今の夢は何ですか。どうしてですか」という2つの質問があり、その下に「役に立つ表現」を「今の夢」と「子供の時の夢」の2つに分けて示し、モデル文を提示してある。

Elementary 2 (初級2)

Lesson 2

TOPIC

子供の夢の夢 (My Childhood Dream)

Answer the questions below.

Q1. こどものとき、ゆめは 何でしたか。どうしてですか。
子供の時、夢は何でしたか。どうしてですか。
What was your dream when you were a child, and why?

Q2. いまのゆめは 何ですか。どうしてですか？
今の夢は何ですか。どうしてですか。
What is your dream now, and why?

役に立つ表現 (Useful Expressions)


A. 今の夢 (current dream)

(1) わたしのゆめは dic. form ことです。 My dream is ...

(2) わたしは verb-stem たいです。 I want to ...

(3) dic. form のは adj. ですから。 because ...ing is ...
 dic. form のが すきですから。 because I like ...ing.
 verb-stem たいですから。 because I want to ...

Read the paragraph.

1.  わたしのゆめは がっこうのせんせいになることです。
こどもに べんきょうを おしえるのは たのしいですから。
私の夢は学校の先生になることです。
子供に勉強を教えるのは楽しいですから。


2.  わたしは しょうらいりょうこうがいしゃで はたきたいです。
がいこくへ いくのは おもしろいからです。
私は将来銀行会社で働きたいです。
外国へ行くのは楽しいですから。

図16 トピック会話 (第2課)

⑤その他

時間的に余裕があれば、市販の教材を使ったリスニングの練習などを行う。

7 評価 I : 受講者の感想

授業の最終日に Google Form を使って記名式で授業評価を実施した。初級1は受講者19名中16名がコースを完走し、既習者4名を除く12名中11名が回答した²⁴。また、初級2は12名全員が完走し、11名が回答した。結果は以下のとおりであった。

①満足度と有用度

最初に「本授業にどの程度満足しているか」と「本授業はどの程度役に立ったか」の2点を5段階で評価してもらった。結果は表5のとおりである。

表5 本授業の満足度と有用度

	初級1		初級2	
	満足度	有用度	満足度	有用度
5	11	10	10	10
4	0	1	1	1
3	0	0	0	0
2	0	0	0	0
1	0	0	0	0
平均	5.00	4.91	4.91	4.91

授業に満足した理由について尋ねたところ、初級1については「多くのことを学べた(知識量)」という回答が最も多かった。次に多かったのは「おもしろかった」や「説明が明確だった」「他の学生とたくさん話せた」などの教え方・授業内容に関する記述であった。

知識量	7人
教え方・授業内容	5人
クラスの雰囲気 ²⁵	3人
進歩の実感	1人

一方、初級2については「宿題が適量であった」や「説明に十分な時間をとってくれた」などの教え方・授業内容に触れた記述が一番多く、次に多かったのは「たくさん質問できた」や「プレッシャーがなかった」などの「クラスの雰囲気」に関連した記述であった。

教え方・授業内容	5人
クラスの雰囲気	4人
知識量	3人

役に立ったと感じた理由についても聞いてみた。初級1では「学習の成果を日常生活で感じている(進歩の実感)」という回答が6人と一番多く、そのうち3人は聞く力の進歩、2人は話

す力の進歩について言及していた。また、この授業を受けたことで「日本語を学び続けたいと思うようになった」や「今後の学習の基礎となった」といった今後への影響について触れたコメントも2件あった。

進歩の実感	6人
今後の学習への影響	2人
その他 ²⁶	3人

一方、初級2では「文法をよく理解できた」や「語彙が増えた」などの知識面での進歩に触れた記述がもっとも多かった。次に多かったのは「日本語が少し話せるようになった」や「会話を理解するのに役立った」という実用面に関するコメントであった。

言語知識の増強	6人
会話力・理解力の進歩	5人

②授業の難易度と予習の大変さ

次に「本授業は難しかったか」と「予習は大変だったか」の2点について同じく5段階で評価してもらった。逆転項目のため「強く不同意」が5、「強く同意」が1である。

表6 本授業の満足度と有用度

	初級1		初級2	
	難易度	大変さ	難易度	大変さ
5	0	1	1	3
4	4	7	2	7
3	4	2	3	1
2	2	1	5	0
1	1	0	0	0
平均	3.00	3.73	2.91	4.18

結果(表6)を見ると、初級1の学生たちは授業は「難しくなかった」あるいは「難しくも易しくもなかった」と感じ、予習についても大変とは感じていなかったようである。それに対し、初級2の学生たちは予習は大変ではなかったが、授業は「少し難しかった」と感じていたことがわかる。

③予習の効果と語彙量

「予習は授業の理解に役立ったか」と「語の量は適当だったか」についても聞いてみた。結果は表7のとおりで、「強く同意」が5、「強く不同意」が1である。

表7 本授業の満足度と有用度

	初級1		初級2	
	予習	語彙	予習	語彙
5	4	3	9	2
4	7	8	2	6
3	0	0	0	3
2	0	0	0	0
1	0	0	0	0
平均	4.36	4.27	2.91	4.18

初級1の学生も初級2の学生も予習が役に立ったと感じてくれたようである。初級1よりも初級2の方が「強く同意」が多いのは、授業内容の難しさ(表6)が影響したのかもしれない。また、語彙の量についても概ね適当だったようである。

④もっと勉強したかったこと

「もっと勉強したかったことは何か」と聞いてみたところ、初級1では語彙や漢字などの知識面に触れた学生が6人いた。次に多かったのが会話の練習で、中でも自分を自由に表現する時間を増やしてほしいというものであった。

語彙・漢字など	6人
会話の練習	4人
日本の文化	1人

語彙や漢字などの知識面を指摘する回答がもっとも多かったのは初級2も同様で5人いた。ただし、初級1では語彙が多かったのに対し、初級2では漢字が多かった点がやや異なる。その次に多かったのは、日常会話で役立つ表現で、具体的にはコンビニのレジや病院の電話予約などの日常会話や、丁寧形と普通形の使い分けなどであった。

語彙や漢字など	5人
日常会話で役立つ表現など	3人
日本の文化	1人

⑤ 提言・要望など

最後に今後に向けた提言・要望について聞いてみたところ、初級1・初級2ともに多かったのは「授業の期間と時間数を伸ばしてほしい」というものであった。その他では「漢字をもう少し」「日常生活で役立つ実用的な会話」「教師が日本語で話す時間」などがそれぞれ1～2件あった。授業の期間と時間数は筆者個人で決められることではないが、その他の意見については次学期以降の課題としたい。

8 評価Ⅱ：授業を見学した教員の感想

筆者の授業は「原則公開」としており、今年は現職の日本語教員が8人授業見学に来ている。そのうち6人において、本授業を見学して感じたことをレポートしてもらった。以下、その一部を①反転授業、②授業と教材、③学生たちの様子、④その他の4つに分けて紹介する²⁷。

教員A	日本語教育歴9ヶ月
教員B	日本語教育歴6ヶ月
教員C	日本語教育歴6ヶ月（3回見学）
教員D	日本語教育歴6年（ほぼ毎週見学）
教員E	日本語教育歴9年
教員F	他大学専任教員（2回見学）

① 反転授業について

予習先行型の授業にすることで、学習者が疑問・意欲を持って授業に臨むため、より深い理解ができることを目の前で感じた。【教員A】

学習者は教員の話をすぐに理解し、わからないところだけ質問する。反転授業でスムーズに授業が進んでいく。【教員B】

授業内は教員に質問も多くあり、文法上わからないことがあれば教員が適宜適切に答えていた。学習者がその後納得した表情で取り組んでいたのが印象的である。【教員D】

② 授業と教材について

その日の文型だけでなく、既習の文型をフルに活用して会話を促すようなハンドアウトを作っていて、学習者が自発的に多くの会話を生み出してとても楽しそうに会話をしていたのが印象的だった。【教員A】

ペアワークでは1枚のプリントだけで、学習者は楽しそうに会話を続ける。まるで魔法のようなプリントだと思った。こんな授業もあるんだということを知ることが出来て、良かった。【教員B】

学習者は概ね予習を完了して授業に参加しているようだった。予習をしてきている学習者

と、予習が足りない学習者とは少し授業についていけないレベルに差が感じられた。予習が足りなかった学習者は、次の授業では予習をしているようだった。【教員D】

学習者同士で日本語の練習をする際に、導入がスムーズでお互いにペアワークがすぐに来ていた。【教員D】

③ 学生たちの様子について

回を重ねるごとに、学習者が勉強のペースにも、授業の雰囲気にも馴染んできて、楽しく学習しているようだった。【教員D】

学習者がタスクに対して自分で解答を考えて、口答で練習していたので、終盤の授業風景では日本語を積極的に話していた。【教員D】

学習者は受講したあと、日本での日常生活に役立てたい、日本の文化を理解したいと言う気持ちが深まっているように感じられた（実際そのように学習者が話していた）【教員D】

④ その他（自身の授業への応用など）

特に印象深かった点は文型練習。これまで見たり実施したりしてきた授業は、教師が絵などのキューを出して進めるような教師主導の練習が主であったが、この授業は受講者同士のQA練習がメインだった。とても活発な雰囲気、教師も学習者一人ひとりをしっかりと見て回り、質問等にも対応していた。早速、自身の授業にも取り入れている。学習者同士の日本語での発話量も増えたように感じている。【教員E】

非漢字圏の学生に漢字を教えているが、多く

の学生が漢字の習得をあきらめたり、漢字に対して苦手意識を持って練習を中断してしまう。授業を見学したことで、漢字を正しく書くことよりも漢字を識別し、読めるようにすることに重点を置く方法が、学生の苦手意識を軽減する上で非常に有効であると感じた。来学期からは、このアプローチを取り入れて指導していく予定である。【教員F】

養成講座では、教師主導のドリル練習の方法を主に習っていたが、本授業での学生主体のドリル練習の方法を見て共感し、自分の授業（日本語学校・1クラス20人以上・アジア系の学生が主）でも実践してみた。評価すべき点としては、教師主導のドリルでは、個人の口のまわり具合をチェックしてあげる事ができず、全体コーラスの中でおそらく声を合わせられずもれていた学生が、学生主体のペア練習においては、個人のペースで発声できていたことが挙げられる。また、機械的な反復ではなく、考えて文法を組み立てることができていたと思われる。危惧される点としては、人数が多く学習意欲やレベルもまちまちなクラスにあって、ペア練習の時間がぐつぐつ時間になってしまっている学生がいること、文法を間違ったまま練習している学生を発見するのが困難なこと、発声せずに書くことに一生懸命になっている学生もいることなどがあげられる。加えて、週5人の教師に習っている学生にとって、教師ごとのスタイルに合わせるのが困難なようにも推察される。【教員C】

9 提言：地域の日本語教室にこそ反転授業を！

最初にも述べたように、本授業は留学生向け

のサービスとして行っている所謂「課外授業」であり、授業時間数は1学期30時間と少なく、単位も出ない。そのため、以前は途中で辞めてしまう学生が多く、学期の終盤には出席者がゼロという日も何度かあった。理由としては「学習意欲がそこまで高くはなかった」「途中で何度か休んだ結果、授業についていけなくなった」「ひらがなを覚えられなかった」などが考えられた。

一方、地域の日本語教室が恒常的に抱える問題として当時から時折耳にしていたのは「最初はたくさん来るがすぐにやめてしまう」や「レベルがバラバラでどう教えていいかわからない」といった声であった。置かれた環境は異なるものの、互によく似た問題を抱えていたこともあり、本授業の改善策を検討するにあたっては、当初からその過程で得た知見や経験を何らかの形で地域の日本語教室への提言としてまとめたいと考えていた。それが本稿を執筆した理由の1つである。

地域の日本語教室で教える教員たちと接していて感じるのは、目の前の外国人のために何かをしたいという熱意に溢れる一方で、先に述べた問題を週に1度2時間程度しかない授業内で、それも教員個人の努力と工夫によって解決しようとする人が少なくないという点である。しかし、それはどう考えても無理である。

例えば教科書である。表2に挙げた3冊は地域の日本語教室でもよく使われているが、これらを「120分×週1回×年40週」という（地域の日本語教室で一般的な）スケジュールで勉強した場合、一通り学び終わるのにどのくらい時間がかかるか考えてみてほしい。一番短い『げんき』でも2年半から3年、『みんなの日本語』なら4年弱、『できる日本語』は2年弱から4年数ヶ月である。それも「一度も休まず通い続け

たとして」である。これから日本で大きな不安を感じることなく暮らしていくために日本語を学ぼうとする人たちに対してこれはさすがに長すぎる。これではなかなか進歩を実感できず、途中で辞めてしまった（諦めてしまった）としても不思議ではない。学習者の気持ちを考えれば、半年でA1レベル、1年～1年半でA2レベルまで行きたいものである。しかし、それを教科書を変えることなく使い方を工夫することで実現するのは極めて難しい。学習内容を大胆に絞る（精査する）ことが必要不可欠であり、それが小山（2020）の執筆動機であった。

教え方についても同様である。4-1でも述べたように、積み上げ式の教授法では新たな学習はその課の新出語彙と文型を導入するところから始まる。しかし、そんなことをしては肝心の運用練習に十分な時間を割くことはできない。授業時間が限られている場合には「授業の役割」を見直すこと、即ち、「教室外で一人でできることは何か、教室内で他の学生や教員と一緒にすべきことは何か」と考えることが重要であろう。

これまで文型導入を授業内で行ってきたのは、英・中・韓以外の言語で書かれた文法解説書が入手困難だったからである。しかし、今は様々な言語で書かれたものが出版されており、Google 翻訳の精度もかなり上がっている²⁸。もはや文法など教師が教える必要はないのである。ゆえに、「地域の日本語教室にこそ反転授業を導入すべき」というのが筆者の主張である。

反転授業には4-2で述べた3つの利点のほかにもう1つ重要な利点（可能性）がある。それは学習者に能動的かつ主体的な学習姿勢を身につけさせるのに役立つという点である。繰り返しになるが、外国語は何の準備もせず、ふらっと教室にやってきて週に1度2時間勉強す

るだけで上達するようなものではない。学習者が自ら進んで学ぼうとしない限り、授業の仕方をどう工夫しようと、さして効果はないのである。ならば、予習を促すことで学び方を指導し、予習で浮かんだ疑問を持って教室に来るように仕向けることで受身な学習態度を変えさせることが重要であろう。その結果、「予習→授業→復習」という「学びのサイクル」を根付かせることができれば、教育効果が高まるだけでなく、途中でやめてしまう学習者を減らすことにもつながるのではないだろうか。

それでもなお「言ってもどうせやってこないから」とか、「学習者の母語の数だけ翻訳を用意するのは難しい」と消極的に捉える教員もいるであろう。そういう人たちには「他に何か有効な手立てがあれば、それを試せばよい。特に思いつかないのであれば、怖がらず思い切ってやってみることだ」と伝えたい。仮に失敗したとしても、その失敗は無駄にはならないであろうし、できない理由を探すより、できる方法を考える方がずっと生産的で、次に繋がると言うからである。

注

- 1 生活会話中心で語彙数を抑えた『まるごと』（国際交流基金：三修社）でさえ活動編の最初の2冊だけで70～100時間、理解編も合わせると150～200時間である。<https://marugoto.jp.fg.go.jp/teacher/feature/>
- 2 国際交流基金（2017: 14）
- 3 『みんなの日本語』の文型数は『教え方の手引き』による。想定学習時間、語彙、漢字の3つは以下の公式サイトからの情報である。以下、サイトへのアクセス日は全て2024年12月31日である。
<https://www.3anet.co.jp/np/info-detail/169/>
<https://plus.3anet.co.jp/japanese-edu/koza004-04/>
<https://www.3anet.co.jp/np/books/2458/>
『げんき』の想定学習時間については公式サイトでは200時間となっているが、著者の一人である大野（2017: 4）が「250時間程度を見込むのが妥当」と述べていることから、200～250時間とした。

<https://genki.japantimes.co.jp/about/about03>

文型の数は本冊の見出し、漢字は本冊の読み書き編からの情報で、語彙数は以下の公式サイトからの情報である。

<http://genki.japantimes.co.jp/site/faq.html>

『できる日本語』の想定学習時間は以下の公式サイトからの情報である。

http://www.dekirunihongo.jp/?page_id=169

文型の数は初級と中級の本冊の巻末にある「ポイント一覧」の見出しの数をカウントした。語彙については巻末の語彙リストに掲載された語数を筆者が目視で数えた。漢字は『漢字たまご』（初級・中級）で取り上げている漢字の数である。

- 4 各課の「単語」のページに記載されている見出し語を数え、「Additional Vocabulary」は除外した。
- 5 日本では外国人力士が良い例である。
- 6 名詞文よりも先に動詞文を先に教えたり、テ形（14課）と辞書形（18課）の提示順序を変えることは可能だが、名詞文よりも先にテ形を教えることは、「聞いてください」や「住んでいます」を定式表現として理屈抜きに覚えさせる場合を除いて不可能である。
- 7 2-1で示した例で言えば「映画」や「音楽」は共有語彙、「刺繍」は個別語彙である。
- 8 これには「ありがとう」や「おはよう」などの挨拶表現、数字、「これ、それ、あれ」などの代名詞も含まれる。詳細は小山（2020）を参照。
- 9 1行目は12ポイント、2行目と3行目は10ポイント。
- 10 語彙リストの表記の順番も学習の進捗とともに変えている。第3課までは左から「アルファベット表記→ひらがな表記→漢字仮名混じり表記」の順であるが、第4課からは図4のようにアルファベット表記とひらがな表記の順番を入れ替えた。また、第7課からはアルファベット表記が消え、ひらがな表記と漢字仮名混じり表記のみになっている。
- 11 変更点は、①「Vませんか」や「～へVに行きます」などのマス形を使った文型を初級2（第1週）で学習することにした点と、②「～Vたいです」（第6週）の過去形を第9週で導入することにした点の2つである。
- 12 「こんにちは」や「ありがとう」などの挨拶表現は文法学習とは直接関係ないため、現在はその多くを初日のオリエンテーションで紹介するにとどめている。
- 13 よって、動画は必ずしも必要ない。
- 14 <https://www.3anet.co.jp/np/info-detail/129/>（2024年

12月31日アクセス)

- 15 近年、新人教師向けに『みんなの日本語』や『げんき』の教え方を課ごとに詳しく具体的に示したサイトがさまざま作られているが、それらを見てもそのような順番になっている。
- 16 何人かの学生が授業の前日の昼休みに学生食堂でいっしょに予習しているのを何度か目撃したことがある。
- 17 正解は教師がどの順番で読み上げるかによって変わるため、1つ作れば何度でも使い回しができるという利点がある。
- 18 これも正解は決まっていないので、1つ作れば何度でも使い回すことができる。
- 19 既習者の4名はレベル的には初級1と初級2の間であったため、本人の希望もあり、特別に両方のクラスを受講した。
- 20 書くことに関しては学生たちに「自分の名前と出身地くらいはカタカナで書けるようにしよう」と伝えている。
- 21 Hiragana A-1 Self-Study Course の受講を義務付けている。
- 22 とはいえ、イラスト付きのスライドを使って答え合わせをすることで、それらの語彙と意味を無意識のうちに覚えてくれることを密かに期待している。
- 23 これには予習の確認の意味もある。
- 24 既習者の4人は初級2クラスも受講したため、授業評価は初級2について行った。
- 25 「ストレスを感じない教え方」「質問するのが怖くなかった」などの回答があった。
- 26 「その他」には「自分でももう少し勉強すればもっと上達できたと思う」や「理解という点では授業が少し簡単すぎると感じるがあった」などの課題を指摘するコメントが2件含まれる。
- 27 語彙と文体を統一した以外はほぼそのまま引用している。
- 28 2024年7月現在、132言語に対応している。

参考文献

- 大野 裕 (2017) 「『げんき』が目指したもの」筑波大学 CEGLOC 日本語・日本事情遠隔教育拠点シンポジウム「日本語の教科書が目指すもの－教科書執筆者・活用者と語る－」配布資料.
- 国際交流基金 (2017) 『JF 日本語教育スタンダード 利用者のためのガイドブック』国際交流基金.
- 小山 悟 (2020) 「60時間で何を教え、習得させるのか? —九州大学大橋キャンパスにおける初級日本語クラスのデザイナー—」『九州大学留学生センター紀要』28, 49-64, 九州大学留学生センター.
- 坂野永理・池田庸子・大野裕・品川恭子・渡嘉敷恭子 (2020) 『初級日本語 げんき 1 第3版』The Japan Times.
- 坂野永理・池田庸子・大野裕・品川恭子・渡嘉敷恭子 (2020) 『初級日本語 げんき 2 第3版』The Japan Times.
- 嶋田和子監修 (2011) 『できる日本語 初級 本冊』アルク.
- 嶋田和子監修 (2012) 『できる日本語 初中級 本冊』アルク.
- スリーエーネットワーク (2012) 『みんなの日本語 初級 1 第2版 本冊』スリーエーネットワーク.
- スリーエーネットワーク (2013) 『みんなの日本語 初級 2 第2版 本冊』スリーエーネットワーク.
- バーグマン, ジョナサン・サムズ, アーロン (2014) 『反転授業』(山内祐平・大浦弘樹 監修, 上原裕美子 訳) オデッセイコミュニケーションズ.
- 山内博之 (2009) 『プロフィクションシーから見た日本語教育文法』ひつじ書房.
- 渡部由紀子・角谷佳奈・左弥寿子・緒方由希子 (2023) 『NIHONGO FUN & EASY 2nd Edition』アスク.

資料1 初級1で扱う文型と話題（確定版）

週	文型	話題
1	名詞文 「～は～です」 ・助詞「の」 ・疑問文「Nですか」 ・疑問詞「何」「どこ」	自己紹介 「私は学生です」 「私は九州大学の学生です」 「私の趣味は旅行です」
2	これ・それ・あれ ・否定文「Nじゃないです」 ・疑問詞「だれ」「いくら」 ・疑問詞「何の」「だれの」 ・この・その・あの	買い物 「これは何ですか」 「これはいくらですか」 「これは何の本ですか」 「このかばんはいくらですか」
3	存在文 ・ここ・そこ・あそこ ・位置を表す語（「前」「上」など） ・「～は～にあります」 ・「～に～があります」	私の町・私の部屋 「ここは図書館です」 「駅はどこですか」 「駅の前に何がありますか」 「公園に誰がいますか」
4	動詞文 I （する動詞・移動動詞） ・否定文「Vません」 ・副詞（頻度） ・助詞「に」（曜日）	毎日の生活 「私は毎日散歩します」 「私はあまり掃除しません」 「私は土曜日に図書館へ行きます」
5	動詞文 II （他動詞・自動詞） ・助詞「に」「から」「まで」（時間） ・助詞「で」（場所） ・過去形「Vました・Vませんでした」	週末の出来事 「私は昨日6時に起きました」 「私は7時から9時まで散歩しました」 「私はうちで映画を見ました」
6	助詞 ・助詞「に」（到達点） ・助詞「と」（相手） ・助詞のまとめ ・Vたいです	週末の予定 「私は明日友達に会います」 「私は明日鈴木さんと映画を見ます」 「私は京都へ行きたいです」
7	イ形容詞 ・否定文「Aくないです」 ・副詞（程度） ・形容詞文 I 「～は～がAです」 ・形容詞の接続 I（順接）	それは何？ 「それはすごく大きいです」 「それはあまり高くありません」
8	ナ形容詞 ・否定文「Aじゃないです」 ・名詞修飾 ・形容詞の接続 II（順接・逆説） ・形容詞文 II 「～は～がAです」	家族・友達の紹介 「鈴木さんは親切な人です」 「お父さんはやさしくて、真面目です」 「お母さんは料理が上手です」
9	形容詞の過去形 ・形容詞文 II 「～は～がA（過去形）」 ・助詞「で」（手段・方法） ・Vたかったです	旅行の感想 「少し寒かったです」 「沖縄は海がきれいでした」
10	比較 ・～は～よりAです ・～と～とどちらがAですか ・～のほうがAです ・～で～がいちばんAです	日本の地理 「東京と大阪とどちらが雨が多いですか」 「私の国は日本より暖かいです」 「日本より私の国のほうが暖かいです」 「九州でどこがいちばんきれいですか」

週	語彙	漢字	文字の導入
1	私、学生、会社員、先生、医者、公務員、警察官、趣味、出身、名前、本、日本語、大学、国、専門、仕事、映画、音楽、写真、読書、料理、旅行、何、どこ【24語】	日本、九州、福岡、博多、天神	①あ行～か行 ②あ行～た行
2	これ、それ、あれ、この、その、あの、机、いす、かばん、財布、かさ、時計、辞書、英語、人、誰、いくら、1、2、3、4、5、6、7、8、9、10、100、1000、10000【30語】	注、危、禁、止	①あ行～は行 ②あ行～や行
3	ここ、そこ、あそこ、うち、部屋、駅、公園、銀行、図書館、病院、郵便局、学校、コンビニ、スーパー、～屋、～さん、前、後ろ、隣、近く、上、下、中、右、左、あります、います【28語】	時、日、月、年、分	①あ行～ん ②濁音
4	します、行きます、来ます、帰ります、運動、買い物、散歩、洗濯、掃除、勉強、今日、明日、毎日、よく、ときどき、あまり、ぜんぜん、月曜日、火曜日、水曜日、木曜日、金曜日、土曜日、日曜日、何曜日【25語】	火、水、木、金、土	①長音 ②拗音
5	食べます、飲みます、読みます、見ます、聞きます、書きます(描きます)、話します、買います、起きます、寝ます、ごはん、パン、お茶、手紙、テレビ、友だち、昨日、朝、昼、夜、それから、～時、～分、何時、～半、少し、もう【27語】	大、小、上、中、下	①促音
6	泳ぎます、遊びます、会います、乗ります、入ります、あげます、教えます、お風呂、食堂、昼ごはん、海、山、バス、新幹線、自転車、電話、箸、家族、子供、今晚、今週、先週、来週【23語】	開、閉、階、口、男、女	①ア行～カ行 ②ア行～タ行
7	大きい、小さい、重い、軽い、高い、安い、長い、短い、いい、おいしい、おもしろい、赤い、青い、白い、黒い、黄色い、ポスト、店、会社、肉、魚、休み、天気、もの、どんな、すごく【26語】	食、肉、魚、飲、茶、酒	①ア行～ハ行 ②ア行～ヤ行
8	かわいい、きれい、やさしい、親切、明るい、元気、大人しい、まじめ、好き、上手、静か、お父さん、お母さん、お兄さん、お姉さん、弟、妹、小学生、中学生、高校生、大学生、～に住んでいます、～で働いています、～で勉強しています、～歳、でも【26語】	病、歯、薬、医、内、外	①ア行～ン ②濁音・長音・拗音
9	暑い、寒い、近い、遠い、多い、楽しい、便利、素敵、いっぱい、雨、自然、時間、町、車、電車、空港、温泉、お土産【18語】	道、通、橋、駅、鉄、港	①特殊音
10	暖かい、涼しい、賑やか、安全、交通、人口、世界、川、食べ物、この中で、どちら、どれ、～人、～度、～年、～月【16語】	東、西、南、北、右、左	

資料2 初級2で扱う文型と話題（確定版）

週	文型	話題
1	ます形 ・ Vませんか ・ Vましょう ・ ~へVに行きます／来ます／帰ります ・ ~ながら、~	休日の過ごし方 「私はよく美術館へ絵を見に行きます」 「公園で音楽を聞きながら、本を読みます」 「よかったら、今度一緒に行きませんか」
2	辞書形 ・ 五段動詞と一段動詞 ・ XはVることです ・ Vるのは~です ・ XはVるのが~です	子供の時の夢 「私の夢は学校の先生になることです」 「子供に勉強を教えるのは楽しいですから」 「絵を描くのが好きですから」
3	テ形Ⅰ ・ Vてください／Vしていただけませんか ・ Vています	私の親友 「その人もその会社で働いていました」 「今ロンドンの大学で絵の勉強をしています」
4	テ形Ⅱ ・ Vてもいいですか ・ Vてはいけません ・ Vて、~Vます	規則・マナー・タブー・迷信 「私の国では左手でご飯を食べてはいけません」 「私の国では18歳から飲んでもいいです」
5	ナイ形 ・ Vないでください ・ Vなければなりません ・ Vなくてもいいです	日本の学校 「日本では9年学校へ行かなければなりません」 「日本では教科書を買わなくてもいいです」
6	タ形Ⅰ ・ Vたことがあります ・ Vたり、Vたります ・ Vてみます	日本での経験 「私は北海道へ行ったことがあります」 「海で泳いだり、遊んだりしたいです」 「一度登ってみたいです」
7	タ形Ⅱ ・ Vた／Vないほうがいいです ・ Vるといいです ・ Vたら／Vなら、~ます	助言・アドバイス 「ホテルは早く予約したほうがいいですよ」 「お土産は‘ハツ橋’を買うといいですよ」 「時間があったら、太宰府も行ってみてください」
8	可能形 ・ 可能文 ・ Vようになりました ・ Vなくなりました ・ Vようになりません	生活の変化 「日本語が少し話せるようになりました」 「朝早く起きられなくなりました」 「漢字はまだ書けるようになりません」
9	普通形Ⅰ ・ ~と思います	日本と日本人の印象 「日本へ来る前、日本は寒いと思っていました」 「今は私の国より暖かいと思っています」 「楽しい人が多いと思うようになりました」
10	普通形Ⅱ ・ ~とき、~ます ・ Vるとき／Vたとき ・ 連体修飾節	私の大切なもの 「私の大切なものは両親がくれた時計です」 「初めて読んだ時、すごく感動しました」

週	語彙	漢字
1	歩きます、考えます、作ります、取ります（撮ります）、働きます、メモ、お菓子、ジム、デパート、ドライブ、話、花火、晩御飯、日、美術館、ワイン、いっしょに、いつも、今度、週末、その後、毎朝、～や、よかったら 【24語】	私、学、生、国、名、前、住
2	集めます、歌います、助けます、使います、なります、弾きます、待ちます、シェフ、将来、生活、歌、絵、お酒、外国、画家、切手、スポーツ、病気、ピアノ、ピアニスト、夢、大変、難しい、有名、～の時 【25語】	行、来、読、話、聞、書、見
3	住みます、呼びます、やります、勤めます、留学、お弁当、片仮名、教科書、教室、市役所、親友、農家、野菜、その時、もう少し、ゆっくり、～人、～前 【18語】	今、先、毎、週
4	飼います、吸います、捨てます、止めます（泊めます）、朝御飯、声、コピー、ゴミ、煙草、ペット、ボール、ロビー、冷たい、大丈夫、～なら 【15語】	買、友、高、安、円、何
5	払います、返します、出します、覚えます、忘れます、着ます、心配、お金、薬、高校、宿題、小学校、制服、中学校、トイレ、全部、無料、早く、～までに 【19語】	山、川、田、人、子、車、目、門
6	踊ります、習います、登ります、生け花、お寺、着物、景色、桜、スキー、大福、夏、富士山、抹茶、力士、ところ、甘い、気持ちいい、苦い、速い（早い）、一度、じゃあ、ぜひ、まだ～ません 【23語】	少、入、出、本、森、自
7	落とします、着きます、泊まります、持って行きます、休みます、借ります、観光、予約、秋、上着、お勧め、交番、寿司、ネット、ホテル、祭り、ラーメン、すぐ、あと、～という 【21語】	明、休、体、好、間、間
8	引きます、カード、風邪、漢字、新聞、上手に、いくつ、いつ、～か、～ぐらい、自分で、どのくらい、なかなか～ない、何でも、～メートル 【15語】	言、語、試、詩、海、泳、池、湖、洗
9	思います、授業、地下鉄、物価、昔、有料、今、多分、何も、初め 【10語】	雨、雪、電、雲、字、家、室、寒
10	挙げます、言います、気をつけます、くれます、もらいます、渡ります、感動、合格、答え、手、道、理由、両親、忙しい、嬉しい、寂しい、大切、暇、大切に、たくさん、できるだけ、どう、初めて、まだ～ます、おはよう（ございます）、おやすみなさい、～回 【27語】	思、急、必、意、忘、感、近、遠、速、遅

日本経済2024～日銀の政策転換は円高をもたらすか？

Will the BOJ Policy Shift Revive the Yen Appreciation?

今 井 亮 一*

〈概要〉

本稿では2024年の日本経済を展望する。我が国では2022年春のロシアのウクライナ侵攻以来、急激な円安に見舞われたが、2024年7月末日、日本銀行が国債買入縮小と政策金利の漸次引き上げを発表すると、為替市場は急激な円高への転換を見せた。8月5日には、ドル円レートが141円台に急落するとともに、東京証券取引上では日経平均株価が3万1千円台に急落した。この市場混乱は世界市場に波及し、欧米でも円高と株安が進んだ。この混乱は程なく収束し、日経平均株価は3万8千円台に戻ったが、米国大統領選でトランプ氏が勝利するに伴い、為替相場は円安に転じ、12月下旬、1ドル=150円台で推移している。本稿では、この急激な市場変動の背景にあるマクロ経済情勢と、日本銀行や米国連銀（FRB）の政策変更の関係について論じる。

目次

はじめに

- I. インフレ率の国際比較
 - II. 実質賃金の推移
 - III. 日本銀行の金融政策
 - IV. 円安と日本経済の構造問題
- 終わりに～普通の経済への道

はじめに

本稿では、コロナ禍（2000-2022）からの回復期における日本経済の構造的問題を概観する。2023年までのコロナ禍の推移は、著者前稿（今井 [2021, 2022, 2023, 2024]）及びその記述の元になっている NHK 報道等を参照されたし¹。

I 節では、インフレ率の日米独比較を行う。日本のインフレ率のピークはアメリカ、ドイツ

より低いが、最近のインフレ率には差がなくなっている。しかし国民がインフレを実感するのは、年率でなく物価水準である。アメリカでは燃料費の上昇は顕著だが、食料価格はそれほどでもない。日本とドイツでは食糧価格の上昇が激しい。

II 節では実質賃金の動向を日米比較する。アメリカではコロナ禍からの回復期に一時的に実質賃金が低下したが、2023年にはコロナ禍前（2019年）の水準を超えた。これに対し日本で

*九州大学留学生センター、imai.ryoichi.303@m.kyushu-u.ac.jp

1 NHK 特設サイト「新型コロナウイルス」<https://www3.nhk.or.jp/news/special/coronavirus/>

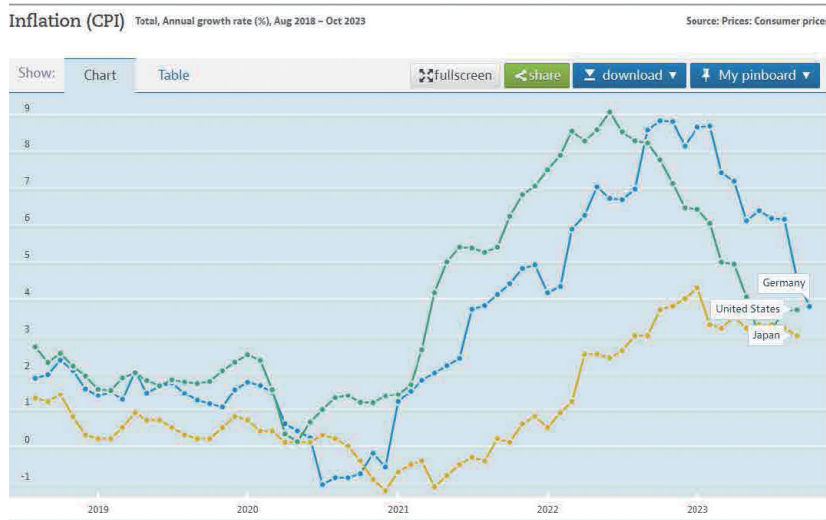


図1 インフレ率の推移（日本・アメリカ・ドイツ）
<https://data.oecd.org/price/inflation-cpi.htm>

は、名目賃金の上昇が累積値では物価水準を上回ることができず、引き続き実質賃金の低下が起きている。

Ⅲ節では、日本銀行の金融政策を検討する。日銀は2024年春、「質的量的金融緩和」をついに解除したが、その後も緩和的金融政策を続けているとみる市場関係者が大きく、7月に日本銀行が政策金利を0.25%だけ引き上げた際には市場に衝撃を与えた。「日銀は市場との対話に失敗した」と見る向きもあるが、2024年末の円安傾向を見るに、日銀は総体として円安（緩和維持）メッセージを発していたのに、途中で市場が緊縮転換と思いこんだ可能性がある。

Ⅳ節では、「円安は日本経済の構造問題の反映である」という議論を検討する。経常収支の黒字拡大にもかかわらず低調な貿易収支が続くのは、円安が輸入物価を引き上げるほどには輸出物価を引き上げないという意味では構造問題

と言える。次に、企業の景況感と国民の生活実感には乖離が大きく、円安は企業には概ね歓迎されても国民はそうでない。日本は国際的に見て企業の開廃業率が非常に小さい国だが、それが産業構造改革を遅らせてる可能性がある。日本銀行が金融緩和を続けることは、中小企業を過剰に保護している可能性がある。

I. インフレ率の国際比較

2022年からの円安は、資源価格、食糧価格の急騰を伴って日本国民の生活水準に大きな打撃となった。図1は日米独の消費者物価指数（CPI年率）の推移を表している²。米独のインフレ率は2022年のピークでほぼ9%に達したのに比べ、日本はピークでも4%前後にとどまっているが、国民の不満は数字から受ける印象より大きかった。というのも食料品価格や光熱水

2 OECD, Inflation (CPI) <https://data.oecd.org/price/inflation-cpi.htm>

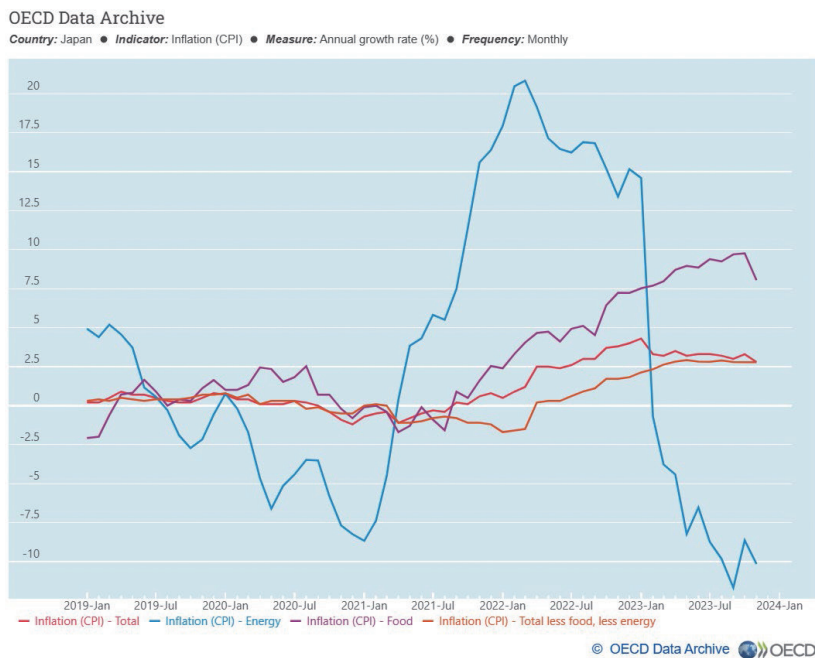


図2 日本の消費者物価上昇率
(総合=赤、燃料=青、食料=紫、燃料と食料を除く総合=オレンジ)
OECD データから著者作成

費など生活必需品価格はもっと大きく上がったからである。

OECD の消費者物価指数は、「総合」「エネルギー」「食糧価格」「エネルギーと食糧を除いた総合」を公表している。日本のエネルギー価格は2021年から上昇をはじめ2022年春には年率20%を超えた後、2023年に入り大きく低下し、2024年は前年比で見てマイナス10%程度である(図2)³。これに対し食糧価格は安定的に上昇し、現在年率8%に達している。食糧とエネルギーを除いたインフレ率は2024年夏現在、年率2.5%程度である。食糧価格の上昇を燃料価格の下落が相殺している状態である。

インフレが年率で見て低下しても、人々が体

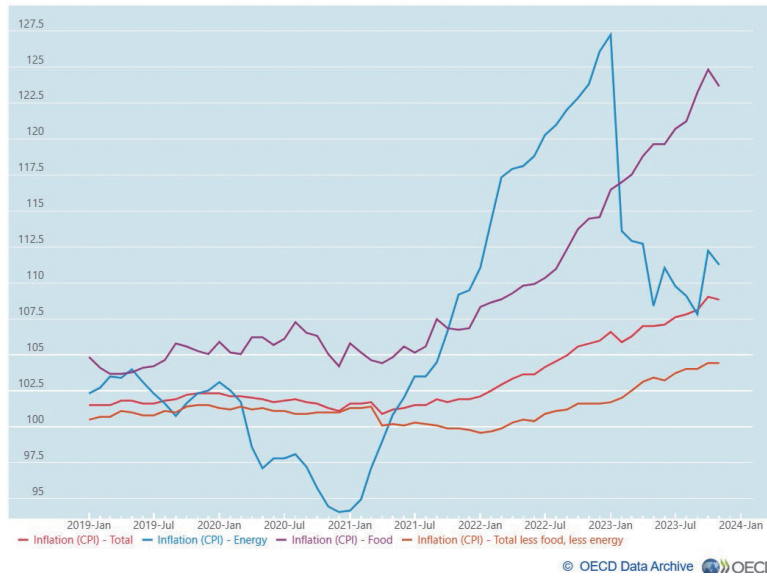
感するインフレは累積値である。OECD は2015年の値を100とする累積インフレ率も公表しており(図3)、それによると2023年末の物価は、食糧=123、エネルギー=111、総合=108、食糧とエネルギーを除いた総合=104である。おそらく日本国民はインフレをもっぱら食糧価格で痛感していると思われる。

同様の累積インフレをアメリカについて見ると(図4)、2023年末においてエネルギー=136、総合=129、食糧とエネルギーを除いた総合=128、食糧=125となっており、資源も食料も自給しているにもかかわらずインフレは日本より激しい。同様にドイツに付いてみると(図5)、エネルギー=148、食糧=143、総合=123、

3 OECD Data Explorer: [https://data-explorer.oecd.org/vis?lc=en&df\[ds\]=DisseminateArchiveDMZ&df\[id\]=DF_DP_LIVE&df\[ag\]=OECD&df\[vs\]=&av=true&pd=2019-01%2C2024-12&dq=JPN.CPI..AGR.WTH.M&to\[TIME_PERIOD\]=false&vw=tl](https://data-explorer.oecd.org/vis?lc=en&df[ds]=DisseminateArchiveDMZ&df[id]=DF_DP_LIVE&df[ag]=OECD&df[vs]=&av=true&pd=2019-01%2C2024-12&dq=JPN.CPI..AGR.WTH.M&to[TIME_PERIOD]=false&vw=tl)

OECD Data Archive

Country: Japan • Indicator: Inflation (CPI) • Measure: 2015=100 • Frequency: Monthly

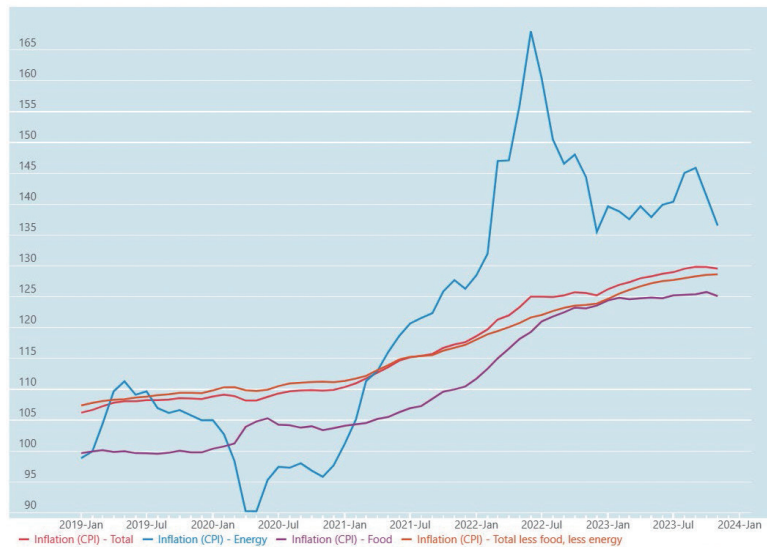


© OECD Data Archive OECD

図3 日本の消費者物価水準 (2015年=100)
 (総合=赤、燃料=青、食料=紫、燃料と食料を除く総合=オレンジ)
 OECD データから著者作成

OECD Data Archive

Country: United States • Indicator: Inflation (CPI) • Measure: 2015=100 • Frequency: Monthly



© OECD Data Archive OECD

図4 アメリカの消費者物価水準 (2015年=100)
 (総合=赤、燃料=青、食料=紫、燃料と食料を除く総合=オレンジ)
 OECD データから著者作成

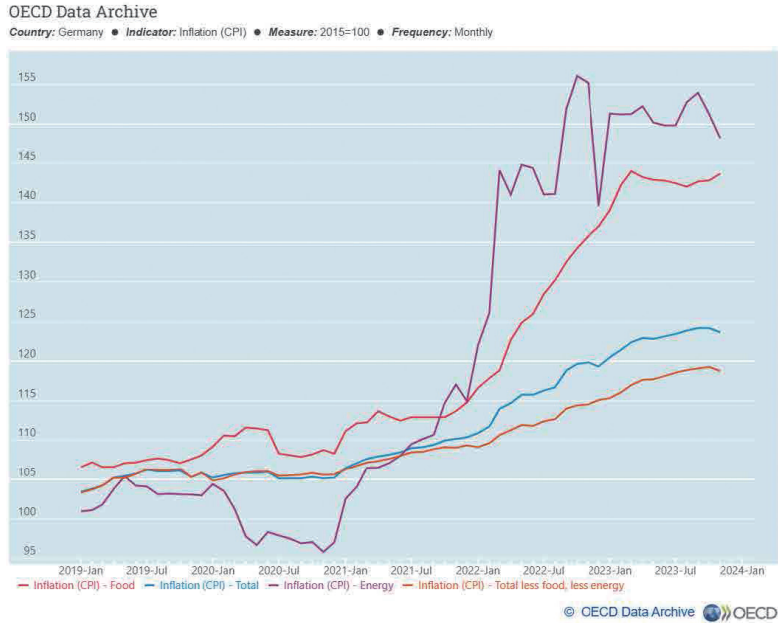


図5 ドイツの消費者物価水準（2015年=100）
（総合=赤、燃料=青、食料=紫、燃料と食料を除く総合=オレンジ）
OECD データから著者作成

食糧とエネルギーを除いた総合=118となっており、エネルギー価格、食糧価格の上昇は、日本やアメリカより大きい。近年の欧州の政治不安の背景には、エネルギーや食糧の価格が急上昇していることがあると思われる。

直近の消費者物価指数は毎月、総務省統計局が発表している⁴（図6）。例えば2024年10月の総合指数（2020年平均=100、小数点以下切捨て）は109である。生鮮食品を除く総合=108、生鮮食品及びエネルギーを除く総合=108であ

2020年=100

原数値		2023年			2024年									
		10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
総合	指数	107.1	106.9	106.8	106.9	106.9	107.2	107.7	108.1	108.2	108.6	109.1	108.9	109.5
	前年同月比 (%)	3.3	2.8	2.6	2.2	2.8	2.7	2.5	2.8	2.8	2.8	3.0	2.5	2.3
生鮮食品を除く総合	指数	106.4	106.4	106.4	106.4	106.5	106.8	107.1	107.5	107.8	108.3	108.7	108.2	108.8
	前年同月比 (%)	2.9	2.5	2.3	2.0	2.8	2.6	2.2	2.5	2.6	2.7	2.8	2.4	2.3
生鮮食品及びエネルギーを除く総合	指数	105.8	105.9	105.9	105.8	105.9	106.2	106.5	106.6	106.6	106.9	107.4	107.5	108.1
	前年同月比 (%)	4.0	3.8	3.7	3.5	3.2	2.9	2.4	2.1	2.2	1.9	2.0	2.1	2.3

図6 消費者物価指数（総務省統計局）
<https://www.stat.go.jp/data/cpi/sokuhou/tsuki/pdf/zenkoku.pdf>

4 総務省「消費者物価指数」<https://www.stat.go.jp/data/cpi/sokuhou/tsuki/index-z.html>

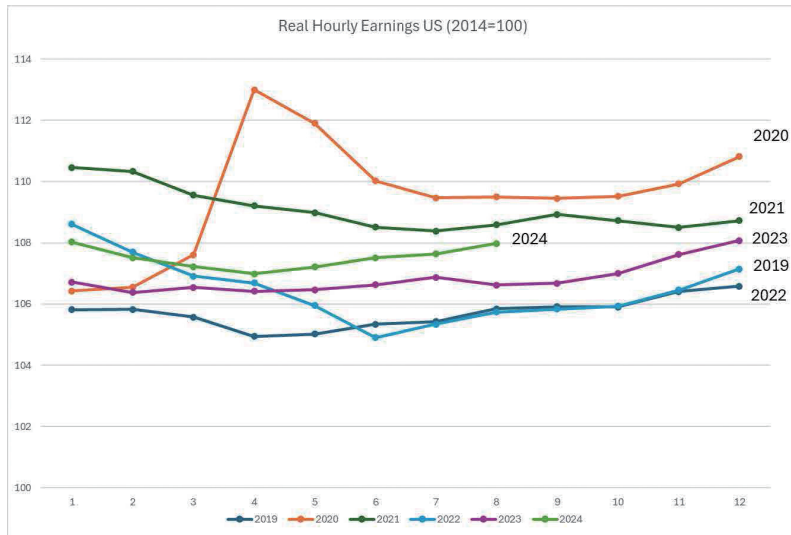


図7 米国の実質賃金の推移（米国労働統計局のデータにより著者作成）

る。各指数に差がそれほどないのは、最近の食糧価格上昇をエネルギー価格低下が相殺しているからと見られる。どの指数も前年同月比はほぼ2%を超えているが、日銀が重視しているのは「生鮮食品を除く総合」（中段）と言われる。確かに最近の「生鮮食品を除く総合」指数は8月まではやや上昇傾向にあり、日銀の言う「最近の円安による物価の上振れ」が見られたようだが、9月以降、低下している。

II. 実質賃金の推移

米国労働統計局（Bureau of Labor Statistics, BLS）のデータを用いて、米国のコロナ禍以前からの米国の実質賃金の推移をグラフ化した。具体的には2019年から2024年8月までの平均時間賃金（Average hourly earnings of all employees, total private, seasonally adjusted）を都市圏消費者物価指数（All items in U.S. city average, all

urban consumers, not seasonally adjusted）で割ったものの推移である⁵（図7）。これを見ると、2020年に実質賃金が跳ね上がっているのは、労働時間が激減したのにコロナ対策給付金をたくさんもらったからである。ところが翌2021年から実質賃金の低下が始まり、2022年にはコロナ前の水準に下がってしまった。しかし2023年には回復が始まり、2024年には2021年の水準まで回復しつつある。アメリカでは実質賃金水準がコロナ禍以前（2019年）の水準に下がったのは2022年のみで、以後はコロナ期より実質賃金が高くなっている。日本のようにコロナ期より実質賃金下がったという傾向は見られない。

日本の実質賃金は、毎月勤労統計で現金給与総額として公表されている⁶（図8、図9）。月の現金給与総額だから、米国と比較するには労働時間を加味して調整しなければならないが、容易でない。アメリカ同様、コロナ禍以前と

5 U.S. Bureau of Labor Statistics, <https://data.bls.gov/toppicks?survey=bls>

6 厚生労働省「毎月勤労統計調査」<https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/30-1a.html>

時系列表第6表
実質賃金指数

(事業所規模5人以上) (平成27年平均=100)

年月	現金給与総額		きまって支給する給与	
	前年比	%	前年比	%
平成30年	100.8	0.2	99.9	-0.3
令和元年	99.8	-1.0	99.1	-0.8
2年	98.6	-1.2	98.4	-0.7
3年	99.6	0.0	98.6	0.2
令和2年11月	87.4	-0.7	99.4	0.2
12月	171.2	-1.7	99.8	0.7
3年1月	84.4	-0.6	98.1	0.4
2月	82.6	0.1	98.3	0.0
3月	87.8	0.8	99.3	0.7
4月	86.7	1.9	100.8	1.7
5月	85.0	2.0	98.6	2.0
6月	137.1	-0.1	99.2	1.0
7月	114.6	0.3	99.1	0.7
8月	84.6	0.1	97.7	0.1
9月	82.8	-0.6	97.7	-0.5
10月	83.2	-0.7	98.5	-0.9
11月	86.7	0.8	98.2	1.2
12月	167.2	-2.3	98.3	-1.5

注：実質賃金は、名目賃金指数を消費者物価指数（持家の帰属家賃を除く総合）で除して算出している。

時系列表第6表
実質賃金指数

(令和2年平均=100)

年月	事業所規模5人以上		事業所規模30人以上	
	現金給与総額	前年比	現金給与総額	前年比
令和2年	100.0	-1.2	100.0	-0.7
3年	100.6	0.5	100.8	0.8
4年	99.6	-1.0	99.2	-1.6
5年	97.1	-2.5	96.6	-2.6
令和5年6月	136.8	-1.5	97.7	-2.5
7月	111.9	-2.7	97.0	-2.5
8月	82.7	-2.8	95.9	-2.4
9月	81.3	-2.9	96.0	-2.6
10月	80.9	-2.3	95.7	-2.6
11月	84.3	-2.5	95.8	-2.3
12月	166.5	-2.1	96.0	-1.7
6年1月	83.5	-1.1	96.8	-1.4
2月	81.7	-1.8	97.4	-1.6
3月	87.5	-2.1	98.1	-1.5
4月	85.2	-1.2	99.1	-1.2
5月	85.3	-1.3	98.1	-1.2
6月	143.0	1.1	98.7	-1.2
7月	115.0	0.3	98.3	-1.0

注：実質賃金は、名目賃金指数を消費者物価指数（持家の帰属家賃を除く総合）で除して算出している。

図8 実質賃金指数（2015年=100）

図9 実質賃金指数（2020年=100）

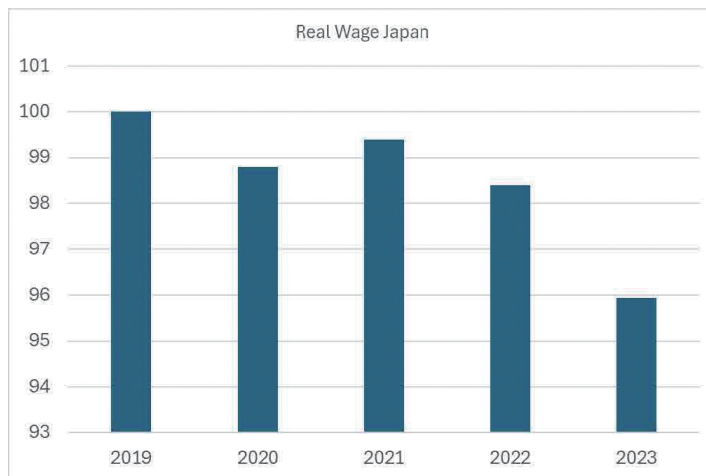


図10 日本の実質賃金（毎月勤労統計調査から著者作成）

後の推移を見るためには、基準年の調整も必要である。2020年より前は2015年が基準年であり、2020年以後は2020年が基準年である。例えば2015年基準の令和2年（2020年）の98.6は、今の基準では100である。基準年の調整を行った結果は図10のようである。現金給与総額で見た実質賃金は、2019年を100とする指数で、2023

年は96以下まで下がっている。日本の場合、コロナ給付金で働かずに入収入を得たことは考慮されてないが、2019年第4四半期に始まった消費増税による2020年の物価押し上げは考慮されている。米国に比べて、日本では明らかにインフレによる実質賃金の低下が長引いており、2024年によほど大きな名目賃金の上昇がない限り、消

費の抑制を通じた実質 GDP 成長率の低下は避けられないと思われる。

Ⅲ. 日本銀行の金融政策

日本銀行の金融政策の変遷を展望しよう⁷。2013年、黒田日銀総裁の就任とともに、「量的・質的金融緩和」が開始された。いわゆる「異次元緩和」の開始である。その骨子は金融政策の操作目標を無担保コールレート（オーバーナイト物）からマネタリーベースに替えたことである。マネタリーベースとは、日本銀行券及び民間銀行が日銀に保有する当座預金のことで、日銀が民間から国債を購入すると購入代金が民間銀行の保有する当座預金に支払われ、マネタリーベースが増える。

この第1次異次元緩和は2014年春にかけて大きな効果を発揮し、顕著な円安と株高をもたらした。しかし2014年4月に消費税率が5%から8%に引き上げられるとともに、直前に盛り上がった「駆け込み需要」の反動もあり、消費が低迷した。2015年10月に消費税率を10%に引き上げる予定だったが、安倍政権は増税を1年半延期し、税率引き上げは2017年4月の予定となった。ところが2015年にはいわゆる「チャイナショック」（中国株式市場の暴落）が起り、世界不況の雰囲気が漂った。2016年5月に開催された伊勢志摩サミットにおいて、安倍首相はG7首脳に対し「世界同時不況」のリスクを訴え、結局、2017年4月の消費増税は、2019年10月まで、さらに2年半延期されることになった⁸。

2014年の消費増税の後に起こった消費低迷および2015年の「チャイナショック」を背景とし、2013年時点では早期に達成されると期待された年率2%の安定的な物価上昇は実現しなかったため、異次元緩和の効果を疑問視する議論が起こった。しかし安倍首相や、異次元緩和に理論的支柱を与えたいわゆる「リフレ派」論客は「2%のインフレ目標未達は消費増税のせい」という考えだと思われる。消費増税を2回延期した安倍首相はリフレ派の考えに強く影響されたと考えられる。2018年3月に日銀副総裁を退任した岩田規久男氏は、代表的なリフレ派論客として知られるが、日本経済新聞の取材に次のように答えている⁹。

「2%未達の最大の理由は14年4月の消費増税だ。多くのリフレ派が反対したこの増税がなければ、14年夏ごろに2%に到達したはず。19年10月の消費増税は、消費を冷やして物価を下押ししないと確信できない限り再延期が必要。増税は日程ありきではなく、経済情勢に応じて決断すべきだ」

2%物価目標の未達成が消費増税にあるかどうかは議論の分かれるところである。しかし元々、リフレ派は財政政策の効果を低く評価し、財政負担なしに景気刺激ができる政策として金融緩和を推してきた経緯があるので、うまく行かないのは増税のせい」と主張するのはフェアでない。

2%物価目標未達や「チャイナショック」以

7 日本銀行「金融市場調節方針の変遷」<https://www.boj.or.jp/about/education/oshiete/seisaku/b42.htm>

日本銀行「金融政策に関する決定事項等2024年」https://www.boj.or.jp/mopo/mpmdeci/mpr_2024/index.htm

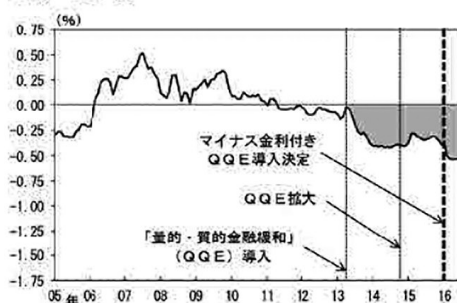
8 日本経済新聞2016年5月29日付「リーマン級のリスク、自縄自縛は禁物」

<https://www.nikkei.com/article/DGXMZO02849830X20C16A5000000/>

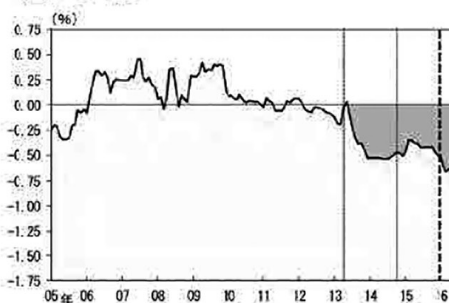
9 日本経済新聞2018年3月27日付「国債買いで物価2%『単純すぎた』 岩田規久男氏」<https://www.nikkei.com/article/DGXMZO28642670X20C18A3EE8000/>

○マイナス金利と国債買入れによる金利引き下げ効果

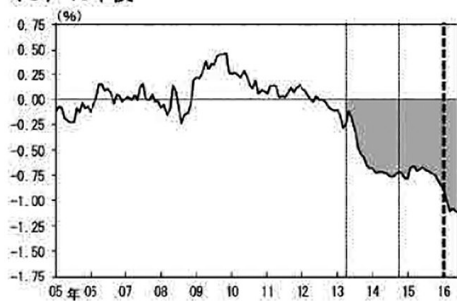
(1) 2年債



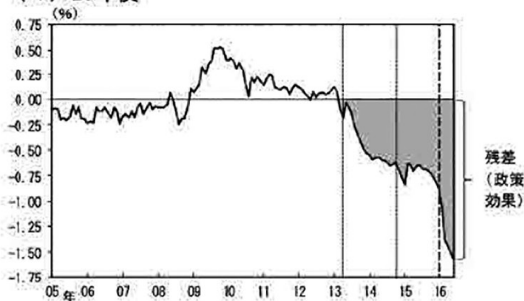
(2) 5年債



(3) 10年債



(4) 20年債



(注) 日本国債の利回り(2年、5年、10年、20年)を、「米国債金利(10年物)」、「消費者物価指数(除く生鮮食品)の前年比」、「有効求人倍率(需給ギャップの代理変数)」の3つの説明変数で回帰した際の推計残差。

図11 マイナス金利と国債買入による金利引き下げ効果(日本銀行)

来の景気停滞を受けて、日本銀行は2016年、「異次元緩和バージョン2」ともいえるべき「マイナス金利付き量的・質的金融緩和」を開始した。併せて、長期金利を市場に任せるのではなく、10年もの国債金利がゼロ%程度で推移するように操作する「長短金利操作」を導入した¹⁰。また、これまでの「量的・質的金融緩和」の効果を数値的に評価するレポートを公表した¹¹。その内容をわかりやすく図示した文書では「マイナス

金利付き量的・質的金融緩和」による10年国債金利の引き下げ効果は1%程度である、とした(図11)¹²。

我が国の10年国債金利はその後も低下を続け、2019年にはマイナス0.28%を付けた後、反転し、2024年春には1%に達した。長期金利上昇には円安によるインフレの効果が大きいと思われるが、実際、我が国のインフレ率は2023年初に一時4%台を付けたが、日本銀行は金融政

10 日本銀行「金融緩和強化のための新しい枠組み：『長短金利操作付き量的・質的金融緩和』」https://www.boj.or.jp/mopo/mpmdeci/mpr_2016/k160921a.pdf

11 日本銀行「『量的・質的金融緩和』導入以降の経済・物価動向と政策効果についての総括的な検証」https://www.boj.or.jp/mopo/mpmdeci/mpr_2016/k160921b.pdf

12 日本銀行「目で見える金融緩和の『総括的な検証』と『長短金利操作付き量的・質的金融緩和』」https://www.boj.or.jp/mopo/mpmdeci/mpr_2016/k160921c.pdf

策を変更せず、ようやく2024年3月にマイナス金利政策と長短金利操作を廃止した¹³（異次元緩和の終了）。今思えば、日銀の金融緩和縮小は遅きに失したようにも見えるけれど、これには理由があった。最大の理由は、日銀が「持続的な物価上昇には賃上げが必要」と考え、2023年初には高いインフレ率が政治問題化していたにもかかわらず、2024年の春闘結果まで待ったからである。元々、日銀は「時間軸政策」を採用しており¹⁴、植田総裁はその推進者であった¹⁵。政治的にも、異次元緩和を10年続けた黒田総裁の後を襲った植田総裁が新任早々、逆方向に政策転換することは難しかったと思われる。

しかしマイナス金利や長短金利操作の中止にもかかわらず、円安と長期金利上昇は続いた。これは4月26日の金融政策決定会合直後の会見で、植田総裁が「為替レートは基調的な物価上昇に大きな影響を与えていない」と発言したからとされる（いわゆる「ハイ」発言）¹⁶。

（植田総裁は）外国為替市場で進む円安について「（追加利上げを判断するポイントとなる）基調的な物価上昇率への大きな影響はないとみなさん（日銀の政策委員）が判断した」とし、影響が現時点で無視できる範囲にあるかとの問いにも「はい」と肯定した。

これが市場関係者に「日銀は円高を容認した」

と受け取られ、その後急速な円安が進行したとされるが、ドル円レートは4月26日、前日の155円台から158円台に急騰したものの、その後、財務省による為替介入もあり、いったん152円台に下がった後、7月上旬の161円台へとじわじわと上昇しており、植田総裁の発言のみが大きな効果を与えたとは言い難い。いずれにしても3月のマイナス金利や長短金利操作の廃止にも関わらず、市場関係者が日本の金融政策が大きく変わったと認識していなかったことは確かである。

市場が大きく動いたのは7月である。3日にドル円レートは161円を付け、11日には日経平均株価が終値で42,224円と史上最高値を更新した。しかしその後、市場は暗転し、ドル円と株価は急落した。これには米国経済の指標発表で弱い数字が続いたことが大きいけれど、決定的だったのは、植田総裁の7月31日の金融政策決定会合の後の会見での発言が、4月とは対照的に非常にタカ派的に受け取られたことである¹⁷。

問 今後の利上げの考え方は。

答 現在の実質金利が極めて低い水準にあることを踏まえると、今回示した経済・物価の見通しが実現していくとすればそれに応じて引き続き政策金利を引き上げ、金融緩和の度合いを調整していくことになると考えている。

（中略）

13 日本銀行「金融政策の見直しについて」https://www.boj.or.jp/mopo/mpmdeci/mpr_2024/k240319a.pdf

14 日本経済新聞2013年7月31日付「時間軸政策は逆効果？10年前日銀内で熱い議論」、https://www.nikkei.com/article/DGXNMSFK31017_R30C13A7000000/

15 今の日銀の「時間軸政策」は「過去に名目金利の下方制約（ゼロ金利制約）のため利下げが出来なかった期間に相当する分だけ、物価目標が達成された後も金融緩和を続ける」という考え方である。

16 日本経済新聞2024年4月26日付「日銀総裁、円安『物価上昇に影響なら政策の判断材料』」<https://www.nikkei.com/article/DGXZQOUB259XB0V20C24A4000000/>

17 日本経済新聞2024年7月31日付「個人消費は底堅く推移 日銀の植田総裁会見要旨」<https://www.nikkei.com/article/DGXZQOUB312Z10R30C24A7000000/>

問 政策金利はどこまで上げるか。

答 中立金利に関して大幅な不確実性があるという点は認識が変わっていない。中立金利のそばまで行ったときにどのへんで利上げをストップするのかという問題は大きな課題として依然として残っている。ただ現状では、その不確実な範囲よりはかなり下にある。

問 0.5%以上の利上げもできるか。

答 0.5%が壁として意識されるかという点、特に意識していない。

問 マイナス金利解除から今回までの4カ月というペースで今後も利上げするか。

答 前もって何カ月ごとと決めてパスを思い描いているわけではなく、様々な指標を確認しつつ、ある程度まとまって見通し通りであるということが判断できればそこで次の判断をしていく。

どうもこれが市場関係者には「日銀は0.5%を超えて特に上限なく利上げするつもりだ」と受け取られたようである。7月31日の会見直後から市場の混乱が始まり、8月5日には日経平均株価が4千円以上暴落して終値31,458円となった（令和のブラックマンデー）。ドル円レートも144円で引けた。市場の悲観的な空気を変えたのは8月7日に行われた、日銀の内田副総裁の講演であるとされる¹⁸。この講演は元々予定されており、株価暴落を受けて急遽行われたものではなかったが、内田副総裁が「金融資本市場が不安定な状況で、利上げをすることはないと述べたことが市場に安心感を与えたと言われる。しかし日経平均株価はすでに8月6日に

3千円以上の大きな回復を見せており、内田発言がなくても株価は回復していたと考えられる。どうもマスコミも市場関係者も、日銀の公式文書をあまり読まず、発言だけ聴いて勝手に「タカ派」「ハト派」と騒ぐ傾向があるようだ。

7月の金融政策決定会合では、金融政策の操作目標である無担保コールレートの操作目標を0.25%に引き上げるとともに、国債買入減額スケジュールを具体的に公表した。月間の買入額を4000億円ずつ減らし、2026年3月までに日銀保有国債残高を現在より7～8%減らす見込みとのことである（図12）¹⁹。欧米に比べて中銀バランスシートの縮小スピードは極めて遅く、引き続き緩和的な環境が維持される。そもそも現在のインフレ率は2%前後であるのに、10年国債金利ですら1%を割っている環境で、0.25%の政策金利（無担保コールレート）を少々引き上げたところで実質金利は大きくマイナスのままである。実のところ、2021年以前は名目成長率が非常に低くゼロ%前後だったため実質金利はプラスの局面が多かったのに対し、2022年からのインフレ進行にもかかわらず国内金利が大して上がらなかったことで、実質金利はむしろ大きくマイナスである状況が定着している。つまり今は名目金利が上昇しているにもかかわらず、実質金利は大きく低下している金融緩和の状況なのである。

9月に入り、日経平均株価は回復傾向を示していたが、9月27日（金）に行われた自民党総裁選が石破茂氏の勝利に終わると、週明け30日（月）の東京株式市場において日経平均株価が1849円急落し、「石破ショック」と呼ばれた²⁰。原因は、27日の株式取引時間中に行われた自民

18 日本経済新聞2024年8月7日付「日経平均、900円超安から一転急騰 『ハト派日銀』に安堵」、<https://www.nikkei.com/article/DGXZQOUB070RN0X00C24A8000000/>

19 日本銀行「2024年金融政策決定会合での決定内容」、https://www.boj.or.jp/mopo/mpmdeci/mpr_2024/k240731b.pdf

2024年7月金融政策決定会合での決定内容②：長期国債買入れの減額計画

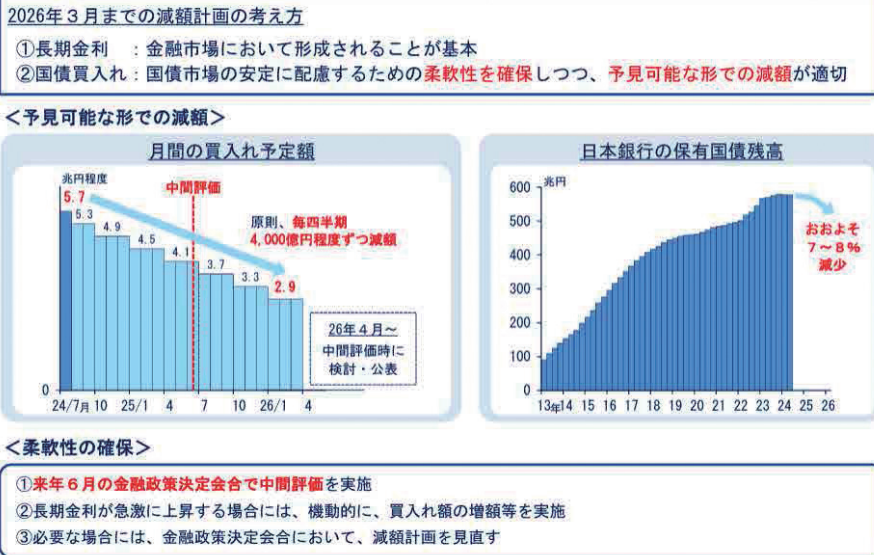


図12 長期国債買入れの減額計画（日本銀行）

党総裁選の第1回投票において、高市早苗候補が党員票と議員票を加えた合計で1位となったのに、夕方に行われた決選投票で石破氏が逆転勝利したのがサプライズだったからである。高市氏はアベノミクスの継承を掲げ、市場参加者は円安株高の復活を期待していたのに対し、金融緩和の見直しや資産課税の強化を訴える石破氏の勝利は株式市場にとってマイナスと受け止められたのである。

その後、石破新首相は総裁選前に掲げていた金融政策の見直しや資産課税強化を後退させ、「今は利上げするタイミングでない」とまで発言した。アメリカの雇用統計が予想以上に良かったこともあり、2024年10月中旬、ドル円レートは150円台で推移し、日経平均株価は3万8千円前後となった。10月に入ってからの

円安と株安の同時進行は、10月27日に投開票が予定されている衆院議員総選挙において自民党が苦戦すると予想されたからである。

7月から10月にかけての市場の動揺と方向感のない推移は、6月までの一方向的な円安株高と全く異なり、日本の政策当局（政府や日銀）の発言が、大きな効果を持つことを示唆している。6月までは「日銀は決して利上げしない」という期待が支配的で、3月の長短金利操作廃止も円安の流れを止めることはなかった。しかし7月の日銀植田総裁発言は、市場参加者の期待を大きく変え、「日本も利上げをする」という認識を広めたと考えられる。また自民党総裁選における、金融政策についての有力候補の発言（石破氏のタカ派発言、高市氏のハト派発言）は一時的に大きなインパクトを市場に与えたので

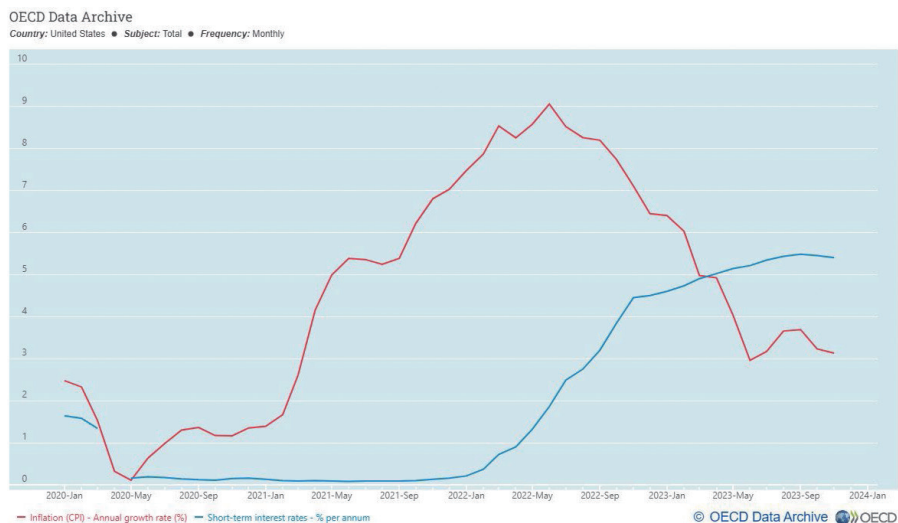


図 13 アメリカのインフレ率と政策金利（OECD データより著者作成）

ある。

ここで日本銀行と FRB の利上げタイミングを比較してみる。アメリカの CPI 上昇は、コロナ期を無視すると2021年の始めから起こっている。インフレ率は2021年5月には5%台に達したにもかかわらず、FRB は政策金利を引き上げず、インフレ率が7%に達した2022年春ようやく利上げを開始した(図13)。これはロシアのウクライナ侵攻とタイミングが一致している。インフレ率は2022年5月頃、9%でピークアウトしたにもかかわらず、FRB は利上げを続け、2023年春には政策金利がインフレ率を上回った。政策金利がインフレ率を2%程度上回る状態が最近まで続いている²¹。

これに対し日本では過去30年間なかったインフレ率の高さにもかかわらず、日本銀行はマイナス金利を続けた(図14)。コロナ禍のため東京五輪が行われた2021年夏までこそインフレ率は

マイナス1%だったが、秋からコロナ流行が沈静化し、インフレ率はプラスに転じ、ロシアのウクライナ侵攻もあって2022年夏までにインフレ率は3%に達した。それでも日銀は動かず、マイナス金利（長短金利操作）を解除したのはようやく2024年3月だった。2022年の春から2024年の春まで、実に2年の長きにわたって、日本銀行は自らが定めた物価目標2%を上回るインフレを放置したのである。これは日銀が、物価上昇よりもむしろ賃金上昇を重視し、日本の特殊な賃金慣行（ボーナス制、春闘）を考慮して、物価上昇の効果が賃金上昇に反映されるのを待ったからである。

厚生労働省が公表している毎月勤労統計調査では、令和5年までを年単位で表示し、令和5年7月からを月単位で表示しているのも、奇妙な形となっているのでわかりにくい²²(図15)。そこで日本経済新聞が月単位で推移をまとめた

21 OECD Data: [https://data-explorer.oecd.org/vis?lc=en&df\[ds\]=DisseminateArchiveDMZ&df\[id\]=DF_DP_LIVE&df\[ag\]=OECD&df\[vs\]=&av=true&pd=2020-01%2C2023-12&dq=USA.STINT%2BCPI.TOT.PC_PA%2BAGR.WTH.M&to\[TIME_PERIOD\]=false&vw=tl&ly\[cl\]=TIME_PERIOD&ly\[rs\]=MEASURE&ly\[rw\]=INDICATOR&lb=nm](https://data-explorer.oecd.org/vis?lc=en&df[ds]=DisseminateArchiveDMZ&df[id]=DF_DP_LIVE&df[ag]=OECD&df[vs]=&av=true&pd=2020-01%2C2023-12&dq=USA.STINT%2BCPI.TOT.PC_PA%2BAGR.WTH.M&to[TIME_PERIOD]=false&vw=tl&ly[cl]=TIME_PERIOD&ly[rs]=MEASURE&ly[rw]=INDICATOR&lb=nm)

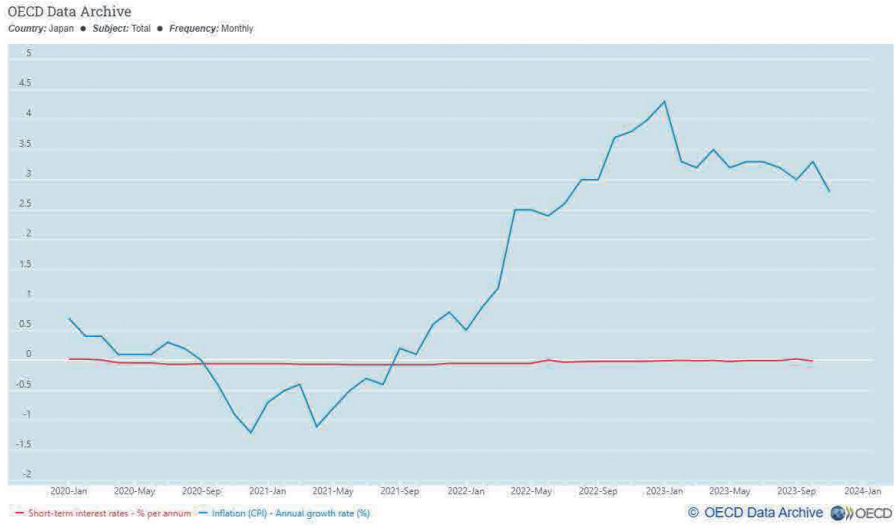


図 14 日本のインフレ率と政策金利 (OECD データより作成)

1-1 図 賃金の動き 事業所規模別現金給与総額

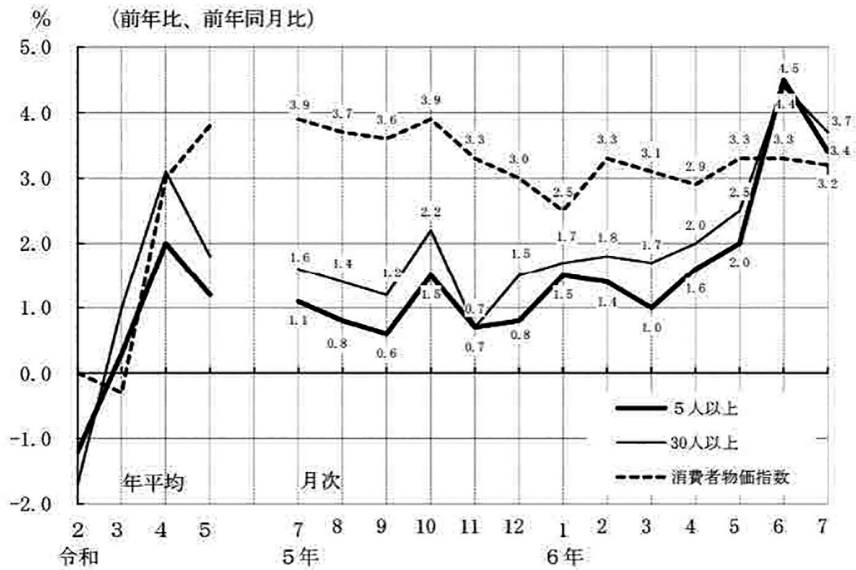


図 15 毎月勤労統計調査 (2024年7月確報)

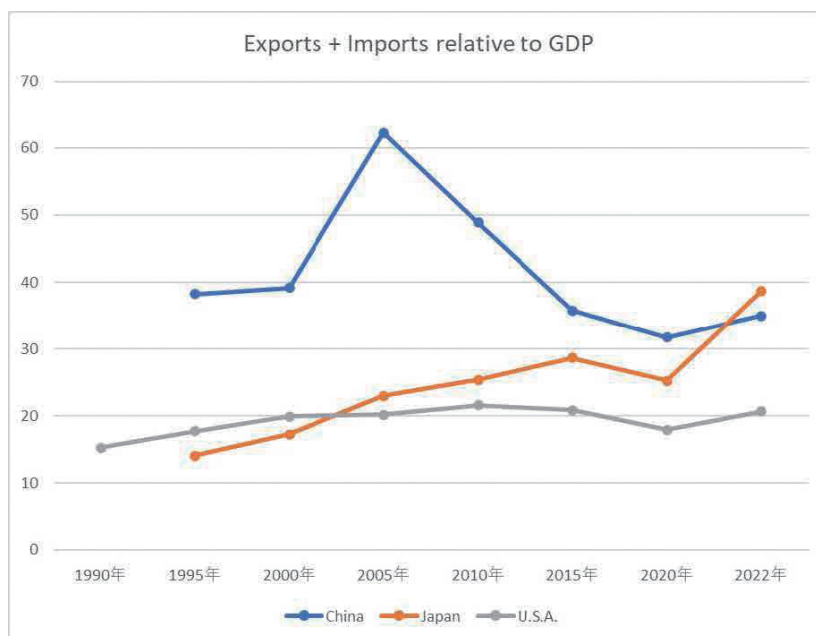


図 16 日米中の貿易依存度（輸出+輸入の対 GDP 比、%）
国際貿易投資研究所（ITI）のデータから筆者が作成

グラフでみてみると、賃金上昇率は2022年12月、2023年5月、2024年6月に非常に高い値を示した²³。12月は冬賞与、5月6月は春闘と春賞与、それぞれの効果を表している。これは対前年比なので、前年に大きく引き上げ今年も維持した場合、上昇率は小さくなる。いずれにしても2024年春までは、2年にわたって、インフレ率が目標値を上回る状態が続いたのである。インフレ率は2023年の春にピークアウトしており、その後は低下傾向にあるとはいえ目標値を上回っているの、日本銀行が利上げに踏み切ったのは当然である。いずれにしても、「インフレ率が下がり始めているのに利上げするのは

おかしい」という一部にある批判は当たらない。

IV. 円安と日本経済の構造問題

景気回復期はいつもそうであるが、にわかに「景気対策より構造改革」論が盛んになる。また、目先の経済現象をことさら構造問題の反映とみる議論も盛んになる。

まず円安と輸出入、貿易依存度の関係を見る。図16は、日本の貿易依存度（輸出+輸入の対 GDP 比、%）を表したものである²⁴。日本の貿易依存度は過去30年間、上昇を続けている。

22 厚生労働省「毎月勤労統計調査」<https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/30-1a.html>

23 日本経済新聞2024年8月14日付「岸田首相が総裁選不出馬 データでふりかえる3年」<https://nikkei.com/telling/DGXZTS00011720W4A800C2000000/>

24 データは国際貿易投資研究所（ITI、<https://iti.or.jp/statistics/ics/tradestat>）

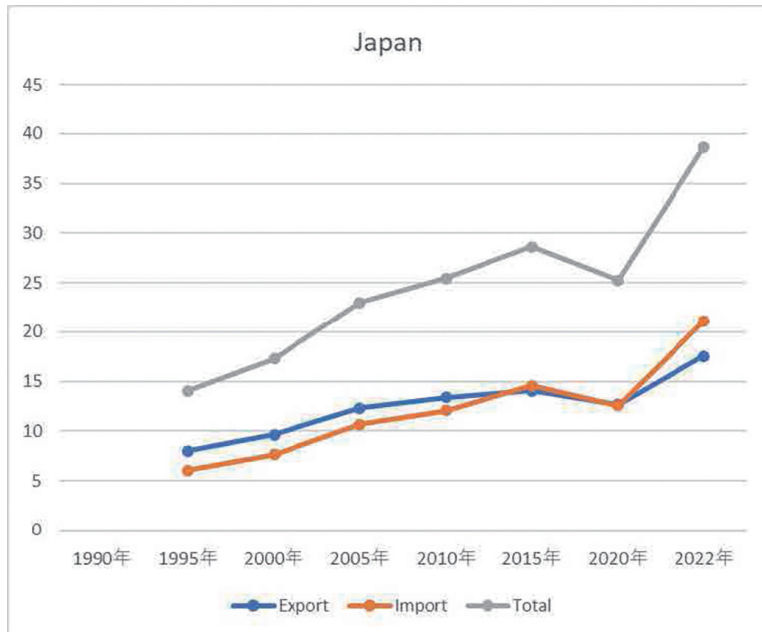


図 17 日本の輸出と輸入、貿易依存度
国際貿易投資研究所 (ITI) のデータから筆者が作成

これに対して中国の貿易依存度は2000年代半ばには60%と高かったものの、次第に内需主導経済に転換し、今では日本並みである。さらに米国の貿易依存度は一貫して20%と、日中より低い。

次に日本の貿易の構成を見る (図17)。2010年までは輸出が輸入を上回っていたが、2015年には輸入が輸出を上回った。これは東日本大震災での原発事故以来、原子力発電が大幅に減って原油・天然ガスなど化石燃料の輸入が急増したことを反映するだけでなく、企業の現地生産が進み、外国で作って日本に輸出する場合も増えたからである。2020年以降、世界の資源価格が上昇し、円安が進むと、輸出入ともに急増するが、輸入増が輸出増を上回るので貿易赤字が発生するようになった。世界のインフレ環境で

も、日本の輸出品は輸入品 (燃料資源や食糧) ほど値上がりしない、つまり交易条件の悪化を通じて貿易赤字が発生するのである。とはいえ、日本からの輸出金額は過去最高水準であり、グローバル化で日本の輸出産業が衰退した事実はない。ただ輸入に比べて輸出の伸びが小さいのである。

最後に、選挙結果と景況感や国民の生活意識の関係を見てみたい。2024年10月27日の衆院議員選挙で、石破首相率いる自民党は大敗し、自公 (与党である自民党と公明党の合計) 過半数割れとなった²⁵。これについてはいわゆる裏金問題による国民の政治不信が原因と言われるが、むしろ円安インフレによる生活感の悪化が原因という声も強い。これを確かめるために日本銀行が公表している生活意識調査を見てみよ

25 日本経済新聞2024年10月28日付「衆院選全議席確定、自民191・立民148 政権枠組み探る」<https://www.nikkei.com/article/DGXZQOUA185AV0Y4A011C2000000/>

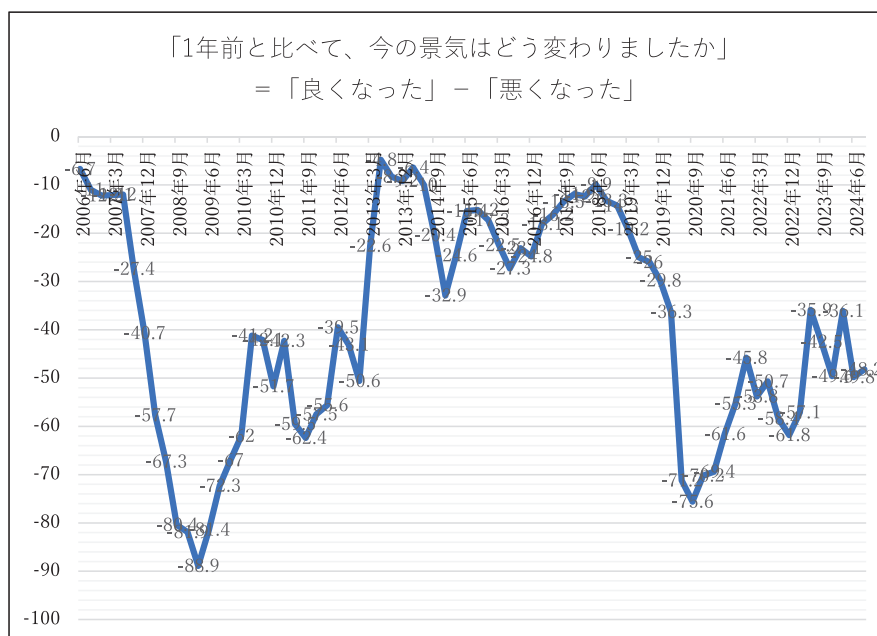


図 18 景況感 DI の推移（日銀のデータを元に著者作成）

う²⁶。まず景況感の推移は図18のようになる。景況感はリーマン危機で悪化し、民主党政権初期で改善したが、東日本震災で悪化した。アベノミクスで大幅改善したが、コロナ禍によって急落し、現在は回復途上にある。安倍政権の国政選挙連勝は景況感で説明できるように見えるが、必ずしも景況感が良くなかった2021年の衆院選で岸田政権は絶対安定多数を確保した。

次に生活（暮らし向き）実感はどのように推移したか（図19）。暮らし向き実感は景況感と同じような推移を見せているが、大きな違いは、コロナ禍の時に顕著な悪化を見せず、むしろ改善していることである。これは岸田政権の衆院選勝利と整合的に見える。暮らし向き実感の悪化は2021年の後半から起こり、2022年に急落している。2022年はコロナ禍からの回復期にあた

るが、同じタイミングで円安インフレが起こり、国民の生活実感が急速に悪化したことがわかる。その後変動は見られるものの、生活実感は低位推移しており、2024年10月の衆院選での自民党大敗と整合的である。景況感よりも生活実感の方が国政選挙結果と整合的である。この5年を振り返ると、景況感より生活実感の方が選挙結果を上手く説明している。ちなみに生活実感が2014年に低下してるのは、消費税率引き上げ（5%→8%）が効いていると推測される。しかし追加引き上げ（8%→10%）の2020年には生活実感の低下は見られず、むしろ上昇しているのは不思議である。コロナ給付金や在宅勤務が国民の生活実感を改善したのだろうか？

安倍政権初期においてもそうであったが、景気回復期には「需要創出よりは供給面の改革が

26 日本銀行「生活意識に関するアンケート調査」https://www.boj.or.jp/research/o_survey/index.htm

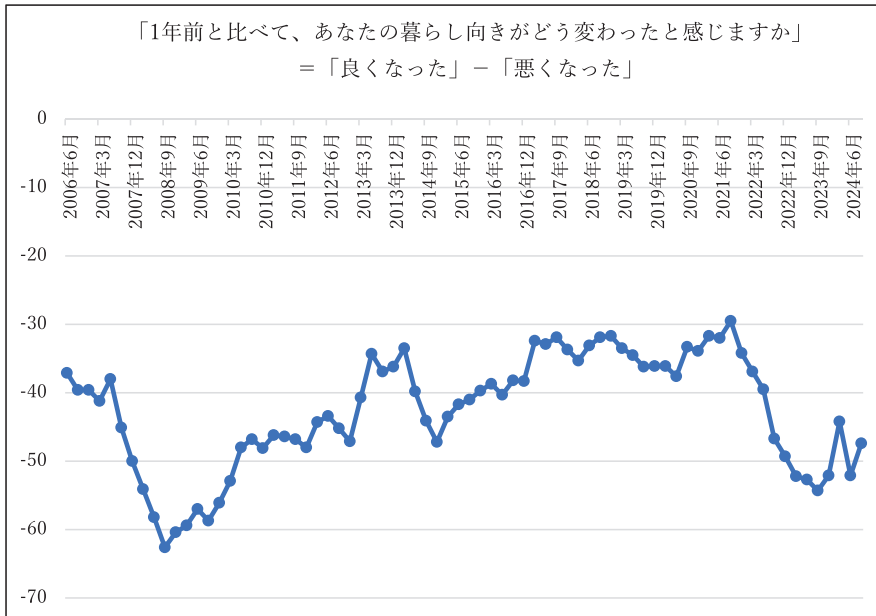


図 19 生活（暮らし向き）実感の推移（日銀データを元に著者作成）

必要」という議論が盛んになる。今回も、労働市場流動化論が喧伝されている。労働市場流動化論は、リスキリング（新技術習得）によって労働者が成長産業に移りやすくするといった労働者の自発的な転職を促すものから、自民党総裁選において小泉進次郎氏が主張した「解雇規制の見直し」のような、「企業の裁量の自由を拡大して非自発的な離職を増やそう」とするものまで幅広い。そもそも成長産業とは何か。人手不足が発生している情報技術産業で必ずしも労働生産性が上がっているわけでないことはすでに今井（2024）で指摘した。生産性は必ずしも高くないが社会的に必要な業種で人手不足が大きいことも知られている。例えば、公共交通（路線バス等）では運転手が不足しているし、建設労働者も不足していると言われる。例えば後期

高齢者の医療・介護のように、需要は強いが社会的にムダと言われかねない雇用もある。つまり何が社会的に望ましい労働移動であるのか、社会的合意が存在するとはあまり思われない。

解雇規制緩和は実質的に被雇用者の負担で雇用を流動化しようという議論である。しかし会社（勤務先企業）が廃業することによって発生する労働移動も存在する。我が国では先進国の中では開廃業率の低い国である（図20）²⁷。廃業率が低ければ開業率も低くなる。その結果として労働移動も低調になる。開廃業率の低さが我が国の労働生産性の低さの原因であるとする議論も有力である。最も影響力のあった議論は Caballero, Hoshi and Kashyap（2008）によって提案された「ゾンビ企業」論である。彼らは日本の銀行の貸出金利の低さに注目し、金利が低

27 中小企業白書2017、https://www.chusho.meti.go.jp/pamflet/hakusyo/H30/h30/html/b1_2_1_3.html

第1-2-6図 開廃業率の国際比較

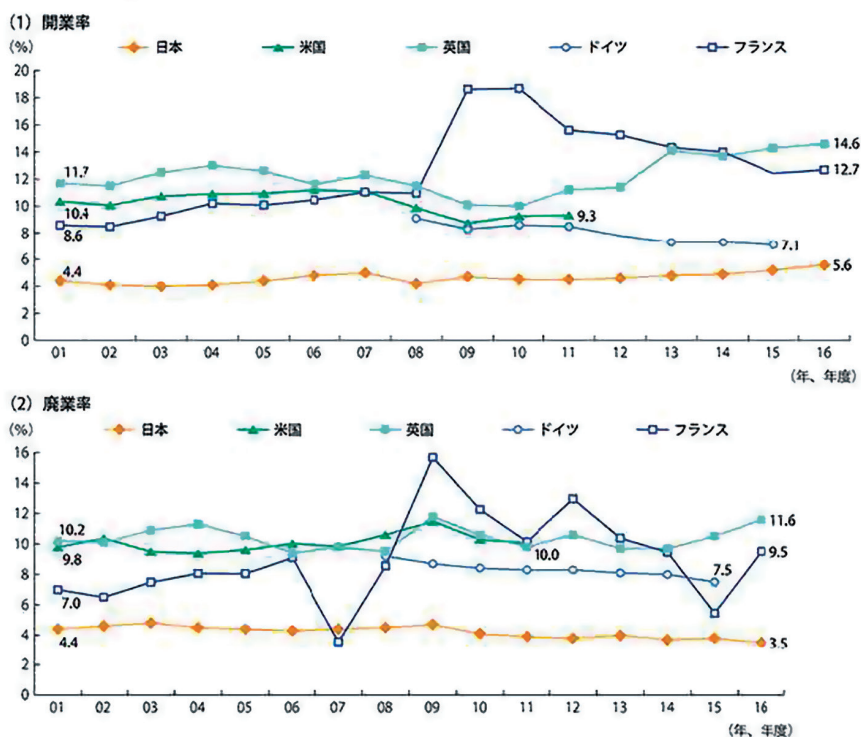


図 20 開廃業率の国際比較 (中小企業白書2017より転載)

すぎるために低生産性の企業が存続し、新しい企業の参入を阻んでいると論じたのである。彼らは、2000年頃までの日本の労働生産性や全要素生産性 (TFP、Total Factor Productivity) の低さは銀行による過剰な「追い貸し」のためであるとした。低生産性の企業を存続させるのは低金利に限らない。プリンストン大学の清滝信宏も経済財政政策諮問会議において「1%以下の金利でなければ採算が取れないような投資をいくらしても、経済は成長しない」と発言している²⁸。さらに最近では低賃金が低生産性の企業を存続させているとする議論も注目されており、この10年間、日本政府は法廷最低賃金の引

き上げを進めて来た。

これらの議論は、企業の需要促進に偏った経済政策がかえって経済成長を損なう可能性を示唆したものである。日本政府はこれまで中小企業の保護育成を重視した政策を続けて来た。リーマン危機 (世界金融危機2008～) やコロナ禍で発動された雇用調整助成金も同様に既存企業の保護を通じて産業の新陳代謝を遅らせた可能性がある。今井 (2023) で紹介したように、米国でコロナ禍からの回復期に労働に対する超過需要が発生したため、その後のインフレは賃上げ主導であった。アメリカではいったん雇用関係が断ち切られるために、需要と供給にミス

28 熊野英生「著名経済学者から金融政策への警鐘」<https://www.dlri.co.jp/report/macro/253027.html>

経済財政政策諮問会議 2023年5月15日 <https://www5.cao.go.jp/keizai-shimon/kaigi/minutes/2023/0515/agenda.html>

マッチが発生し、大きな賃上げが必要になったとされる。しかるに日本では形式的には休業という形で雇用関係は継続したため、需要と供給のミスマッチは発生せず、雇用は賃上げを伴わず急速に回復したが、そのために従来 of 低生産性雇用もそのまま継続した、という考え方が、検証が望まれる。

終わりに～普通の経済への道

本稿では、2024年の日本経済の動向について、(1)物価水準の推移、(2)実質賃金の推移、(3)日本銀行の金融政策の推移、(4)円安と構造問題の関係、以上4つの視点から多角的に考察した。

結論を言うと、(1)インフレ率は産業によって異なり、日本では特に燃料価格と食料品、一般家庭用品の値上げが大きく、これらの財の需要の価格弾力性が低いことから、国民の不満が大きい。

(2)賃金交渉が春先に集中し、それ以外では賃金改定が起こりにくい労働市場の性質により、日本では名目賃金の上昇が遅れており、実質賃金の低下が長引いている。

(3)日本銀行の金融政策について時間軸政策を取っており、激しいインフレを体験してもそれが利上げに反映されるまでに大きなタイムラグがある。そのため市場関係者に「日銀は変わらない」との強い期待を生み、それが2024年夏の金融市場の混乱の原因となった。

(4)「円安は日本経済の構造問題の反映である」という論について、(4-1)日本の加工貿易体質により、輸出価格は輸入価格ほど大きく上がらないので、貿易赤字が発生している。日

本からの輸出数量は増えており、輸出産業が衰退しているわけではない。

(4-2)最近の先進国の政治的不安定はインフレによると言われるが、日本でも同じである。企業の景況感と国民の生活実感には大きな乖離があり、それが政策の難しさにつながっている。例えば日本銀行は、景況感を考えれば低金利を継続するべきだが、国民の生活を考えれば利上げした方が良いかもしれない。

(4-3)日本は先進国の中では、企業の開廃業率が低い国である。低金利の長期化が、日本の産業構造改革を遅らせている可能性がある。

2024年12月末、日本銀行の植田総裁は、市場関係者にハト派と受け取られる発言を続けている²⁹。日銀は、2025年1月の利上げを見送り、3月頃まで春闘の結果を見極める構えのようである。まさに利上げしてほしいのなら賃上げしてください」というメッセージに見える。結果がどうなったかは、来年のレビューに譲りたい。

参考文献

1. 今井亮一 (2021) 『2020年：コロナ感染拡大と日本経済』九州大学留学生センター紀要第29号、21-38。
2. 今井亮一 (2022) 『2021年：コロナ禍と日本経済』九州大学留学生センター紀要第30号、1-16。
3. 今井亮一 (2023) 『コロナ禍からの回復期におけるインフレーション』九州大学留学生センター紀要第31号、29-62。
4. 今井亮一 (2024) 『経済回復期のインフレと円安』九州大学留学生センター紀要第32号、19-44。
5. 厚生労働省「毎月勤労統計調査」<https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/30-1a.html>
6. 総務省「消費者物価指数 (CPI)」<https://www.stat.go.jp/data/cpi/>
7. 日本銀行「企業物価指数」https://www.boj.or.jp/statistics/pi/cgpi_release/index.htm
8. 日本銀行「時系列統計データ検索サイト」<https://>

29 日本経済新聞2024年12月27日付「日銀、利上げ判断へ賃金重視 市場『来月予想』4割に低下」、<https://www.nikkei.com/article/DGXZQOUB2730W0X21C24A2000000/>

- www.stat-search.boj.or.jp/index.html
9. 日本生産性本部 (2023) 「労働生産性の国際比較」
<https://www.jpc-net.jp/research/detail/006474.html>
 10. Bureau of Economic Analysis: All Countries Total
-International Trade and Investment Facts, <https://apps.bea.gov/international/factsheet/factsheet.html>
 11. Ricardo J. Caballero, Takeo Hoshi, and Anil K. Kashyap (2008) Zombie Lending and Depressed Restructuring in Japan, *American Economic Review*, vol.98, No.5, 1943-77.
 12. IMF, Exchange Rates selected indicators, <https://data.imf.org/regular.aspx?key=61545850>
 13. IMF, Implied PPP conversion rate, <https://www.imf.org/external/datamapper/PPPEX@WEO/OEMDC/CHN/JPN>
 14. IMF Interest rates selected indicators, Japan, <https://data.imf.org/regular.aspx?key=61545855>
 15. OECD, Average wages, <https://data.oecd.org/earnwage/average-wages.htm>
 16. OECD, GDP per hour worked, <https://data.oecd.org/lprdy/gdp-per-hour-worked.htm>
 17. OECD, Long-term interest rates, <https://data.oecd.org/interest/long-term-interest-rates.htm>

部門・コースの活動報告2025

九州大学留学生センター

(報 告)

基幹教育の日本語	郭 俊海・大神智春・脇坂真彩子・楠木理香	… 49
日本語研修コース	大神 智 春	… 57
筑紫・大橋地区日本語コース — 2024年度 —	小 山 悟	… 65
Japanese Academic Courses (JACs) / 言語文化基礎科目・日本語	楠木理香・脇坂真彩子	… 69
2024年度 伊都キャンパス・病院（馬出）キャンパス日本語補講コース	柴 田 あづさ	… 83
農学部・工学部の学士課程国際コース生に対する日本語教育 — 2024年度の実施状況 —	柴 田 あづさ	… 91
日本語・日本文化研修コースの報告（第24期生）	郭 俊 海	… 95
Fostering Global Citizenship: The Long-Term Impact of Kyushu University's JTW Program	Chisato Nonaka	… 101
Annual Report for Japan in Today's World (JTW) A Brief Review of the 30 th Class (Oct. 2023—Jul. 2024)	Chisato Nonaka, Masa Higo and Ryoichi Imai	… 111
2023年度“AsTW2024”実施報告	生 田 博 子	… 117
令和6年度海外留学派遣支援事業 学部生・大学院生共通基幹教育科目「世界が仕事場 I & II」	生 田 博 子	… 121
2023年度九州大学留学生センター・留学生指導部門報告 (カウンセリング関係)	黄 正国・肥後裕輝	… 127

基幹教育の日本語

Report on the Fundamental Subjects for Language and Culture/Japanese

郭 俊 海*

大 神 智 春*

脇 坂 真彩子**

楠 木 理 香**

1. はじめに

基幹教育では、「学び方、考え方を学ぶ」姿勢の涵養こそが学問追求の基本であるという観点に立ち、自ら問いを立て主体的な学びのできるアクティブ・ラーナーを育成することを目標として掲げている。基幹教育院のマネジメントのもと、全学出動態勢で教育が行われている。学部留学生が対象の「日本語」は、基幹教育院教員を班長とする日本語班において、留学生センターの日本語教育部門の教員と連携して、授業運営を行っている。

基幹教育の「日本語」は言語文化科目・言語文化基礎科目に分類されている。平成31年4月から、基幹教育の日本語は留学生センターの日本語コース（JACs: Japanese Academic Courses）と一本化され、言語文化基礎科目・日本語（Fundamental Subjects for Language and Culture/Japanese）として開講されている。

2. 令和6年度の実施概要

2. 1. 開講科目及び履修方法

「日本語」のカリキュラムは、四技能（聞く・話す・読む・書く）を段階的にバランスよく伸ばし、大学の学士課程で学術活動を行えるレベルの日本語の運用能力を身につけられるように編成されている。1年生においては、様々な話題を取り上げ、文法や語彙の学習、読解や作文練習、口頭発表やディスカッション等を行う。2年生以上においては、より抽象度の高い専門的なテーマを取り上げ、読解やディスカッション、アカデミック・ライティングの実践等を通して、より高度な日本語運用能力を

*九州大学留学生センター教授

**九州大学留学生センター准教授

身につけることを目指す。

4月入学の全学部1年生は「基幹教育科目（日本語Ⅰ～Ⅳ）」、2年生以上は「基幹教育科目（日本語Ⅴ～Ⅶ）」を履修することとなっている。「日本語」を細分類すると表1のようになる。

共創学部10月入学生は、総合日本語（Japanese Integrated）、漢字（Japanese Kanji）、会話（Japanese Speaking）、作文（Japanese Writing）の4コースから必要単位数分の授業を選択し履修することになっている（表2）。

基幹教育科目の日本語を履修するには、通常の履修登録に加えて、授業開始前にならず専用のシステムへの受講登録が必要であり、春学期と秋学期の開始前に、基幹教育教務係を通じて学生へ周知している。

表1 学部正規留学生対象日本語科目一覧及び開講学期¹

科目名	単位数	開講学期					
		1年前期		1年後期		2年前期	
		春	夏	秋	冬	春	夏
日本語Ⅰ（JI-6A）	1	○					
日本語Ⅱ（JI-6B）	1		○				
日本語Ⅲ（JI-7A）	1			○			
日本語Ⅳ（JI-7B）	1				○		
日本語Ⅴ（JI-8A）	1					○	
日本語Ⅵ（JI-8B）	1						○
日本語Ⅶ（JW-8A）	1					○	

表2 共創学部10月入学生対象日本語科目一覧及び開講学期

コース		I		K		S		W	
		Japanese Integrated （総合コース） 各1単位		Japanese Kanji （漢字コース） 各1単位		Japanese Speaking （会話コース） 各1単位		Japanese Writing （作文コース） 各1単位	
		春・秋 学期	夏・冬 学期	春・秋 学期	夏・冬 学期	春・秋 学期	夏・冬 学期	春・秋 学期	夏・冬 学期
1	Japanese 1（入門）	JI-1A	JI-1B	JK-1+2A	JK-1+2B	-	-	-	-
2	Japanese 2（初級1）	JI-2A	JI-2B			JS-2A	JS-2B	-	-
3	Japanese 3（初級2）	JI-3A	JI-3B	JK-3A	JK-3B	JS-3A	JS-3B	-	-
4	Japanese 4（中級入門）	JI-4A	JI-4B	JK-4A	JK-4B	JS-4A	JS-4B	-	-
5	Japanese 5（中級1）	JI-5A	JI-5B	JK-5A	JK-5B	JS-5A	JS-5B	JW-5A	JW-5B
6	Japanese 6（中級2）	JI-6A	JI-6B	JK-6A	JK-6B	JS-6A	JS-6B	JW-6A	JW-6B
7	Japanese 7（上級入門）	JI-7A	JI-7B	JK-7A	JK-7B	JS-7A	JS-7B	JW-7A	JW-7B
8	Japanese 8（上級）	JI-8A	JI-8B	JK-8A	JK-8B	JS-8A	JS-8B	JW-8A	JW-8B

¹『令和6（2024）年度入学者用 基幹教育 履修要項』112頁より抜粋（一部改編）

2. 2. 単位履修のオリエンテーション

毎年4月の一週目に、新入学部留学生（共創学部生も含む）を対象に、基幹教育の言語文化基礎科目・日本語科目の履修方法、科目登録及び日本事情に関するオリエンテーションを実施している。また、秋学期開始前には、共創学部10月入学生及び工学部・農学部学士課程国際コース（International Undergraduate Programs in English（以下 IUPE））の学生を対象にオリエンテーションを実施している。

令和6年度4月はセンター2号館で対面式のオリエンテーションを実施した。オリエンテーション後も、問い合わせがあった学生に対して、適宜履修に関する指導や対応を行った。共創学部10月入学生と IUPE 生に対しても、対面でオリエンテーションを実施した。また、受講登録終了後に未登録者や登録失敗者に対して、所属学部の教務係経由で受講登録の指導を行った。

2. 3. 単位の取り方

基幹教育科目では、第1・第2外国語の選択は平成25年以前と大きく異なり、大半の学部では「日本語」は基本的に第2外国語（文科系5単位、理科系4単位）に変わった。なお、学部、学科別の第1・第2外国語の指定及び修得単位数は以下の通りである（表4・5）。

【共創学部以外の外国人留学生対象】

日本語を第1・第2外国語に選択した場合は、所属学部・学科の卒業単位数を満たすように、原則として次のよう履修させることにしている（表3）。

表3 日本語の履修

科目名	単位	開講学期	修得上限単位	再履修の仕方
日本語Ⅰ (JI-6A)	1	1年春	1	日本語Ⅰを再履修すること
日本語Ⅱ (JI-6B)	1	1年夏	1	日本語Ⅱを再履修すること
日本語Ⅲ (JI-7A)	1	1年秋	1	日本語Ⅲを再履修すること
日本語Ⅳ (JI-7B)	1	1年冬	1	日本語Ⅳを再履修すること
日本語Ⅴ (JI-8A)	1	2年春	1	日本語Ⅴを再履修すること
日本語Ⅵ (JI-8B)	1	2年夏	1	日本語Ⅵを再履修すること
日本語Ⅶ (JW-8A)	1	2年春	1	日本語Ⅶを再履修すること

表4 単位の取り方と卒業必要単位数（履修例）²

卒業要件 単位数	基本的な単位の取り方		
	1年前期	1年後期	2年前期
2単位 必要な場合	日本語Ⅰ・Ⅱから 2単位分履修		
4単位 必要な場合	日本語Ⅰ・Ⅱから 2単位分履修	日本語Ⅲ・Ⅳから 2単位分履修	
5単位 必要な場合	日本語Ⅰ・Ⅱから 2単位分履修	日本語Ⅲ・Ⅳから 2単位分履修	日本語Ⅴから 1単位分履修
6単位 必要な場合	日本語Ⅰ・Ⅱから 2単位分履修	日本語Ⅲ・Ⅳから 2単位分履修	日本語Ⅴ・Ⅵから 2単位分履修
7単位 必要な場合	日本語Ⅰ・Ⅱから 2単位分履修	日本語Ⅲ・Ⅳから 2単位分履修	日本語Ⅴ・Ⅵ・Ⅶから 3単位分履修

留学生の第1・第2外国語の選択では、英語・ドイツ語・フランス語・中国語・ロシア語・韓国語・スペイン語の7つの言語と日本語の中から選択できる。なお、日本語を第1・第2外国語に選択した場合は所属学部・学科の卒業単位数を満たすように履修しなければならないとしているが、特例として、所属学部が認める場合は、英語を第1外国語に指定する学部・学科においても英語を第2外国語とし、英語以外の言語を第1外国語にすることができる（表5参照）。また、その場合は、第1外国語と第2外国語のそれぞれの修得単位数を定めず、両者を合わせて12単位を修得することができるとしている。

第1・第2外国語の履修の特例を認める学部は、共創学部（10月入学者のみ）、教育、法、理、医、歯、薬、工、農学部である。文、経済、芸術工については、特例のケースは認めていない。

表5 学部・学科別の第1・第2外国語の指定及び修得単位数³

学部		区分	履修言語	1年次	2年次以降	修得単位数
共創学部	4月入学者	第1外国語	英語	10	2	12
		第2外国語	初修外国語	4	0	4
	10月入学者	第1外国語	日本語	8	4	12
		第2外国語	英語又は初修外国語 ^(※)	4	0	4
文学部 (右の2パターンから選択)	第1外国語	英語	4	3	7	
		初修外国語	4	1	5	
	第2外国語	初修外国語	4	3	7	
		英語	4	1	5	
文学部 (国際コース)	第1外国語	英語	10	2	12	
	第2外国語	初修外国語	4	1	5	

2 『令和6（2024）年度入学者用 基幹教育 履修要項』112頁より抜粋

3 『令和6（2024）年度入学者用 基幹教育 履修要項』102頁より抜粋。

※第2外国語は第1外国語で履修する言語を除き、主となる母語以外の言語を履修する。

教育・法・経済学部	第1外国語	英語	4	3	7
	第2外国語	初修外国語	4	1	5
理・医・工・芸術工・農学部	第1外国語	英語	4	4	8
	第2外国語	初修外国語	4	0	4
歯・薬学部	第1外国語	英語	4	6	10
	第2外国語	初修外国語	2	0	2

このような複雑な履修方法のため、従来、学務部基幹教育課と留学生センターの日本語教育部門・留学生指導部門が共同で実施する新入生オリエンテーションで、留学生のみを集めて履修解説を行っている。

2. 4. 受講者数

本年度の「日本語」の延べ受講者数は計63名（前期32名、後期31名）であった。以下に、所属学部別と履修科目別の内訳を示す。

所属学部	(名)	
	前期（春夏学期）	後期（秋冬学期）
受講者	32	31
延べ受講者	36	41
工学部	8	7
経済学部	4	2
農学部	4	4
文学部	3	1
法学部	3	2
理学部	1	1
共創学部（4月入学生）	3	2
共創学部（10月入学生）	6	12

前期（履修科目別）

科目名	(名)
日本語Ⅰ・日本語Ⅱ	17
日本語Ⅴ・日本語Ⅵ	8
日本語Ⅶ	1
JI-2A・JI-2B	2
JI-3A・JI-3B	1
JI-4A・JI-4B	1
JK-3A・JK-3B	2
JK-4A・JK-4B	1
JK-8A・JK-8B	1
JS-4A・JS-4B	1
JS-5A・JS-5B	1

後期（履修科目別）

科目名	(名)
日本語Ⅲ・日本語Ⅳ	19
JI-1A・JI-1B	5
JI-3A・JI-3B	3
JI-5A・JI-5B	2
JK-1+2A・JK-1+2B	6
JK-4A・JK-4B	2
JK-5A・JK-5B	2
JS-3A・JS-3B	1
JW-6A・JW-6B	1

2. 5. 時間割

時間割は表6の通りである。前期（春夏学期）、後期（秋冬学期）ともに同様の時間割となっており、各コースとも1週間に2回のクォーター制で開講されている。初級～初中級向け Japanese: Integrated (JI-1～JI-4) については、IUPE 生向けクラスと共創生向けクラスに分割し、きめ細かい指導が行えるようにしている。

表6 時間割⁴

時限	火	水	木	金
1	JI-1 JI-2 JI-3 JI-4	JI-1 JI-2 JI-3 JI-4 JW-5 JW-6 JW-7 JW-8 / 日本語Ⅶ	JI-1 JI-2 JI-3 JI-4	JI-1 JI-2 JI-3 JI-4 JW-5 JW-6 JW-7 JW-8 / 日本語Ⅶ
4	JS-2 JS-3 JS-4 JS-5 JS-6 JS-7 JS-8	JK-1+2 JK-3 JK-4 JK-5 JK-6 JK-7 JK-8	JS-2 JS-3 JS-4 JS-5 JS-6 JS-7 JS-8	JK-1+2 JK-3 JK-4 JK-5 JK-6 JK-7 JK-8
5		JI-5 JI-6 / 日本語Ⅰ・Ⅱ JI-7 / 日本語Ⅲ・Ⅳ JI-8 / 日本語Ⅴ・Ⅵ		JI-5 JI-6 / 日本語Ⅰ・Ⅱ JI-7 / 日本語Ⅲ・Ⅳ JI-8 / 日本語Ⅴ・Ⅵ

3. おわりに

留学生の中には、様々な理由で日本語の「聴く」、「話す」、「読む」、「書く」の4技能のバランスが良くない学生が少なくない。特にレポートや論文などの文章作成や、日本語による口頭発表など応用面において問題がある学生が散見される。しかし、現在の履修規定では、正規留学生は日本語レベルにかかわらず、特定の科目を受講することになっているため、必ずしも自分の日本語レベルに合ったクラスを受講できる訳ではない。今後は教育効果をさらに高めるため、課題として、学期開始前にプレースメントテスト等を実施し、学生がレベルに合ったクラスを受講できるよう検討を継続していきたい。

また、「日本語」を第2外国語とした場合、大半は2単位或いは4単位しか必要がなくなる。卒業に向けての専門科目の学習は、日本語の力、特に聴く力と書く力がなるとかなり難しいため、統合後の

4 基本的には火曜日と木曜日に開講されている JI-1～JI-4は IUPE 生を対象としており、水曜日と金曜日に開講されている JI-1～JI-4は共創学部生と交換留学生を対象としている。

カリキュラムでどのように学生の実践的な日本語力の向上を図るべきかが課題である。また、高度な日本語力を持っている学生が、日本語学習のモチベーションを保ちつづけられるように、指導法の工夫もさることながら、履修規定の見直しなどの検討も引き続き必要である。

基幹教育の言語文化基礎科目として開講されている日本語科目の履修登録は、学期が始まる前までに完了する必要がある。既習者には受講登録期間開始時に一斉メールを送信し、新規履修者には各学部の学生係を通じて周知するなど、様々な工夫を重ねてきた。しかし、より効果的に学生へ周知する方法については、今後も引き続き検討すべき課題である。

日本語研修コース

Japanese Training for Advanced Studies

大神 智 春*

1. 日本語研修コースの概要

日本語研修コースは、大学院に進学する予定の国費研究留学生を主な対象として、来日後の半年間日本語予備教育を集中的に行うコースである。日本語研修コース（以下研修コース）では、初級からの日本語教育、日本事情教育、専門教育の場への適応を促進するための活動、の3点を予備教育として行っている。目標は「会話を中心とした初級日本語を習得させること」、「研究の場において日本人と基本的なコミュニケーションができるようにすること」である。以下に令和5年度（2023年度）の実施状況を報告する。

2. 実施概要

令和5年度（2023年度）の研修コースの実施時期、主な日程は下記のとおりである。

- 1) 実施期間 前期 4月11日 - 9月1日（第76期）
後期 10月5日 - 3月1日（第77期）

2) 主な日程

①前期

ゼロ初級者への平仮名指導（オンライン）	3月上旬に開始
第1回目オリエンテーション	4月7日
第2回目オリエンテーション	4月10日
開講	4月10日
授業開始	4月11日
防災センター・福岡タワーツアー	4月15日
唐戸市場・小倉城ツアー	5月13日
太宰府ツアー	6月3日

*九州大学留学生センター教授 oga.chiharu.414@m.kyushu-u.ac.jp

発表会	8月3日、4日
閉講式	9月1日
②後期	
ゼロ初級者への平仮名指導（オンライン）	9月上旬に開始
第1回目オリエンテーション	9月28日
開講式	10月3日
第2回目オリエンテーション	10月3日
授業開始	10月5日
発表会（オンライン）	2月9日
閉講式（オンライン）	3月1日

3) 受講者

前期は文科省の国費外国人留学生のうち北部九州地区の大学へ配属された研究留学生および九州大学に在籍する大学院生・研究生を対象にコースを開講した。後期は国費研究留学生および本校内に所属している大学院生（学内募集生）が受講対象となった。

①前期 25名

前期はゼロ初級者が15名、既修者10名であった。既習者はJACsで総合コース、漢字コース、会話コースを受講した。

出身：イラン、インドネシア（2名）、ガーナ、ギニア、グアテマラ、シリア、スーダン、タイ、チュニジア、ドミニカ共和国、ナイジェリア、パキスタン、パプアニューギニア（2名）、パレスチナ、フィリピン、ブラジル、ブルキナファソ、ベトナム、ペルー、マレーシア、ミャンマー、メキシコ、リベリア、

進学先：九州大学23名、九州工業大学1名、福岡大学1名

②後期 7名

後期は6名がゼロ初級者、1名が既習者であった。既習者はJACsで総合コース、漢字コース、会話コースを受講した。7名中6名が国費留学生、1名が学内募集生であった。

出身：カンボジア、ザンビア、ソマリア、ソロモン、中国、ノルウェー、バヌアツ

進学先：九州大学7名

4) 時間割

以下に日本語ゼロ初級者対象の時間割を示す¹。

限	時間	月	火	水	木	金
2	10:30-12:00		I-1		I-1	文化
3	13:00-14:30	I-1	文化	I-1	文化	I-1
4	14:50-16:20	I-1	S-1	K-1	S-1	K-1

3. 授業内容

日本語研修コースではゼロ初級コースを独自開講していることから、本稿ではゼロ初級コースの内容について記載する²。

1) 授業時間数

前期・後期：各16週間

2) 使用教材

I-1	『初級日本語げんき I』 『初級日本語教材げんき ワークブック I』	坂野永理他 坂野永理他	The Japan Times The Japan Times
I-2	『初級日本語げんき I』『初級日本語げんき II』 『初級日本語教材げんき ワークブック I』 『初級日本語教材げんき ワークブック II』	坂野永理他 坂野永理他 坂野永理他	The Japan Times The Japan Times The Japan Times
K-1	『初級日本語げんき I 読み書き編』 プリント教材	坂野永理他	The Japan Times
S-1	『初級日本語げんき I』 プリント教材	坂野永理他	The Japan Times
文化	自習作成教材		

3) 授業内容

ゼロ初級レベルのクラスの授業内容は下記のとおりである。

- I-1：日本語学習経験のない学習者を対象に、基礎的な文法や語彙を勉強し、簡単な日常会話ができるようになることを目指す。教科書の第1課から第8課がI-1に該当する。
- I-2：I-1で動詞、形容詞の過去形、非過去の活用を学習した後にI-2に入る。日常会話に必要な基本的文法や語彙を学び、身近な話題で会話ができる日本語能力を養成する。教科書の第9課から第15課が学習範囲である。

1 既習者対象の時間割はJACs (Japanese Academic Courses) の年報を参照。

2 既習者の授業内容についてはJACs (Japanese Academic Courses) の年報を参照。

S-1 : I-1のクラスと連動させながら、テキストの会話部分を補足発展させ、十分に会話の練習を行う。また、日常会話に必要な基礎的な表現を学ぶ。

K-1 : ひらがな・カタカナの定着をはかった後に漢字学習を開始する。文法学習 (I-1) の進捗の後に追う形ですすめる。

文化: ①日本の大学や日本社会での生活に適應できる力をつけること、②日本文化と研修生それぞれの国の文化の違いに気づき、異なる価値観を理解すること、③アカデミックな発表の方法を学ぶこと、の3点を目標としている。このクラスでは教室活動の他にフィールドトリップなどの見学や訪問も取り入れている。当コース終了前の最終発表会の準備も含む。

4. 研修生からの評価

毎学期、コース終了前に研修生による評価をアンケート形式で実施している。結果は今後の本コース改善の資料として活用している。以下に評価の結果をまとめる。尚、アンケートでは自由記述形式で研修生にコメントを書いてもらっている項目がある。本稿では代表的なコメントおよび今後の課題として考えさせる意見を抜粋し紹介する。尚、コース評価は閉講式の際に実施している。

①前期

a. 日本語のクラスに関して (ゼロ初級者13名が回答)

*数字は人数

クラス名	大変よい	よい	どちらとも言えない	よくない	全然よくない	無回答
I-1	13	0	0	0	0	0
S-1	13	0	0	0	0	0
K-1	12	1	0	0	0	0
文化	13	0	0	0	0	0

- Pacing in I-1 is fast but teachers were patient and knowledgeable.
- In I-1, the mode of teaching is very efficient and effective.
- The S-1 class is fun because we have a lot of roleplay.
- The S-1 class with full of interesting topics. Sensei was so helpful.
- Everything was very good and well-coordinated in K-1.
- Kanji is very hard but the teacher made it easy to understand.
- Bunka class was the really amazing class. Got to learn about different cultures and especially Japanese culture which is very amazing.
- Bunka class was so interesting and helped in knowing about different countries' culture.

b. もっと勉強したいこと（ゼロ初級者13名が回答、複数回答可）

文法	会話	漢字	リスニング	発音	単語	読解	筆記	文化	スピーチ	その他
9	11	6	9	8	8	8	8	5	5	0

c. 「最終発表会」について（ゼロ初級者13名回答）

大変有意義	有意義	どちらとも言えない	それほどよくない	全然よくない	無回答
11	2	0	0	0	0

- It was meaningful because it was the accumulation of 4 months of hard work and study. It felt like the end of something but the start of something new.
- I got to learn about different cultures from different countries.

d. コースに対する満足度（ゼロ初級者13名、既習者6名回答）

90%-100%	18
80% -89%	1
70% -79%	0
50% -69%	0
49% 以下	0

e. コースへの全体の感想（ゼロ初級者、既習者）

- The teachers were all nice and made the classes fun and it helped in understanding it better.
- I think the courses are well organized and if there should be any modification,
- The course is really good. The only thing is the pace was too fast.
- The teacher's feedback is very helpful to improve and I also really liked the extra or special lessons in each class

②後期

a. 日本語のクラスに関して（ゼロ初級者6名の回答）

*数字は人数

クラス名	大変よい	よい	どちらとも言えない	よくない	全然よくない	無回答
I-1	5	1	0	0	0	0
S-1	6	0	0	0	0	0
K-1	6	0	0	0	0	0
文化	6	0	0	0	0	0

- In I-1 class, teachers are enthusiastic, professional, and responsible. If the content can increase daily conversations, it would be even better, such as making phone calls, applying for bank cards, applying

for points cards, seeking help from the police, seeking rental housing, participating in rental interviews, opening water and electricity for new houses, and so on.

- The speaking class provides a practical experience to apply what has been learnt in the grammar classes and helps reinforce that as well as assists in learning the nuances of the language in day to day speech.
- K-1 is very good and the pacing is just right to balance out the other classes.
- Bunka class is very educational with regards to Japanese culture.

b. もっと勉強したいこと（未ゼロ初級者4名の回答）

文法	会話	漢字	リスニング	発音	単語	読解	筆記	文化	スピーチ	その他
4	6	3	2	4	1	2	2	5	3	0

c. 「最終発表会」について（ゼロ初級者4名回答）

大変有意義	有意義	どちらとも言えない	それほどよくない	全然よくない	無回答
5	1	0	0	0	0

- First time I speak Japanese in front of all Japanese teachers. I felt so nervous but so excited as well
- It gives me a great opportunity to share my country's culture in Japanese language.

d. コースに対する満足度（ゼロ初級者4名、既習者1名回答）

90%-100%	6
80% -89%	1
70% -79%	0
50% -69%	0
49% 以下	0

e. コース全体の感想（全員回答）

- I think course was good in every aspects and it was comprehensive course, we learned the Japanese
- I think the course was delivered excellently. Continue to use a lot of dialogue exercises or allocate sufficient time to it, as it helps build confidence and open up the mind to speak fast.

5. 令和5年度（2023年度）のまとめ

令和5年度は、特別な配慮を必要とする学生がおり、各方面との連携が必要とされた。当該学生は通常のカリキュラム及び学習進度で日本語を学習していくことが困難であったため、留学生センターのセンター長、当該学生の受け入れ研究室の指導教員、学内カウンセラーと話し合い、留学生セン

ターで開講されている、学習進度の緩やかな別の日本語コースの授業を受講することになった。また、JTAS コーディネーターが漢字と会話の個人授業を行った。当該学生の生活面における事務スタッフのサポートも行われた。今後も様々な学生が本コースを履修する可能性があることから、サポート体制の構築が必要であろう。

筑紫・大橋地区日本語コース

— 2024年度 —

Japanese Language Courses at *Chikushi/Ohashi* campus (2024)

小 山 悟*

概要

2024年度前期は4月15日（月）～7月1日（月）までの10週間、後期も同じく10月15日（火）～12月23日（月）までの10週間開講した。

〈筑紫地区〉

筑紫地区では2021年度前期に1クラス増設されて以降、表1のような編成でコースを運営している。このうち、初級1と初級2は週2回の「総合コース」として教科書準拠で授業を行い、初中級¹、中級、上級の3クラスは週1回の「技能別コース」として曜日によって授業内容を変え、成績も別々に出している²。

2024年度の時間割は表2・3に示したとおりである。なお、木曜日5時間目の「大学院」とは、総合理工学府が独自に開講している日本語正規科目（週1回×15週）のことである。例年前期に修士対象の「Communication Skills in Japanese (CSJ)」を、後期に博士対象の「Fundamentals of Japanese Communication (FJC)」を開講しており、授業は筆者が担当している³。2024年度は前期の受講者がゼロだったため、後期のみ開講した。

表1 筑紫地区のコース編成

コース名	クラス数
初級1	1（週2回）
初級2	1（週2回）
初中級	2（週1回）
中級	2（週1回）
上級	2（週1回）

*九州大学留学生センター准教授

1 初中級クラスは2023年度までは初級1・2と同様に週2回の総合クラスとして運営していたが、週に1度しか受講できない学生がいたため、2024年度からは週1回の「技能別コース」に変更した。また、後期からは学生のニーズに合わせて各曜日の授業内容を正式に「会話1」「会話2」とした。

2 よって、どちらか一方のクラスだけを受講することも「可」としている。

3 予算の出処は異なるが、筑紫地区における日本語学習のニーズを示すデータとして、毎年、留学生センター主催の授業と合わせて報告している。

表2 筑紫地区（前期）の時間割

	月	火	水	木	金
1時間目					
2時間目					
3時間目					
4時間目		初級1 中級【会話】			
5時間目	初級2 初中級		初級1 上級【会話】	初級2 中級【文法】	初中級 上級【読解】

表3 筑紫地区（後期）の時間割

	月	火	水	木	金
1時間目					
2時間目					
3時間目					
4時間目		初中級【会話1】 中級【会話】	上級【会話】		
5時間目	初級2		初級1 初級2	初中級【会話2】 中級【文法】 大学院	初級1 上級【読解】

〈大橋地区〉

大橋地区では現在、筑紫地区より1つ少ない4レベル編成でコースを運営している（表4）。2024年度からは初級1と初級2を筑紫地区と同じく週2回の「総合コース」として開講し⁴、中級と上級はこれまでどおり週1回の「技能別コース」として開講することにした。2024年度の時間割は表5・6に示したとおりである。

表4 大橋地区のコース編成

コース名	クラス数
初級1	1（週2回）
初級2	1（週2回）
初中級	
中級	2（週1回）
上級	2（週1回）

4 ただし、受講者の多くが短期留学生で、他の授業との関係で週1日しか受講できない学生が毎学期1～2名いるため、どちらか一方のクラスだけを受講することも「可」としている（その場合の出席率は最大で50%）。

表5 大橋地区（前期）の時間割

	月	火	水	木	金
1時間目					
2時間目					
3時間目					
4時間目		初級2 中級 【作文・文法】	初級2	上級【会話】	
5時間目	上級【作文】	初級1	初級1 中級【会話】		

表6 大橋地区（後期）の時間割

	月	火	水	木	金
1時間目					
2時間目					
3時間目					
4時間目		初級2 中級 【作文・文法】	初級2		
5時間目	上級【会話】	初級1	初級1 上級【作文】	中級【会話】	

受講者数など

プレースメントテストの申込者数は、前期は99名で、内訳は筑紫地区が51名、大橋地区が48名であった。2023年度前期（78名：筑紫32名、大橋46名）に比べると、21名増（筑紫19名増、大橋2名増）であった。また、後期は105名で、内訳は筑紫が48名、大橋57名であった。2023年度後期（95名：筑紫41名、大橋54名）との比較では、10名増（筑紫7名増、大橋3名増）であった。

その後、辞退する学生や遅れて申し込みをする学生がいたため、最終的な登録者は前期93名（筑紫38名、大橋55名）、後期117名（筑紫53名、大橋64名）となった。なお、2023年度受講者はそ前期75名（筑紫31名、大橋44名）、後期90名（筑紫42名、大橋48名）であった。ただし、筑紫地区後期の初級1にはCSJ/FJCの受講者14名が含まれている（表8、図2）⁵。

5 理由は注3で述べたとおりである。

表7 筑紫・大橋地区の日本語クラス受講者数の推移（前期）

年度	13前	14前	15前	16前	17前	18前	19前	20前	21前	22前	23前	24前
地区	合同	筑 大	筑 大	筑 大	筑 大	筑 大	筑 大	筑 大	筑 大	筑 大	筑 大	筑 大
初級1		12 8	25 5	19 7	26 14	26 13	23 12	5	17 3	21 7	12 12	19 14
初級2		6	11 8	14 12	25 8	16 7	11 7	8 3	13 6	11 6	5 10	8 6
初中級								12	10	10	6	2
中級		14	10	11 21	14 22	17 6	10 9	13 6	6 9	3 19	5 13	3 19
上級			8	12 19	15 16	18 19	10 14	14 7	8 6	11 12	3 9	6 16
合計		32 8	54 13	56 59	80 60	77 45	54 42	52 16	54 24	56 44	31 44	38 55

注. 筑紫地区の太字（初級1の受講者）は大学院クラスの受講者数も含む（2023年度前期はゼロ）

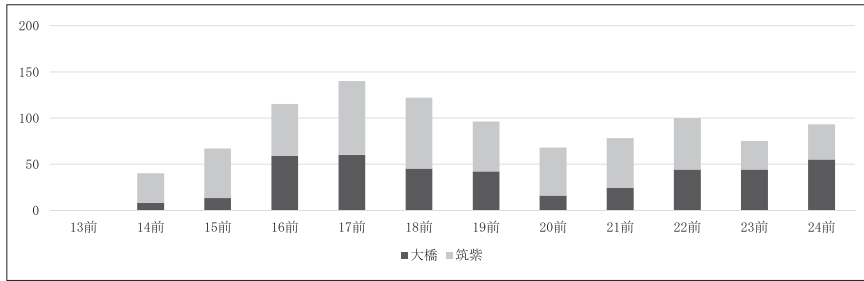


図1 筑紫・大橋地区の日本語クラス受講者数の推移（前期）

表8 筑紫・大橋地区の日本語クラス受講者数の推移（後期）

年度	13後	14後	15後	16後	17後	18後	19後	20後	21後	22後	23後	24後
地区	合同	筑 大	筑 大	筑 大	筑 大	筑 大	筑 大	筑 大	筑 大	筑 大	筑 大	筑 大
初級1	10	22 15	28 8	50 14	27 14	34 15	30 12	53 8	21 8	41 10	24 13	29 18
初級2	7	10	6 6	12 5	21 11	22 10	15 4	20 7	9 16	5 16	3 13	5 12
初中級									8	6	5	8
中級	2	14	5 14	12 25	14 29	24 22	18 25	16 14	12 8	4 15	5 13	3 17
上級			8 20	5 19	8 21	19 39	18 22	11 14	17 12	12 19	5 9	8 17
合計	19	46 15	47 48	79 63	70 75	99 86	81 63	100 43	67 44	68 60	42 48	53 64

注. 筑紫地区の太字（初級1の受講者）は大学院クラスの受講者数も含む（2024年度後期は14名）

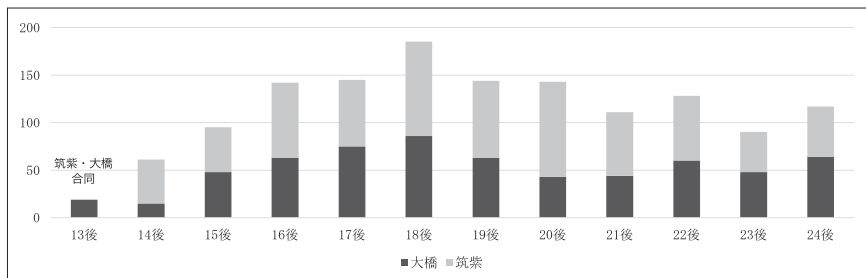


図2 筑紫・大橋地区の日本語クラス受講者数の推移（後期）

Japanese Academic Courses (JACs) / 言語文化基礎科目・日本語

Japanese Academic Courses (JACs) / Fundamental Subjects for Language and Culture, Japanese

楠 木 理 香*

脇 坂 真彩子*

1. はじめに

「Japanese Academic Courses / 言語文化基礎科目・日本語 (以下、JACs)」は九州大学伊都キャンパスで開講される単位取得を目指す学部留学生向けの日本語コースである。総合 (I コース)、漢字 (K コース)、会話 (S コース)、作文 (W コース) の4つのコースから構成され、入門から上級まで8段階の幅広いレベルのクラスが展開されている。現在、九州大学の学部正規留学生 (共創学部および農学部・工学部学士課程国際コース: IUPE に所属する学生を含む)、留学生センターが提供するプログラム (Japan in Today's World Program: JTW、日本語・日本文化研修コース: JLCC、日本語研修コース: JTAS) の参加学生、大学間・部局間交流協定に基づく交換留学制度を通じて留学し各学部に所属する交換留学生在が、本コースを受講している。以下に、2024年度 (令和6年度) の実施状況を報告する。

2. JACs の概要

2. 1. コースの編成

本コースは総合 (I コース)、漢字 (K コース)、会話 (S コース)、作文 (W コース) の4つのコースから成る。表1は2024年度春学期 (Quarter 1)・夏学期 (Quarter 2)、表2は秋学期 (Quarter 3)・冬学期 (Quarter 4) のコース編成を示している。1コマ90分の構成であり、クォーター制に基づき、各クォーターで週に2回を7.5週、計15回授業が行われる。括弧内の数字はクラス数を示している。なお、各クラスの科目名は留学生センターと基幹教育で異なっているが、本稿では留学生センターでの科目名を使用する。科目名の一覧は本稿稿末を参照されたい。

* 九州大学留学生センター准教授

表1 コース編成 (2024年度春夏学期)

レベル	総合 (I コース)	漢字 (K コース)	会話 (S コース)	作文 (W コース)
上 級	JI-8 (1)	JK-8 (1)	JS-8 (不開講)	JW-8 (1)
上 級 入 門	JI-7 (1)	JK-7 (1)	JS-7 (1)	JW-7 (1)
中 級 2	JI-6 (3)	JK-6 (1)	JS-6 (1)	JW-6 (1)
中 級 1	JI-5 (2)	JK-5 (1)	JS-5 (1)	JW-5 (1)
中 級 入 門	JI-4 (2)	JK-4 (1)	JS-4 (1)	
初 級 2	JI-3 (2)	JK-3 (2)	JS-3 (1)	
初 級 1	JI-2 (2)	JK-1+2 (1)	JS-2 (1)	
入 門	JI-1 (1)			

表2 コース編成 (2024年度秋冬学期)

レベル	総合 (I コース)	漢字 (K コース)	会話 (S コース)	作文 (W コース)
上 級	JI-8 (1)	JK-8 (1)	JS-8 (1)	JW-8 (不開講)
上 級 入 門	JI-7 (3)	JK-7 (1)	JS-7 (1)	JW-7 (1)
中 級 2	JI-6 (1)	JK-6 (1)	JS-6 (1)	JW-6 (1)
中 級 1	JI-5 (2)	JK-5 (1)	JS-5 (1)	JW-5 (1)
中 級 入 門	JI-4 (2)	JK-4 (1)	JS-4 (1)	
初 級 2	JI-3 (2)	JK-3 (2)	JS-3 (1)	
初 級 1	JI-2 (2)	JK-1+2 (2)	JS-2 (1)	
入 門	JI-1 (2)			

2. 2. 使用教材

各クラスでの使用教材は表3の通りである。

表3 各クラスでの使用教材

総合	使用教材	漢字	使用教材
JI-1	『初級日本語げんき I (第3版)』	JK-1+2	『初級日本語げんき I (第3版)』
JI-2	『初級日本語げんき I, II (第3版)』		『Essential Japanese Kanji vol.1』
JI-3	『初級日本語げんき II (第3版)』	JK-3	『Basic Kanji Book vol.1』
JI-4	『中級へ行こう (第2版)』	JK-4	『Basic Kanji Book vol.1, vol. 2』
JI-5	『中級を学ぼう (中級前期)』	JK-5	『Basic Kanji Book vol. 2』
JI-6	『中級を学ぼう (中級中期)』	JK-6	『上級へのとびら きたえよう漢字力』
JI-7	『日本語5つのとびら TOBIRA 中上級編』	JK-7	『Intermediate Kanji Book vol.1』
JI-8	『留学生のための 時代を読み解く上級日本語 (第3版)』 (Q1&2) 『日本語で考えたい科学の問い (上) 文化と社会篇』 (Q3&4)	JK-8	『Intermediate Kanji Book vol.2』

会話	使用教材	作文	使用教材
JS-2	『聞く・考える・話す 留学生のための初級日本語会話』	JW-5	『おしゃべりしながら書くことを楽しむ中級作文』
JS-3	『聞く・考える・話す 留学生のための初級日本語会話』	JW-6	『小論文の12のステップ』
JS-4	『会話に挑戦！中級前期からの日本語ロールプレイ』	JW-7	『改訂版 大学・大学院留学生の日本語④ 論文作成編』
JS-5	自主作成教材を使用	JW-8	自主作成教材を使用
JS-6	『日本語上級話者への道』		
JS-7	自主作成教材を使用		
JS-8	自主作成教材を使用		

2. 3. 学生区分／所属別の受講可能コース

JACsでは学生区分と所属によって受講できるコースやレベルに制限がある。表4に学生区分／所属別の受講可能コースを示す。表内の「○」はプレースメントテストを受験した上で、そのコースを受講できることを示し、「×」はそのコースが受講できないことを示している。学部にも所属する正規留学生は特定のクラスを受講することになっているため、表内にそのクラスを記している。

表4 受講可能コース一覧

学生区分／所属	総合コース	漢字コース	会話コース	作文コース
留学生センター生 (JTW、JLCC、研修)	○	○	○	○
学部所属交換留学生	○	○	○	○
農学部・工学部国際コース (IUPE) 1年生	○	○	×	×
農学部・工学部国際コース (IUPE) 2年生	○	×	×	×
共創学部 (秋入学)	○	○	○	○
学部正規留学生 (共創学部秋入学・IUPE以外の学部生)	JI-6 (Q1&2) JI-7 (Q3&4) JI-8 (Q1&2) JW-8 (Q1&2)	×	×	×

2. 4. 開講日程とプレースメントテスト

2024年度の各クォーターの開講日程は表5の通りである。

表5 授業の開講スケジュール

クォーター	開講期間
春学期 (Quarter 1)	2024年4月9日 ~ 2024年6月7日
夏学期 (Quarter 2)	2024年6月11日 ~ 2024年7月31日
秋学期 (Quarter 3)	2024年9月4日 ~ 2024年11月29日
冬学期 (Quarter 4)	2024年12月4日 ~ 2025年2月7日

JACsの受講には受講希望者本人が春学期(Q1)と秋学期(Q3)の開始前に、オンラインで受講申し込みとプレースメントテストの受験を完了する必要がある。加えて、漢字コースの受講希望者には筆記による漢字テスト(60分)、会話コースの受講希望者には担当教員との一対一のインタビューテスト(約10分)、作文コースの受講希望者には作文テスト(約40分)を初回授業で実施し、これらの結果から、総合的に最終的なクラスを決定する。表6に2024年度の受講登録とプレースメントテストの日程を示す。

表6 2024年度の受講登録・プレースメントテストの日程

クォーター	オンラインシステムによる受講登録・プレースメントテスト	漢字テスト(60分)	インタビューテスト(約10分/人)	作文テスト(約40分)
春学期(Q1)	2024年3月22日~4月4日	4月10日	4月9日	4月10日
秋学期(Q3)	2024年9月19日~9月30日	10月4日	10月8日	10月4日

3. 履修者

2024年度春学期(Q1)の最終履修者数は158名(延べ291名)、秋学期(Q3)の最終履修者数は、191名(延べ356名)であった。昨年度と比べると、春学期は2名(延べ33名)減少し、秋学期は21名(延べ27名)増加した。以下3. 1. にクラス別履修者数、3. 2. に出身地域別の履修者数、3. 3. に身分別の履修者数の内訳を示す。

3. 1. 履修者の内訳（クラス別）

春学期（Q1）と秋学期（Q3）のクラス別履修者数を表7と表8に示す。括弧内の数字はクラス数を示している。

表7 2024年度春学期（Q1）クラス別履修者数（延べ履修者数）

レベル	総合コース		漢字コース		会話コース		作文コース	
入門	J1-1 (1)	12	JK-1+2 (1)	9				
初級 1	J1-2 (2)	29			JS-2 (1)	8		
初級 2	J1-3 (2)	11	JK-3 (2)	29	JS-3 (1)	8		
中級入門	J1-4 (2)	22	JK-4 (1)	13	JS-4 (1)	9		
中級 1	J1-5 (2)	16	JK-5 (1)	10	JS-5 (1)	14	JW-5 (1)	6
中級 2	J1-6 (3)	30	JK-6 (1)	10	JS-6 (1)	8	JW-6 (1)	8
上級入門	J1-7 (1)	5	JK-7 (1)	4	JS-7 (1)	4	JW-7 (1)	4
上級	J1-8 (1)	19	JK-8 (1)	2	JS-8 (不開講)		JW-8 (1)	1
総計 291名								

表8 2024年度秋学期（Q3）クラス別履修者数（延べ履修者数）

レベル	総合コース		漢字コース		会話コース		作文コース	
入門	J2-1 (2)	37	JK-1+2 (2)	38				
初級 1	J2-2 (2)	16			JS-2 (1)	11		
初級 2	J2-3 (2)	25	JK-3 (2)	19	JS-3 (1)	13		
中級入門	J2-4 (2)	22	JK-4 (1)	15	JS-4 (1)	10		
中級 1	J2-5 (1)	20	JK-5 (1)	8	JS-5 (1)	10	JW-5 (1)	6
中級 2	J2-6 (1)	11	JK-6 (1)	7	JS-6 (1)	9	JW-6 (1)	7
上級入門	J2-7 (3)	36	JK-7 (1)	4	JS-7 (1)	8	JW-7 (1)	6
上級	J2-8 (1)	5	JK-8 (1)	7	JS-8 (1)	6	JW-8 (不開講)	
総計 356名								

3. 2. 履修者の内訳（出身地域別）

表9は春学期（Q1）と秋学期（Q3）の履修者を出身地域・国籍別にまとめたものである。

表9 出身地域別の履修者数

アジア	春学期	秋学期	欧州	春学期	秋学期
大韓民国	32	33	ドイツ連邦共和国	11	5
中華人民共和国	30	32	英国	6	7
インドネシア共和国	11	14	フランス共和国	6	8
台湾	10	9	スウェーデン王国	4	4
シンガポール共和国	4	4	オランダ王国	2	2
タイ王国	4	7	アルバニア共和国	1	-
香港	4	2	イタリア共和国	1	-
インド共和国	3	8	ウズベキスタン共和国	1	1
フィリピン共和国	3	3	ロシア連邦	1	2
日本国	2	8	オーストリア共和国	-	2
カンボジア王国	1	-	ウクライナ	-	1
スリランカ民主社会主義共和国	1	1	スイス連邦	-	1
マレーシア	1	-	小計	33名	33名
ミャンマー連邦共和国	1	2			
モンゴル国	1	1	北米	春学期	秋学期
ベトナム社会主義共和国	-	10	アメリカ合衆国	4	10
バングラデシュ人民共和国	-	2	カナダ	2	2
小計	108名	136名	小計	6名	12名
中東	春学期	秋学期	中南米	春学期	秋学期
イスラエル国	1	3	ブラジル連邦共和国	3	1
オマーン国	1	-	チリ共和国	1	-
トルコ共和国	1	2	ベネズエラ・ボリバル共和国	1	-
小計	3名	5名	ペルー共和国	-	1
			メキシコ合衆国	-	1
オセアニア	春学期	秋学期	小計	5名	3名
オーストラリア連邦	1	-	計	158名	191名
小計	1名	0名			
アフリカ	春学期	秋学期			
エジプト・アラブ共和国	2	1			
ナイジェリア連邦共和国	-	1			
小計	2名	2名			

3. 3. 履修者の内訳（身分別）

表10は、春学期（Q1）と秋学期（Q3）の身分別の履修者数を学期ごとにまとめたものである。

表10 身分別の履修者数

留学生センター生	春学期	秋学期
Japan in Today's World (JTW)	44	47
日本語・日本文化研修コース (JLCC)	13	20
日本語研修コース (JTAS)	13	1
小計	70名	68名
学部正規留学生	春学期	秋学期
工学部国際コース (IUPE)	16	33
農学部国際コース (IUPE)	10	25
共創学部 秋入学	6	13
共創学部 春入学	3	2
その他の学部正規留学生	23	17
小計	58名	77名
学部所属交換留学生	春学期	秋学期
文学部	9	11
工学部	7	6
経済学部	5	1
農学部	4	7
共創学部	3	7
法学部	2	-
教育学部	-	1
小計	30名	33名
総計	158名	191名

4. 2024年度に行った改善

4. 1. JACs 受講規定の改訂

近年の留学生の学習スタイルや日本語の学習ニーズの多様化、および基幹教育における授業の出席に対する評価への扱いの変更を背景に、JACsの受講規定において、以下のように改訂を行なった。具体的には以下に示すように、1項目を改訂、1項目を新たに追加、さらに1項目については削除した。

- (旧) 1クォーターで4回以上（4回目を含む）欠席した場合、成績評価は一律に「F（不合格）」となる。
- (新) 1クォーターで80%以上のクラスへの出席率（1クォーターにつき12回以上の出席）を、期末試験（に該当するもの）の受験資格とする。

(旧) 項目なし

- (新) 各クラスの半分以上の時間（90分授業の場合45分以上）を遅刻及び早退により参加できない場合、欠席扱いとする。
- (旧) 1クォーターで欠席が6回に達した時点で、それ以後のクラスへの出席ができなくなる。
- (新) 項目ごと削除

4. 2. 学部所属交換留学生の JACs 履修

JACs 受講者が定員をオーバーする可能性が高まったことにより、2023年度秋学期より学部所属交換留学生には、九州大学で日本語科目の単位取得が必要な者のみに JACs 受講を認めることとした。この方針決定に伴い、学期開始前の学生への通知は日本語課外補講コース Japanese Training Courses (JTCs) を中心とした内容にし、日本語の単位取得が必要だと国際部留学課で確認が取れた学生にのみ、JACs の受講を案内するという手順を取った。しかしながら、日本語科目の単位取得が必要かどうかの確認は、留学課においても学生からの自己申告でしか判断できないという点や、たとえ日本語科目の単位が必要なわけではなくても、学生本人の専門分野や日本語力により、日本語科目以外に履修できる科目がない学生の存在などが明らかになり、前述した方法でも JACs 履修希望者を公平に判断して受け入れることは難しいという結論に至った。

そこで、日本語科目の単位の必要性及び JACs 履修条件を満たしているかを学生からの自己申告により判断するしかないのであれば、できるだけ正確にそれらを把握して適切な日本語コースに案内できるように、2024年度は学期開始前の学生への通知に JACs と JTCs のコースの違いを説明したフローチャートを添付することにした。同時に、同じ内容を Yes-No 方式のアンケートで学生に回答してもらい、最後まで答えると JACs か JTCs かのコース案内に導かれる、という方法を取った。

4. 3. 共創学部正規留学生の日本語科目履修免除

通常、10月入学の共創学部正規留学生については、JACs の 4 コースの中からプレースメントテストを受けた上でレベルに応じた日本語科目を履修し、卒業までに12単位以上修得することが必須である。しかし、学生の中には日本語レベルが非常に高い学生がいる可能性があることから、2023年度10月以降に入学した学生については、プレースメントテストの結果に基づき、JACs 科目の受講が必要ないと判断された場合には、すべての日本語科目に関して履修を免除することとなった。2024年10月入学生の中で1名の学生がこれに該当し、日本語科目6科目（全12単位分）が免除となった。このケースを踏まえた上で再度関係者で話し合い、来年度以降の JACs プレースメントテストから免除までの手続きについて、以下のように確認した。

まず、10月入学の共創学部正規留学生は、全員 JACs 受講のためのオンラインプレースメントを受験する。通常、その後の対面プレースメントテストは、その学期に履修を希望するコースのもののみ受験すれば良いことになっているが、日本語能力が高いと予測される、あるいは自己申告する学生については、免除される単位数が出るかどうかを判断するため、JACs の対面によるプレースメントテストも全て受験し、レベル判定を受ける。その結果、4コースの中で一つでも最上位レベルまたは免除

と判定された学生については、その時点で日本語履修可能科目報告書を基幹教育及び共創学部教務係に提出する。当該学生は、その報告書にある科目を4年間で履修し、それが全部で12単位に満たない場合は、残りの単位数は免除となる。なお、入学時に判定された日本語コースのレベルは、実際に授業を受講する学期前に再度プレースメントテストを受けた結果変わっている可能性があるため、それにより卒業までに12単位が揃うかどうかは各年度での微調整が必要となる。これに伴う単位数の確認や学生への履修指導は、必要に応じて共創学部教務係が行うこととなった。

5. これまでの課題への対応、結果と今後の課題

5. 1. 学部正規留学生の受講方法の見直し

現在 JACs では、学部正規留学生（工学部・農学部学士課程国際コース生と共創学部10月入学を除く）はプレースメントテストを受験することなく、特定のクラスを受講することになっている。これは学部に入学者の日本語レベルが均一であると想定されてのことであるが、実際にはレベルのばらつきが大きく、受講するクラスのレベルが学生のレベルに合っていないケースがある。そのような場合には、個別にプレースメントテストを実施して、指定以外のクラスを受講させたり、担当教員が彼らのレベルやニーズにあった日本語教育を提供できるよう授業内容を調整しながら授業を行っている。これらの対応により状況は改善され、大きな運営上の問題は出ていないものの、根本的な解決には至っていない。本来であれば、学生が自分の日本語レベルにあったクラスを受講するのが望ましく、他の身分／所属の学生と同様に、学部正規留学生も学期開始前に JACs のプレースメントテストを受験し、各学生のレベルにあったコースを受講してもらえよう、今後も働きかけていきたい。

5. 2. 問い合わせ対応の効率化

オンラインシステムによる受講登録開始期間後から授業開始後約2週間は、留学生からの問い合わせや、基幹教育担当者、JACs 授業担当教員からの依頼が集中する傾向にある。今年度は、記録を残した分を見ると、Q1（春学期）は受講登録期間終了までに23件、クラス分け後約2週間に46件、Q3（秋学期）は受講登録開始前後に19件、クラス分け後約2週間に47件の問い合わせがあった。問い合わせの内訳は、受講登録期間中は JACs システムの操作に関することや、履修単位に関する質問などが多数を占める。また、クラス分け後の問い合わせは、締切後の受講登録の可否や、クラス移動（上／下のクラス、別の曜日の同じレベルのクラスへの移動）、履修中止などに関するものが大半である。

このような問い合わせ内容の傾向はこれまでとあまり変わらなかったが、問い合わせ数全体で見ると、Q1（春学期）のクラス分け後の問い合わせ以外は、前年度（2023年度）に比べて半減した。これまで、受講登録期間、クラス分け後の数週間の問い合わせへの対応については、運営側の負担が大きく、その効率化が課題であったが、今年度に関してはこれらの効率化が進んだと言える。課題への対策として挙げていた FAQ の学生への事前周知や、問い合わせ内容への対応マニュアルの作成などが功を奏していると考えられ、引き続き JACs 運営側の負担軽減につながるよう、問い合わせ傾向の推

移を見守りながら、更なる効率化をはかっていきたい。

5. 3. 合理的配慮が必要な学生への対応

ここ数年、JACs 科目の履修にあたり、合理的配慮を求める学生が増加している旨は、昨年度も報告した通りである。その際以下の3点を、主な問題点として挙げた。

1. 学生の申請から担当教員に正式な配慮要請が届くまでに長い時間を要し、学期の終盤になってようやく配慮要請が届くなど、適切なタイミングで配慮が実施されているとは言い難い。また、このような場合、期末試験直前になって担当教員が配慮を迫られるケースも発生している。
2. 学生が事前に想定できなかった内容について、追加の要望を非公式に担当教員に要望するケースが多数見られ、担当教員にとって大きな負担となっている。また、留学生にとっては、本学での合理的配慮のプロセスが母校における扱いと大きく異なることによりフラストレーションが起こる場合もある。
3. 合理的配慮の申請は学期開始後に行われるため、学期開始前に行われるJACsのオンラインプレースメントテストには配慮が間に合わない。

まず、上記1と3の配慮申請のタイミングについては、インクルージョンオフィスとの話し合いにより、学期開始前のJACs プレースメントテストは煩雑な手続きや面接を経ずとも申請が可能となったため、秋学期に配慮申請があった学生は、オンラインではなく対面でプレースメントテストを実施することが可能となった。また、その際申請書に記された配慮内容について、JACsでの受講クラス決定後、学生の了解を得た上で、担当教員とは内容が口頭で共有できることになったため、正式な申請書類がクラス担当者に届くまでの間にも、クラス内での配慮については、担当教員もある程度の対応が可能となった。

しかし、このプロセスにおいては新たな問題も生まれた。いったんプレースメントテスト用に合理的配慮の申請をした学生は、学期開始後に改めて授業における配慮申請をせずとも良いとの勘違いが生まれ、プレースメントテスト時の配慮内容を一部口頭で共有されただけで、授業用に配慮申請がされるのを待っている状態の担当教員との間に、認識のずれが生まれることになった。当然ながら、テスト時に行われる配慮と、通常の授業中の活動や課題における配慮内容とは異なる面もあることから、手間はかかるが、プレースメントテストと授業における配慮申請は、それぞれ行われる必要があることをJACs 運営側でも確認した。

上記2については、引き続きの課題として挙げられる。追加の要望や、合理的配慮の申請プロセスそのものが学生に与えるストレスから、学生が正式な申請を取りやめることで、担当教員が各クラスにおいて教育的配慮を求められるケースが散見される。合理的配慮及び教育的配慮の実施に関する担当教員のストレスや負担の軽減は、20名を超える担当教員を抱えるJACs 全体の喫緊の課題であると言える。

5. 4. 日本にルーツを持つ学習者への対応

ここ数年の、日本にルーツを持つ学生の履修の増加傾向は、今年度も顕著であった。これらの学生

は、インターナショナルスクールや日本人学校、日本語ができる周囲の人々との関わり、インターネットやアニメ・漫画などから日本語を学んできている。彼らの日本語能力は4技能にバラつきがあることが多く、口頭コミュニケーション能力に比べ、読み書き能力が低い場合が多い。時には、会話能力は極めて高い一方で、読み書きの能力が著しく低い学生もいる。このような状況を踏まえ、今年度のクラス分けにおいても、例年のように通常のJACsのクラス分け方針のみに拠ることなく、各学生の能力に合わせたクラス分けができるよう、柔軟に対応した。

4. 3. でも述べたように、学部正規留学生（工学部・農学部学士課程国際コース生と共創学部10月入学生）については、各学部において通常必修となっている日本語科目の単位が、学生のJACsプレースメントの結果次第では、履修免除となる制度が徐々に整ってきている。日本にルーツを持つ学習者が入学し、日本語力が高い（場合によってはネイティブレベル）であるとわかっているにもかかわらず、必修単位数を満たすために、日本語科目を履修しなければならないケースがあった数年前と比較すると、大学や学部のシステムも学習者の多様化に追いつきつつあると言えるだろう。

今後も、日本にルーツを持つ学習者のみならず、多様な背景を持つ学習者がさらに増えることは想像に難くない。JACsがどのような学生を対象に日本語教育を行い、どこまでサポートするべきなのかを引き続きしっかりと議論していく必要がある。

6. おわりに

2024年度のJACs全体の履修者数は、コロナ禍前の水準に回復した昨年2023年度を、さらに大きく上回った。日本にルーツを持つ学生のような学生の背景のみならず、コロナ禍においてさまざまなスタイルや方法で日本語を学習してきた多様性のある学生たちを、多く迎えることになった今年度であった。

延べ履修者数が300人を超え、学生の所属プログラムも多岐に渡るJACsは、30を超えるクラスを20名余の講師陣で担当する大所帯である。学生への公平性とプログラムとしての対応の一貫性を常に探求しながら、学生自身や日本語学習ニーズの多様化にどのように対応していくべきか、議論は尽きない。コロナ禍に培ったオンライン授業やハイブリット授業でのスキルや経験も、主流に戻った対面授業に融合しつつ、このような教育環境の変化にプログラム側も講師側もより柔軟に対応し、質の高い教育を提供できるよう努力を続けていきたい。

参考文献

- 脇坂真彩子 (2018) 「九州大学留学生のための日本語コース (JACs)」『九州大学留学生センター紀要』26, 83-88.
脇坂真彩子 (2019) 「Japanese Academic Courses (JACs) / 言語文化基礎科目・日本語」『九州大学留学生センター紀要』27, 79-90.
脇坂真彩子 (2020) 「Japanese Academic Courses (JACs) / 言語文化基礎科目・日本語」『九州大学留学生センター紀要』28, 83-94.
脇坂真彩子 (2021) 「Japanese Academic Courses (JACs) / 言語文化基礎科目・日本語」『九州大学留学生センター紀要』29, 39-51.
脇坂真彩子 (2022) 「Japanese Academic Courses (JACs) / 言語文化基礎科目・日本語」『九州大学留学生センター紀要』30, 17-30.

- 脇坂真彩子・柴田あづさ (2023) 「Japanese Academic Courses (JACs) / 言語文化基礎科目・日本語」『九州大学留学生センター紀要』 31, 79-93.
- 脇坂真彩子・楠木理香 (2024) 「Japanese Academic Courses (JACs) / 言語文化基礎科目・日本語」『九州大学留学生センター紀要』 32, 61-74.

付録「Japanese Academic Courses (JACs) / 言語文化基礎科目・日本語」科目名一覧

留学生センター生	共創学部秋入学生・IUPE生・学部所属交換留学生		学部正規留学生	
科目名	シラバス上の科目名		シラバス上の科目名	
JI-1	Japanese: Integrated 1 A	JI-1A		
	Japanese: Integrated 1 B	JI-1B		
JI-2	Japanese: Integrated 2 A	JI-2A		
	Japanese: Integrated 2 B	JI-2B		
JI-3	Japanese: Integrated 3 A	JI-3A		
	Japanese: Integrated 3 B	JI-3B		
JI-4	Japanese: Integrated 4 A	JI-4A		
	Japanese: Integrated 4 B	JI-4B		
JI-5	Japanese: Integrated 5 A	JI-5A		
	Japanese: Integrated 5 B	JI-5B		
JI-6	Japanese: Integrated 6 A	JI-6A		日本語Ⅰ (Q1)
	Japanese: Integrated 6 B	JI-6B		日本語Ⅱ (Q2)
JI-7	Japanese: Integrated 7 A	JI-7A		日本語Ⅲ (Q3)
	Japanese: Integrated 7 B	JI-7B		日本語Ⅳ (Q4)
JI-8	Japanese: Integrated 8 A	JI-8A		日本語Ⅴ (Q1)
	Japanese: Integrated 8 B	JI-8B	日本語Ⅵ (Q2)	
JK-1+2	Japanese: Kanji 1+2 A	JK-1+2A		
	Japanese: Kanji 1+2 B	JK-1+2B		
JK-3	Japanese: Kanji 3 A	JK-3A		
	Japanese: Kanji 3 B	JK-3B		
JK-4	Japanese: Kanji 4 A	JK-4A		
	Japanese: Kanji 4 B	JK-4B		
JK-5	Japanese: Kanji 5 A	JK-5A		
	Japanese: Kanji 5 B	JK-5B		
JK-6	Japanese: Kanji 6 A	JK-6A		
	Japanese: Kanji 6 B	JK-6B		
JK-7	Japanese: Kanji 7 A	JK-7A		
	Japanese: Kanji 7 B	JK-7B		
JK-8	Japanese: Kanji 8 A	JK-8A		
	Japanese: Kanji 8 B	JK-8B		
JS-2	Japanese: Speaking 2 A	JS-2A		
	Japanese: Speaking 2 B	JS-2B		
JS-3	Japanese: Speaking 3 A	JS-3A		
	Japanese: Speaking 3 B	JS-3B		
JS-4	Japanese: Speaking 4 A	JS-4A		
	Japanese: Speaking 4 B	JS-4B		
JS-5	Japanese: Speaking 5 A	JS-5A		
	Japanese: Speaking 5 B	JS-5B		
JS-6	Japanese: Speaking 6 A	JS-6A		
	Japanese: Speaking 6 B	JS-6B		
JS-7	Japanese: Speaking 7 A	JS-7A		
	Japanese: Speaking 7 B	JS-7B		
JS-8	Japanese: Speaking 8 A	JS-8A		
	Japanese: Speaking 8 B	JS-8B		
JW-5	Japanese: Writing 5 A	JW-5A		
	Japanese: Writing 5 B	JW-5B		
JW-6	Japanese: Writing 6 A	JW-6A		
	Japanese: Writing 6 B	JW-6B		
JW-7	Japanese: Writing 7 A	JW-7A		
	Japanese: Writing 7 B	JW-7B		
JW-8	Japanese: Writing 8 A	JW-8A	日本語Ⅶ (Q1)	
	Japanese: Writing 8 B	JW-8B		

2024年度 伊都キャンパス・病院（馬出）キャンパス 日本語補講コース

Japanese Training Courses (JTCs)

柴田 あづさ*

1. はじめに

JTCs (Japanese Training Course) は、伊都地区および病院（馬出）地区の大学院に所属し語学の単位を卒業単位として要さない留学生（修士・博士・研究生・交換）や学部留学生のための日本語補講コースである。大学院所属の学生は各所属で研究活動を行う一方、日本での生活や卒業後の就職のために日本語の習得が必要であり、補講科目として、自由選択でJTCsを受講することができる。JTCsは、例年400～500名前後の受講生を受け入れ、九州大学内で最大規模の日本語コースとなっている。

2. JTCs のコース構成

2. 1. コースの期間

令和6年度（2024年度）のコースの募集、及び、開講期間は以下、表1の通りである。

表1 2024年度開講スケジュール

	前期	後期
受講申し込み	4月10日（水）～4月15日（月）	10月16日（水）～10月21日（月）
オンラインテスト		
レベル結果通知	4月17日（水）	10月23日（水）
クラス選択	4月18日（木）～4月20日（土）	10月24日（木）～10月26日（土）
授業開始～授業終了	5月7日（火）～7月18日（木）	10月7日（木）～1月31日（金）

JTCsの受講を希望する者は、表1にある期間にオンラインで受講申請を行い、テストを受験する。オンラインテストは、日本語1の希望者は登録のみとし、日本語2以上の希望者には、文法・読解・聴解の3つのテストを課している。テスト結果はオンラインシステムにより処理され、受講者はJ1からJ7までの7段階にレベル分けされる。レベルの結果は、システムからメールで通知される。その後、クラス登録期間にオンラインシステムに入り、受講者は自分が受講したいクラスを選択する。

*九州大学留学生センター准教授

2. 2. コースの構成

表2と表3には、今年度の前期と後期にJTCsで開講されたコースの一覧を示す。前期には日本語1から日本語7までに加えて日本語1+を追加した8レベルが、後期には日本語1から日本語7までの7レベルが開講された。

表2 2024年度前期の授業構成

レベル基準	レベル名称	教科書	クラス数
中級後半 (Upper Intermediate)	日本語7 (Japanese7)	留学生のためのケースで学ぶ日本語	1
中級 (Mid-Intermediate)	日本語6 (Japanese6)	中級を学ぼう 中級前期	2
初中級 (Pre-Intermediate)	日本語5 (Japanese5)	中級へ行こう	3
初級後期 (Upper Elementary)	日本語4 (Japanese4)	GENKI II	3
初級中期 (Mid-Elementary)	日本語3 (Japanese3)		3
初級前期 (Early Elementary)	日本語2 (Japanese2)	GENKI I	3
入門2 (Beginner2)	日本語1+ (Japanese1+)		1
入門1 (Beginner1)	日本語1 (Japanese1)		5

表3 2024年度後期の授業構成

レベル基準	レベル名称	教科書	クラス数
中級後半 (Upper Intermediate)	日本語7 (Japanese7)	留学生のためのケースで学ぶ日本語	1
中級 (Mid-Intermediate)	日本語6 (Japanese6)	中級を学ぼう 中級前期	2
初中級 (Pre-Intermediate)	日本語5 (Japanese5)	中級へ行こう	3
初級後期 (Upper Elementary)	日本語4 (Japanese4)	GENKI II	3
初級中期 (Mid-Elementary)	日本語3 (Japanese3)		
初級前期 (Early Elementary)	日本語2 (Japanese2)	GENKI I	3
入門 (Beginner)	日本語1 (Japanese1)		6

3. 受講者数、及び、受講者の内訳

3. 1. 受講者数

表4は、2024年度の前期および後期における受講者数を示している。前期には226名が申請し、そのうち221名がプレースメントテストによってクラスに割り当てられたが、実際のクラス開始時の受講者は191名であった。後期には276名が申請し、266名がプレースメントによりクラスに割り当てられ、最終的に230名が受講した。

表4 各期別の受講者数

前期			後期		
申請者	プレース	受講者	申請者	プレース	受講者
226	221	191	276	266	230

表7 2024年度前期の所属・身分別の申請者数内訳

	修士	博士	研究生	専修生	交換留学生	その他	部局別集計
システム情報科学府	1	6	5		8		20
システム生命科学府		2	1		1		4
医学部・医学系学府		6	2				8
共創学部					9		9
教育学部					3		3
経済学部・経済学府	3	3	2		3		11
工学部・工学府	6	10	5	1	11		33
歯学部・歯学府		6	4				10
人間環境学府	8	8	9		7		32
数理学府	3		3				6
生物資源環境科学府	13	12	3				28
地球社会統合科学府	2	2	1		1		6
統合新領域学府	2	2					4
農学部			7				7
文学部・人文科学府	2		1		8		11
法学部・法学府	18	1			6		25
薬学部・薬学府		1	2				3
理学部・理学府	2	1	1				4
その他						2	2
課程別計	60	60	46	1	57	2	226

国籍（上位5ヶ国）：中国 82, インドネシア 13, エジプト 9, フランス 7, ベトナム 6

表8 2024年度後期の所属・身分別の申請者数内訳

	学部	修士	博士	研究生	交換留学生	その他	部局別集計
システム情報科学府			5	14	7		26
システム生命科学府			6	3	1		10
医学部・医学系学府			4	2	1		7
共創学部					8		8
教育学部					5		5
経済学部・経済学府		6	1	2	8		17
工学部・工学府	1	7	13	14	21		56
歯学部・歯学府			12	3			15
人間環境学府		1	7	17	3		28
数理学府		2	1	1			4
生体防衛医学研究所				1			1
生物資源環境科学府		8	8	2			18
地球社会統合科学府		4	2	2	1		9
統合新領域学府		2		3			5
農学部				12	4		16
文学部・人文科学府		2			4		6
法学部・法学府		24	1		11		36
薬学部・薬学府				1			1
理学部・理学府		1	5	2			8
課程別計	1	57	65	79	74		276

国籍（上位5ヶ国）：中国 101, インドネシア 17, 台湾 15, タイ・ドイツ・フランス 9

4. 2024年度に行った改善

4. 1. ハイブリットクラスの開講

2024年度は、日本語6と日本語7の2レベルについて、病院地区の受講生がいる場合にハイブリット形式で授業を開講することが決定された。この条件に基づき、2024年度は日本語6のみが対象となり、前後期ともに病院地区から各2名の留学生が受講したため、授業がハイブリット形式で実施された。

ハイブリット形式の導入にあたり、留学生センターでは Meeting OWL を1台購入した。この機器は360°カメラ、マイク、スピーカーが一体化しており、対面授業とオンライン授業の両方を円滑に統合することを可能にする。Meeting OWLを使用することで、日本語6クラスを対面で受ける受講生はノートPCでZoomに接続してカメラやマイクを準備することなく、オンライン参加者と顔を見合わせて会話ができる環境が整備された。

4. 2. 仮名文字トレーニングコースにおける学生アルバイトの雇用

昨年度に続き2024年度も、コース開講前の約2週間にわたり計5回ずつ、日本語1レベルの受講生を主な対象としてオンライン形式で仮名文字（ひらがな・カタカナ）の補講を実施した。授業は、前後期ともにコーディネーターが受講生の都合に配慮し、19:30～21:00の時間帯に行った。参加者数は各回20～50名程度で、比較的多くの受講生が参加した。また、昨年度、このコースにゼロ初級者が多く参加した結果、コーディネーターに大きな添削負担が発生した。このことを受け、今年度は学生アルバイトを1名雇用し、添削作業を任せることでコーディネーターの負担軽減と業務の効率化を図った。

表9 2024年度 JTCs 仮名文字補講コーススケジュール

	前期	後期
	オンラインコース	オンラインコース
ひらがな1	4月22日（月）19:30-21:00	10月23日（水）19:30-21:00
ひらがな2	4月24日（水）19:30-21:00	10月25日（金）19:30-21:00
ひらがな3	4月26日（金）19:30-21:00	10月28日（月）19:30-21:00
カタカナ1	4月30日（火）19:30-21:00	10月30日（水）19:30-21:00
カタカナ2	5月2日（木）19:30-21:00	11月5日（火）19:30-21:00

4. 3. 日本語1レベルの受講者数の増加、日本語1⁺クラスの閉講と日本語1fクラスの増設

2024年度後期は、オンラインプレースメントテストを実施した結果、日本語1レベルに登録した受講生が113名に上ることが明らかとなった。この人数は、昨年度同時期の受講者数を20名以上上回る増加であった。

この受講者数の急増に対応するため、急遽既存のカリキュラムを見直し、日本語1⁺クラスを閉講し、新たに日本語1fクラスを増設する措置を取った。この変更により、より多くの受講生が適切な学習環境で学べるよう調整を図った。

5. おわりに

今年度の JTCs では、全レベルで病院地区の留学生にオンライン授業を提供するため、Meeting Owl を導入し、コース内容の充実を図った。そして、前後期にわたり、日本語 6 レベルの 1 クラスでは、ハイブリット形式の授業を開講した。しかし、この形式では、コーディネーターや教務補佐が毎回機材を設置する必要があり、担当教員には対面とオンライン双方の教材準備や授業中のパソコン操作が求められるため、通常の授業よりも運営に大きな負担がかかった。一方で、伊都地区では対面授業を希望する受講生が多く、病院地区の受講生にはオンラインで対応する必要がある現状を踏まえ、今後も一部のレベルではハイブリットクラスを可能な範囲で継続する方針である。しかし、担当教員やコーディネーターの負担を軽減する具体的な方策を講じることが、現時点での重要な課題である。

参考文献

柴田あづさ (2024) 「2023年度 伊都キャンパス・病院（馬出）キャンパス日本語補講コース」『九州大学留学生センター 紀要』第32号、pp.75-80.

A1		A2		B1		B2		C1		C2			
Basic User 基礎段階の言語使用者		Independent User 自立した言語使用者		Proficient User 熟達した言語使用者									
Level	JTCs	Level	JTCs	Level	JTCs	Level	JTCs	Level	JTCs	Level	JTCs		
<p>Beginner A1 Japanese 1</p> <p>This course is designed for complete beginners. Students with learning and practicing the skills needed to succeed in 10-minute classes twice a week. This course aimed to grow up the students who could easily to start Japanese life.</p>	<p>Japanese 1 (1h, 1c, 1d, 1e)</p>	<p>Early elementary 初級前期</p> <p>Japanese 2a, 2b, 2c</p> <p>This course is for the students who have a basic knowledge of Japanese. Students learn the basic grammatical structures of Japanese and learn the basic grammar and vocabulary for everyday conversation, and will develop the ability to talk about the target in a small group.</p>	<p>Japanese 2a, 2b, 2c</p>	<p>Upper Elementary 初級後期</p> <p>Japanese 3a, 3b, 3c, 3d</p> <p>This course is aimed for students who have already studied the grammar and vocabulary of Japanese course. The students will learn the basic grammar and vocabulary in the mid-level and will be able to explain various things in Japanese.</p>	<p>Japanese 3a, 3b, 3c, 3d</p>	<p>Pre-Intermediate 中級前期</p> <p>Japanese 4a, 4b, 4c, 4d</p> <p>This course is aimed for students who have already studied the grammar and vocabulary of Japanese course. The students will increase their language proficiency while reviewing and applying the grammar and vocabulary in the basic and intermediate level grammar. They will also strengthen their ability to express themselves in Japanese by expanding the range of their vocabulary. Students will develop the Japanese language skills necessary to understand the main points of a text, explain facts, and express their own opinions.</p>	<p>Japanese 4a, 4b, 4c, 4d</p>	<p>Early Intermediate 中級後期</p> <p>Japanese 5a, 5b, 5c, 5d</p> <p>This course is aimed at students who have studied elementary level grammar and are looking to improve their reading and listening skills. Students will practice grammar and vocabulary, as well as reading and listening comprehension exercises. Students will be able to understand abstract vocabulary, and will be able to summarize the content, express ideas based on an accurate understanding of grammar and vocabulary.</p>	<p>Japanese 5a, 5b, 5c, 5d</p>	<p>Mid-Intermediate 中級後期</p> <p>Japanese 6</p> <p>This course is aimed for learners who already have a good understanding of intermediate level grammar and are looking to improve their reading and listening skills. Students will practice grammar and vocabulary, as well as reading and listening comprehension exercises. Students will be able to understand abstract vocabulary, and will be able to summarize the content, express ideas based on an accurate understanding of grammar and vocabulary.</p>	<p>Japanese 6</p>	<p>Advanced 上級</p> <p>Japanese 7</p> <p>This course is aimed for learners who have at least completed "Japanese 6". This course is aimed for learners who already have a good understanding of advanced level grammar and are looking to improve their reading and listening skills. Students will practice grammar and vocabulary, as well as reading and listening comprehension exercises. Students will be able to understand abstract vocabulary, and will be able to summarize the content, express ideas based on an accurate understanding of grammar and vocabulary.</p>	<p>Japanese 7</p>
<p>このコースは、全くの初心者を対象とした初級前期のコースです。10分授業の学習と練習のスキルを身につけるために、週2回10分授業のクラスで学ぶことが目的です。このコースは、日本語生活を始められる学生がスムーズに日本語生活を送れるように設計されています。</p>	<p>このコースは、日本語の基礎知識がある学生を対象とした初級前期のコースです。学生は日本語の基本的な文法と語彙を学び、日常会話に必要な文法と語彙を学び、日本語生活を送るための能力を身につけます。</p>	<p>このコースは、日本語の基礎知識がある学生を対象とした初級後期のコースです。学生は日本語の文法と語彙を学び、日本語生活を送るための能力を身につけます。</p>	<p>このコースは、日本語の基礎知識がある学生を対象とした中級前期のコースです。学生は日本語の文法と語彙を学び、日本語生活を送るための能力を身につけます。</p>	<p>このコースは、日本語の基礎知識がある学生を対象とした中級後期のコースです。学生は日本語の文法と語彙を学び、日本語生活を送るための能力を身につけます。</p>	<p>このコースは、日本語の基礎知識がある学生を対象とした上級のコースです。学生は日本語の文法と語彙を学び、日本語生活を送るための能力を身につけます。</p>	<p>このコースは、日本語の基礎知識がある学生を対象とした上級のコースです。学生は日本語の文法と語彙を学び、日本語生活を送るための能力を身につけます。</p>	<p>このコースは、日本語の基礎知識がある学生を対象とした上級のコースです。学生は日本語の文法と語彙を学び、日本語生活を送るための能力を身につけます。</p>	<p>このコースは、日本語の基礎知識がある学生を対象とした上級のコースです。学生は日本語の文法と語彙を学び、日本語生活を送るための能力を身につけます。</p>	<p>このコースは、日本語の基礎知識がある学生を対象とした上級のコースです。学生は日本語の文法と語彙を学び、日本語生活を送るための能力を身につけます。</p>	<p>このコースは、日本語の基礎知識がある学生を対象とした上級のコースです。学生は日本語の文法と語彙を学び、日本語生活を送るための能力を身につけます。</p>	<p>このコースは、日本語の基礎知識がある学生を対象とした上級のコースです。学生は日本語の文法と語彙を学び、日本語生活を送るための能力を身につけます。</p>	<p>このコースは、日本語の基礎知識がある学生を対象とした上級のコースです。学生は日本語の文法と語彙を学び、日本語生活を送るための能力を身につけます。</p>	

① Japanese 1 + online has been cancelled. Japanese 1F has been added. (2024.10.25)
 ② Students who have completed Japanese 1F and wish to continue with Japanese 2 will be required to study Lesson 6 again as a review.
 ③ Details will be announced at the first class.
 ④ Details will be announced at the first class.
 ⑤ Details will be announced at the first class.
 ⑥ Details will be announced at the first class.
 ⑦ Details will be announced at the first class.
 ⑧ Details will be announced at the first class.
 ⑨ Details will be announced at the first class.
 ⑩ Details will be announced at the first class.
 ⑪ Details will be announced at the first class.
 ⑫ Details will be announced at the first class.
 ⑬ Details will be announced at the first class.
 ⑭ Details will be announced at the first class.
 ⑮ Details will be announced at the first class.
 ⑯ Details will be announced at the first class.
 ⑰ Details will be announced at the first class.
 ⑱ Details will be announced at the first class.
 ⑲ Details will be announced at the first class.
 ⑳ Details will be announced at the first class.
 ㉑ Details will be announced at the first class.
 ㉒ Details will be announced at the first class.
 ㉓ Details will be announced at the first class.
 ㉔ Details will be announced at the first class.
 ㉕ Details will be announced at the first class.
 ㉖ Details will be announced at the first class.
 ㉗ Details will be announced at the first class.
 ㉘ Details will be announced at the first class.
 ㉙ Details will be announced at the first class.
 ㉚ Details will be announced at the first class.
 ㉛ Details will be announced at the first class.
 ㉜ Details will be announced at the first class.
 ㉝ Details will be announced at the first class.
 ㉞ Details will be announced at the first class.
 ㉟ Details will be announced at the first class.
 ㊱ Details will be announced at the first class.
 ㊲ Details will be announced at the first class.
 ㊳ Details will be announced at the first class.
 ㊴ Details will be announced at the first class.
 ㊵ Details will be announced at the first class.
 ㊶ Details will be announced at the first class.
 ㊷ Details will be announced at the first class.
 ㊸ Details will be announced at the first class.
 ㊹ Details will be announced at the first class.
 ㊺ Details will be announced at the first class.
 ㊻ Details will be announced at the first class.
 ㊼ Details will be announced at the first class.
 ㊽ Details will be announced at the first class.
 ㊾ Details will be announced at the first class.
 ㊿ Details will be announced at the first class.

図2 2024年度後期 JTCs ロードマップ

農学部・工学部の学士課程国際コース生に対する日本語教育

— 2024年度の実施状況 —

2024 Overview of the Japanese Language Education for those in the Undergraduate International Program in English (IUPE) at the Faculties of Engineering and Agriculture

柴田 あづさ*

1. はじめに

今年度は、農学部および工学部の学士課程国際コース（以下、IUPE）の留学生が、留学生センターが提供する Japanese Academic Courses（以下、JACs）を受講する体制に移行して7年目を迎えた。このJACsは、I（総合日本語）、K（漢字）、S（会話）、W（作文）の4コース・8レベルで構成されている。IUPE生は、このうちIコースとKコースを受講し、それを基幹教育における言語文化科目「日本語」として単位認定している。

本報告では、2024年度の新入生受け入れ状況と、2年生に進級したIUPE生のJACs受講状況について概況をまとめる。

2. JACs 受講までのスケジュール

2024年度のJACsの授業は、基幹教育の方針に基づき、主に対面形式で実施された。

表1および表2は、それぞれ10月に入学した新1年生と、10月に進級した新2年生のJACs受講までのスケジュールを示している。

表1 2024年度新1年生のIUPE生のJACs受講までのスケジュール

9月19日～9月30日	13:00	JACs システムへの受講登録、OT 受験
9月26日	13:30	基幹教育ガイダンスでのJACs受講オリエンテーション
10月1日		受講クラスの結果発表
10月4日		JACs 受講開始

*九州大学留学生センター准教授

表2 2024年度新2年生以上のIUPE生のJACs受講までのスケジュール

9月19日～9月30日 13:00	JACsシステムへの受講登録、OT ¹ 受験 (Iコースのレベル変更希望者のみ)
10月1日	受講クラスの結果発表
10月4日	JACs受講開始

2024年度の新1年生は、農学部16名、工学部19名で、JACs履修の案内メールは昨年と同様に基幹教育教務係から代理送信された。IUPE新1年生のJACs受講オリエンテーションも、昨年度と同様に共創学部新1年生と合同で対面により開催され、窓口担当教員である筆者が英語で説明を行った。

一方で、新2年生以上でJACsを受講した者は、農学部10名、工学部15名であった。受講登録の案内メールは、新1年生と同様、基幹教育教務係に送信を依頼し、期間中にクォーター3とクォーター4の登録をするよう促した。

新1年生は、オリエンテーション(OT)の結果に基づいて判定されたレベルの授業に出席した。また、新2年生は、クォーター1およびクォーター2で受講したJACsの成績判定に基づいて決定されたレベルの授業に参加した。

3. 日本語免除科目のR認定状況

JACsおよび基幹教育、農・工学部の卒業要件では、IUPEに在籍する正規留学生は、1年次にIコースを4単位、Kコースを4単位修得し、2年次の前半にIコースをさらに2単位修得することが基本的な履修計画とされている。

しかし、IUPE生の中には、日本語を母語とする者や、日本語と他言語を第一言語として話す者がいる。このため、JACsのプレースメントテストで日本語能力がネイティブレベルと判定された場合、日本語科目を履修したものとみなし、成績を「R(免除認定)」として認定する制度が2022年度より導入された。この制度により、対象者は該当科目を履修することなく単位を修得できる。2024年度においては、農学部の新1年生3名が、日本語科目の全てについてR認定を受けた。

4. IUPE生のJACs受講に関わる今後の課題

工学部の『IUPE履修要綱』では、「日本語では、『Integrated Courses (1)』および『Kanji Course (1)』からそれぞれ4科目4単位以上、全体で10単位以上を修得しなければなりません。」と記載されている。この記述は、2年生がIコースとKコースの両方を履修することや、Iコースに代えてKコースを選択することが可能であると解釈されかねない。そのため、IUPE生の中には、1年次のみならず2年次においてもIとKの両方を履修したいという希望や、母語や言語環境に関係なく2年次にはIではなくKコースを履修したいという希望を持つ者がいる。このような要望に応じた場合、JACsのIおよびKコースで定員超過が発生する可能性が高い。

1 インターネット上の日本語のレベル判定テストで、文法、読解、聴解の3種類がある。

これに対して、工学部および基幹教育の担当者からは「原則としてIコースを6単位、Kコースを4単位履修するべきである」と学生に指導する方針が示されており、現在はこうした学生への個別対応が行われている。しかし、履修手続きを円滑化するためには、履修要綱において履修方法を学生にとって分かりやすい表現で記載することが求められる。そのため、今後も工学部、基幹教育、留学生センターの各担当者間で協議を重ね、解決策を模索していく必要がある。

また、図1に示す通り、近年、IUPE 新入生は増加傾向にあるが、日本語学習経験のない初級者も増え、JACs 運営側の課題となっている。2024年度には、JACs の入門レベル (JI-1コース) 2クラス中、1クラスで定員を超えた^{2,3}。この傾向が今後も続くかは不明であるが、日本語入門者へのきめ細やかな教育体制を維持するためには、JI-1コースを増設するなどの具体的な対策を検討し、この課題に対応する必要がある。

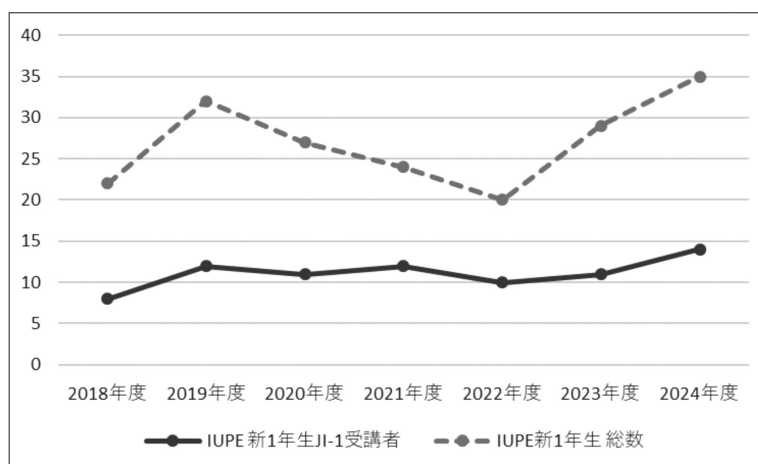


図1 IUPE 新1年生 2018年度～2024年度 JACs JI-1 (入門) 受講生数の推移

参考文献

1. Kikan Education (2024) “Information Guidebook for International Undergraduate Program in English and School of Interdisciplinary Science and Innovation (October Enrollment) 学士課程国際コース／共創学部 (10月入学生) 履修要項：For Students Enrolled in Autumn 2024 2024年度10月入学者用” Kikan Education, Kyushu University, 39-54.
2. 岡崎智己 (2019) 「農学部・工学部の学士課程国際コース生に対する日本語教育」『九州大学留学生センター紀要』27, 109-111.
3. 岡崎智己 (2020) 「農学部・工学部の学士課程国際コース生に対する日本語教育 — 2019年度の実施概況 —」『九州大学留学生センター紀要』28, 127-131.
4. 酒井彩 (2021) 「農学部・工学部の学士課程国際コース生に対する日本語教育 — 2020年度の実施状況 —」『九州大学留学生センター紀要』29, 79-81.
5. 柴田あづさ (2022) 「農学部・工学部の学士課程国際コース生に対する日本語教育 — 2021年度の実施状況 —」『九州大学留学生センター紀要』30, 67-70.

2 JACs の入門レベル (JI-1コース) の定員は1クラス16名であるが、2024年度秋学期はJI-1a クラスを16名が、JI-1b クラスを19名が履修し、1クラスが定員を超過した。

3 JACs の入門レベルは、IUPE 生のほかに、共創学部正規留学生やJTW 生、学部交換留学生などが履修している。

6. 柴田あづさ (2023) 「農学部・工学部の学士課程国際コース生に対する日本語教育 — 2021年度の実施状況 — 」『九州大学留学生センター紀要』31, 111-114.
7. 柴田あづさ (2024) 「農学部・工学部の学士課程国際コース生に対する日本語教育 — 2022年度の実施状況 — 」『九州大学留学生センター紀要』32, 93-95.

日本語・日本文化研修コースの報告 (第24期生)

Report on Japanese Language and Culture Course (JLCC 2023-2024)

郭 俊 海*

1. はじめに

九州大学留学生センターの日本語・日本文化研修コース Japanese Language and Culture Course、以下「JLCC」という)は、日本国以外の大学の学部もしくは大学院に在籍し、日本語・日本文化に関する分野を専攻している学生を11か月間受入れ、今後の日本研究に必要となる日本語能力の向上を図るとともに、日本の社会や文化に関する理解を深めることにより、諸外国の将来を担う世代に日本への興味・関心を伝播し、日本の事情に通じた指導者となる人材を育成することを目的とした短期留学コースである。

2. 概要

2. 1. 受入れ人数

平成12年度から、日本語・日本文化研修生(以下、「JLCC生」という)は一括して留学生センターが受入れ主体となっており、令和5年度の受入れ人数は13名である。

2. 2. 受入れ期間

その年の10月1日から翌年の8月31日まで

2. 3. 出身国・地域と出身大学

24期生は、6カ国・地域の9大学から計13名が参加している。うち、国費奨学金受給者は3名である(大使館推薦2名、大学推薦1名)。表1はその出身国・地域と出身大学を示す。

*九州大学留学生センター教授

表1 24期生の出身国・地域

国・地域	大学名	人数(名)
韓国	釜山大学	1
	仁荷大学校	1
台湾	国立台湾師範大学	1
中国	吉林大学	1
	南開大学	2
	華南理工大学	2
オランダ	ライデン大学	2
ドイツ	ミュンヘン大学	1
フランス	国立東洋言語文化大学 (INALCO)	2
(計6カ国・地域)	9大学	13

2. 4. 主な年間行事

日にち

行事内容

2023年

- 9月19日(火)～29日(金) JACs オンライン受講申し込み及びプレースメントテスト
 9月26日(火) オリエンテーション
 9月30日(土) 福岡市防災センタースタディトリップ
 10月2日(月) 令和5年度秋季入学式・外国人短期留学プログラム開講式
 10月3日(火) 基幹教育・学部・JLCCの授業開始
 11月5日(日) 東風コミュニティーセンター交流会
 12月11日(月) 糸島市東風小学校訪問
 12月18日(月) 太宰府戒壇院座禅スタディトリップ

2024年

- 1月5日(金) JLCC、JACs、基幹教育及び学部の授業開始
 1月15日(月)、22日(月) 三者面談
 1月29日(月) 春学期オリエンテーション
 2月9日(金) 博多座歌舞伎鑑賞
 4月8日(月) 日田市スタディトリップ
 4月9日(火) JLCC、JACs、基幹教育、学部の授業開始
 5月13日(月) 吉野ヶ里スタディトリップ
 6月9日(日)～10日(月) JTW、JLCC 長崎スタディトリップ
 6月17日(月) 祐徳稲荷神社スタディトリップ
 7月30日(火) 自主研究(ISP) 結果発表

8月6日（火）	閉講式
8月7日（水）～22日（木）	自主研修期間
8月23日（金）	振り返り会

2. 5. コースの修了要件

JLCCのカリキュラムは、必修科目、選択必修科目と選択科目から構成される。コースを修了するには、年間30単位（450時間）の履修が必要である（表2）。

- **必修科目（2単位、30時間）**

留学生センターで春学期に開講される「自主研究（ISP：Independent Study Project）」で、2単位を履修する。

- **選択必修科目（24単位、360時間）**

留学生センターで開講される選択必修科目群の「日本語論（JL: Japanese Language and Linguistics）」、「日本社会文化論（JC: Japanese Culture and Society）」のうち、それぞれ年間12単位以上を履修する。詳しくは表2のとおりである。

- **選択科目（4単位、60時間）**

基幹教育院や文学部、経済学部、法学部など各学部等が開講する日本の社会や文化に関する学部学生向けの授業科目を年間2科目（4単位）以上履修する。

表2 JLCC24期生のカリキュラム

	秋学期（10月～3月）	曜日&担当者	春学期（4月～8月）	曜日&担当者
必修科目			自主研究 2単位（30時間） ISP（Independent Study Project）	火2水5郭
選択必修科目	日本語論（Japanese Language and Linguistics） 通年12単位（180時間）			
	JL 103 日本語・日本文化概論	金2郭	JL 203 日本語・日本文化概論B	金2郭
	JL 104 ドキュメンタリー番組で学ぶ日本語	木2柴田	JL 205 ジグソー法で学ぶ身近な日本語	水3小山
	JL 106 日本地域と地域方言	火5楠木		
	日本社会文化論（Japanese Culture and Society） 通年12単位（180時間）			
	JC 101 日本の宗教と社会	木1木下	JC 201 日本の宗教文化	金3木下
JC 104 ドラマで学ぶ日本の歴史	水3小山	JC 203 音楽文化にみる日本	木2柴田	
JC 105 4コマ漫画にみる日本A	火3和田	JC 204 九州学	火5楠木	
JC 205 4コマ漫画にみる日本B			火3和田	
選択科目	通年4単位（60時間） 各学部等が開講する日本の社会や文化に関する学部学生向け授業			

2. 6. 単位認定

本コースで履修した科目は、成績認定が行われ、所定の要件を満たすと修了証が授与される。また単位互換に応じることできる。

3. 授業について

3. 1. 授業の取り方

授業の取りかたについては、従来通り、秋学期には留学生センターが開講する技能別日本語コース（総合、会話、漢字、作文）と JLCC の必修科目を中心に受講させ、日本語力の向上を目的とした。春学期も、引き続き JLCC の必修科目、基幹教育院や学部の授業を中心に受講させた。

3. 2. 必修科目「自主研究」

JLCC 生の日本語の応用力を高め、日本人や日本社会に直接触れる機会を与えることを目的に、従来の「文献講読」を15期生から「自主研究（ISP: Independent Study Project）」としている。

「自主研究」は「文献講読」と「社会調査」の二つに分かれる。社会調査では、各自が日本に関する興味のある分野からテーマを見つけ、それについて問題設定や社会調査（インタビュー調査・質問紙調査）を行う。隔週で口頭発表による進捗報告を行い、学期末にレポートを作成する。文献講読では、各自が興味のある分野の単行本一冊を選び精読し、同様に隔週で口頭発表による進捗報告を行い、学期末にレポートを作成する。以下に、研修生たちが作成したレポートのテーマを示す。

文献講読

1. 日中語ビジンの調査
2. 長崎の海外への窓口としての役割
3. 戦時期の日本の精神史

社会調査

4. 現在の日本人と中国人の視点からの南京虐殺・南京事件
5. コンテンツツーリズムと観光
6. 「いう」という動詞の発音の違いについて
7. 日本のアイドル文化の「広がり」現象と考察
8. 日本文化の二次創作
9. 聖地巡礼と地方振興
10. コンビニが日本人のライフスタイルに与える影響
11. 大学生の古着に対する意識と古着消費の要因分析
12. 日本産業のロボット化
13. 日本のゲーム市場の変化

3. 3. エクストラ・カリキュラムの開発

近年、JLCC 生の関心や興味は、日本語よりも日本文化や日本社会一般に移りつつある傾向である。修了生からは「日本文化を体験できる機会を増やしてほしい」「見学旅行や日本人との交流活動をもっと多く行ってほしい」、「帰国前に日本でインターンシップを経験したい」等の声が上がってきている。

こういった修了生のフィードバックを踏まえ、体で日本文化を体験できる活動を増やすことを目的とし、ゲストレクチャーや課外活動を含むエクストラ・カリキュラムの開発・実施を継続している。

3. 4. その他

学生の指導においては、これまでは、普段勉強や生活に関する相談に対し適宜手当を講じるほかに、学期ごとに、JLCC 生全員を対象に一人ずつ三者面談（コーディネーターと事務担当）を実施してきた。24期生の場合、毎週、授業の前後の時間を利用して面談を行い、勉強上の問題点などを迅速に把握し、スムーズな問題解決につながった。また、学生との LINE グループを作って、授業時間外や週末にも迅速に学生対応できるようにした。

4. コース評価

コース評価は、「自主研修」終了後、プログラム「振り返り会」を実施し、カリキュラムの構成、授業内容、見学旅行及び今後の改善点といった面から、JLCC 生から多様な意見を収集した。また、Google Form を活用し、コースの満足度について「非常に満足」「満足」「どちらとも言えない」「あまり満足しない」「満足しない」と5段階で評価を行った。

カリキュラムの構成や授業内容を含むプログラム全体についての評価（回答者：5人）では、全員（100%）「非常に満足」と回答した。受講生からは「異文化の背景から来た皆さんと楽しい1年を過ごせて満足しています」、「JLCC でたくさんのことを体験しました。最初の授業が最初の私にとって難しかったのですが、だんだん慣れてきました、そして日本語の能力も上がってきました」、「とても貴重な一年でした。いつだってJLCC 生、九大生だったことを誇りに思います」といった感想が寄せられた。

自主研究の難易度に関する回答（回答者：5人）では、「ちょうどよい」が40%、「難しかった」が60%だった。全体的に「良かった点」としては、以下のような意見が寄せられた。

- 「自分で小さなレポートを書くことができるようになり、書くスキルの育成に役立ちます」
- 「様々なフォーマルの言葉と論文の書き方を勉強しました」
- 「論文作成についての知識を得てよかったです」

これらの感想から、自主研究が受講生の論文作成スキルの向上に寄与したことがうかがえる。

5. 今後の課題

近年、研修コース生から「日本人学生と一緒に受ける授業が少ない」、「日本文化をもっと体験したい」といった声が寄せられる一方で、日本企業への就職や日本・海外の大学院進学に関する相談も増加している。これを踏まえ、今後の重要な課題として、日本人学生との協働学習型カリキュラムの開発や、研修コース生を対象とした就職、大学院進学支援の強化が挙げられる。また、カリキュラム改善の一環として、研修生のニーズに応えるために体験型授業を増やし、その内容をさらに充実させることが求められる。

Fostering Global Citizenship: The Long-Term Impact of Kyushu University's JTW Program

Chisato Nonaka*

Abstract

This paper examines the long-term impact of Kyushu University's Japan in Today's World (JTW) program through the lens of alumni experiences. Drawing on semi-structured interviews with seven alumni, it explores themes of cultural immersion, personal growth, and professional development. Findings underscore the program's role in fostering global citizenship and intercultural competence, contributing to broader discussions on the value of study-abroad programs.

Introduction

Study-abroad programs have long been recognized as transformative experiences that cultivate intercultural understanding and global awareness. The JTW program, now in its 30th year, exemplifies this potential by immersing students in Japan's cultural and academic landscapes. This paper seeks to explore how JTW influences alumni's personal and professional trajectories, contributing to the broader discourse on global education.

Speaking briefly about the program, Kyushu University's JTW program opens its doors to a vibrant and diverse group of international students. This flagship program welcomes individuals from various academic disciplines, age groups, and cultural and linguistic backgrounds, enriching Kyushu University's campus with an unparalleled global perspective. As an immersive inbound study-abroad program, JTW is designed to foster cross-cultural understanding by providing students with a unique opportunity to explore Japan's culture, society, and academia, while also serving as a bridge for Japanese students and residents to engage with the global community.

Like any study-abroad program, JTW is not without its challenges. Students often encounter cultural differences, adjustment struggles, and homesickness as they adapt to their new academic and social environment in Japan. However, these challenges also pave the way for transformative growth. Recognizing these hurdles, the JTW faculty and staff provide comprehensive support services to help students succeed. From academic guidance to carefully-designed extracurricular activities that immerse

*Associate Professor, Kyushu University International Student Center

students in Japanese culture, the program is dedicated to enhancing every aspect of the students' experience.

In light of the 30th anniversary of the JTW program, from October 2023 to July 2024, this paper offers a unique perspective on its long-term impact through the reflections of seven alumni who have returned to Japan during this milestone year. These alumni represent a small yet significant group whose stories illuminate the program's profound influence on their personal and professional journeys. Their insights shed light on the program's strengths, its ability to foster meaningful and long-lasting relationships, and the shared dreams and values that define the JTW experience as a whole.

Literature Review

Cultural Immersion and Intercultural Competence

Existing studies highlight the role of cultural immersion in fostering empathy and cross-cultural skills (Deardorff, 2009). Experiential and immersive activities, such as those offered by JTW, provide a framework for transformative learning (Mezirow, 1997). More recent study by Belliveau (2019) has emphasized the importance of cultural humility in developing intercultural competence through study-abroad experiences. Their findings underscore how reflection on cultural differences, a core aspect of JTW's curriculum, enhances empathy and adaptability.

Within the context of Japanese higher education in recent years, Aizawa and Rose (2019) explore how English-medium instruction (EMI) programs align with Japan's broader internationalization efforts under the Top Global University Project. By design, these initiatives aim to increase intercultural interactions on Japanese campuses, promoting a deeper mutual understanding between domestic and international students. While there is a long way ahead in realizing a truly global campus for our students, the integration of cultural workshops, field trips, and community programs in JTW directly supports the above visions by creating opportunities for meaningful engagement between local and international members of community.

Study-Abroad Programs for Career Development and Beyond

Research suggests that study-abroad experiences also enhance employability by developing soft skills like adaptability and problem-solving (Paige et al., 2004). A more recent study by Dolce, et al. (2023) explores study-abroad programs as opportunities for experiential and transformative learning, focusing on the relationship between cultural intelligence, resilience, and the internationalism career anchor. Using data from 170 Italian Erasmus participants and a control group, the research highlights how resilience and intercultural interactions enhance cultural intelligence, global career aspirations, and cognitive growth, emphasizing the transformative impact of critical intercultural experiences.

In the Japanese context, EMI programs like JTW may serve as a vital platform for fostering

cross-cultural exchanges between local and international students. In fact, these programs not only equip international students with skills necessary for academic and career advancement but also provide Japanese students with a unique “pseudo-study-abroad” experience. Research by Yonezawa (2011) highlights the challenges faced by Japanese students in participating in traditional study-abroad programs, including financial burdens, emotional hesitations, and logistical constraints stemming from rigid academic calendars. That being said, EMI programs such as JTW provides a cost-effective and emotionally accessible space, allowing local Japanese students to interact with peers from diverse cultural backgrounds without leaving their home university.

Through intercultural exchanges in classroom settings, community-based activities, and shared academic projects, local students can develop intercultural communication skills and global perspectives—qualities increasingly valued in the workforce. In this light, research by Suematsu, et al. (2024; 2019) emphasizes that structured interactions with international peers within local settings can yield benefits similar to those gained through overseas mobility, including greater adaptability, cross-cultural empathy, and professional confidence.

By fostering mutual learning experiences, JTW demonstrates its potential as a platform for cultivating global talent not only among the program participants but also among the local Japanese students on campus while addressing barriers that hinder Japanese students from traditional study-abroad experiences.

Methodology

Data Collection and Procedure

Data for this paper was gathered through semi-structured, email interviews with JTW alumni, supplemented by further communication and email exchanges when and where necessary. All seven alumni were contacted by and communicated with one of the JTW faculty for the interview.

These graduates were informed of the five primary interview questions and given approximately two weeks to respond. Additional follow-up questions were asked when needed to clarify or expand on their responses. The findings presented in this paper have been reconstructed from the interview responses and notes, triangulated with the program's official records and documents as appropriate, and refined through subsequent email communication and follow-ups.

Data Analysis

As a small-scale exploratory study, the author analyzed alumni interview responses and notes to identify common themes and key insights. While the sample size of participants is limited, further exploration of alumni experiences could provide deeper understanding and broader perspectives. Nevertheless, several meaningful themes have emerged from the interviews, offering valuable reflections

on the program's impact. In the sections that follow, the paper presents these findings as a foundation for celebrating the 30th anniversary of JTW and fostering discussions on enhancing the program for future participants.

Interviews with Seven JTW Alumni

To mark three decades of enriching academic and cultural exchange, the JTW team sought to explore the program's impact by engaging with its alumni. The goal was twofold: to celebrate the program's legacy and to gain a deeper understanding of students' experiences before, during, and after their participation.

Introducing the Interviewees

For this paper, eight former JTW students were initially approached, all of whom had returned to Japan during the past year. These alumni came back to Japan for various reasons, such as personal or business trips, additional study-abroad programs, internships, or permanent job opportunities. Their return underscores a common sentiment among JTW alumni—a deep-seated connection to Japan and a desire to rekindle their ties with the country. Of the eight alumni contacted for this study, seven agreed to participate in the interviews, sharing their unique stories and perspectives. These individuals (see Table 1) represent diverse backgrounds, as well as varied academic and professional trajectories. Their experiences during JTW and their lives since completing the program highlight the transformative nature of studying abroad and the enduring impact of JTW in shaping their careers, personal growth, and global outlook.

This paper compiles the reflections of these alumni, offering a window into their journeys—how they came to Japan initially, their experiences during the program, and the ways in which JTW has influenced their lives since. Their stories serve as a testament to the program's success in fostering cross-cultural understanding, lifelong connections, and lasting memories. They also provide valuable insights into how JTW can continue to evolve, ensuring that future participants have an equally enriching experience.

Table 1 *List of interviewees and their background information*

Interviewees (pseudonym)	Year of JTW Participation	Major	Current Residence
1. Caz	2018-2019	Economics and Anthropology	Stockholm, Sweden
2. Gigi	2018-2019	Music	London, U.K.
3. Kai	2018-2019	Japanese Linguistics	Seattle, U.S.
4. Carrie	2022-2023	Japanese Language and Culture	Kawasaki, Japan
5. Pran	2024	Teacher Education	Munich, Germany
6. Ro	2018-2019	Law	Stockholm, Sweden
7. Yuyu	2021-2022	Japanese	Beijing, China

The first interviewee, Caz, an economics major from Stockholm, Sweden, joined the program to explore cultural differences and gain perspective on their own society. A semi-professional musician, Caz found joy in the simple aspects of life in Fukuoka, from local concerts to late nights in Tenjin. For Caz, “JTW was about rediscovering the magic of everyday interactions in a new culture.”

The second interviewee, a music student from the UK, Gigi pursued Japanese studies after developing a fascination with the language and culture. Gigi reflected on how “planting rice in Saga and returning months later to see the next cohort harvest it felt like being part of a meaningful cycle.”

The third interviewee, Kai, a Japanese linguistics major from America, valued the program’s robust support system, which provided not only academic guidance but also practical help with daily life in Japan. Kai recalled, “From helping us open bank accounts to connecting us with local families, the JTW staff made Kyudai feel like home.”

The fourth interviewee, another Swedish graduate, Carrie studied Japanese language and culture and emphasized the transformative nature of experiential learning. A standout memory was a visit to *Bairin-ji* temple (for a Zen meditation trip), which taught them the importance of stepping out of their comfort zone: “I signed up reluctantly, but it became one of my most treasured experiences.”

The fifth interviewee, Pran from Germany, studied a combination of history, politics, and philosophy and sought a smaller, more cohesive study-abroad experience after a less fulfilling exchange in South Korea. Pran described JTW as “the best time of my life, full of meaningful connections and unforgettable experiences, like visiting the Nagasaki Peace Museum.”

The sixth interviewee, a law student from the UK, Ro embraced the program’s cultural exchange opportunities, such as visiting a local elementary school in Susenji, where they met their host family and experienced local Japanese culture. Reflecting on these moments, Ro said, “The study trips and late-night hotel chats brought us closer together and deepened our understanding of Japan.”

The seventh interviewee, a Japanese major from China, Yuyu appreciated JTW’s diversity and academic opportunities, particularly the chance to conduct independent research. Yuyu noted, “Learning how to research independently and working with such knowledgeable professors were invaluable skills that I carry with me *today*.”

Findings and Discussion

For the interview, five main questions were designed and used as follows:

1. **Background and Introduction:** Could you tell us a bit about yourself? Where were you studying before joining the JTW program, including your home country, university, and major?
2. **Reflections on JTW Experience:** Looking back on your time in the JTW program, what experiences stand out to you the most? Are there any specific moments or activities that had a lasting impact on you?
3. **Connecting JTW to Current Work:** How have your experiences in JTW influenced your current

career or academic path? Are there skills or perspectives you gained in Japan that you find especially useful or meaningful now?

4. **Advice for Current and Future Students:** What advice would you offer to current or prospective JTW students? Are there any ways they can make the most of their time in the program or in Japan?
5. **Personal Connections and Community:** Have you stayed connected with the JTW community or Japan since completing the program? If so, how have these connections influenced your life or career?

The following sections are thematized based on the common findings in the responses received from the interviewees. The author will also add some discussion on similarities as well as differences among such responses where relevant and necessary.

Common Themes in Alumni Experiences

1 . Cultural Immersion and Personal Growth

Each alumnus emphasized how deeply the immersive cultural experiences in Japan contributed to their personal growth, often in ways they had not anticipated. This aligns with Deardorff's (2009) assertion that cultural immersion fosters empathy and cross-cultural competence, as well as Mezirow's (1997) framework of transformative learning. For many alumni, these experiences not only provided a greater understanding of Japan's unique culture but also taught life lessons that extended far beyond the classroom.

For example, Pran's reflection on the Nagasaki study trip resonates with Belliveau's (2019) findings, which emphasize how cultural humility and reflection on historical or cultural differences can enhance empathy and adaptability. Reflecting on their visit to the Peace Museum and their interaction with a survivor of the atomic bombing, they shared, "Listening to the survivor of the atomic bombing and visiting the Peace Museum left an indelible mark on me." This experience sparked a deep personal reflection on the impact of history, and it served as a poignant reminder of the importance of peace and understanding across cultures. Such moments of cultural immersion were pivotal, turning abstract knowledge into profound personal connections.

Similarly, Gigi also spoke of their hands-on learning experience, highlighting the significance of planting and harvesting rice in Saga. They described how this simple yet profound experience connected them not only to the land but also to the heart of Japanese culture: "It connected us to Japan's traditions and to each other." Engaging with local customs, like rice planting, provided a tangible way for students to understand the cultural values that define Japanese society. It was a shared experience that bonded the group and deepened their respect for Japan's agricultural heritage. This supports Aizawa and Rose's (2019) argument that EMI programs like JTW promote mutual understanding and foster intercultural growth.

Meanwhile, Caz, coming from Sweden, shared how stepping into an entirely new environment helped

to build their confidence. Reflecting on their experience, they explained, "Leaving Sweden for Kyushu with no expectations gave me a new outlook on life and the courage to take risks." Living abroad for an extended period in an unfamiliar culture was both daunting and exhilarating. It required them to navigate challenges, make decisions independently, and adapt to new social and academic environments. The result was a growth in confidence and self-assurance that continues to shape their personal and professional life, echoing Dolce et al.'s (2023) findings on the role of intercultural experiences in enhancing resilience and global career aspirations.

2 . Building Lifelong Connections

The strong sense of community within the JTW program reflects the principles of meaningful engagement carefully detailed in the foundational studies (Suematsu, 2024; Suematsu et al., 2019) Many alumni emphasized how the relationships they built continue to play a significant role in their current lives. The program not only brought them closer to Japanese culture and society but also to one another, creating a global network of friends and allies.

Carrie, reflecting on their time in the program, remarked, "While some friendships naturally faded, the ones that endured became even stronger despite the distance." The bonds forged in the shared experience of study abroad often transcend geographical barriers, creating connections that remain steadfast over time. These friendships, forged in the fires of cultural exchange and personal growth, have turned into lasting relationships, with alumni staying in touch across continents, reuniting whenever wherever possible.

Ro, whose time in the program led to a life-changing personal connection, shared how JTW helped them meet their future spouse. "Our time in JTW brought us together, and we'll be hosting a mini-reunion at our wedding." This deeply personal connection is a testament to how the program fosters more than just academic learning—it also brings people together, creating opportunities for love, lifelong friendship, and shared journeys that continue well beyond their time in Japan. Additionally, many alumni maintained strong ties with their host families, with one alumnus fondly remembering their visit to the Shiraito Waterfalls: "It's moments like these that continue to warm my heart and remind me of the importance of human connections across cultures." These connections, formed through shared experiences, continue to enrich their lives in meaningful ways. The alumni voices indeed reflect the long-term social benefits of intercultural exchanges highlighted by Suematsu et al. (2019).

3 . Professional and Academic Impact

The JTW program's influence on alumni careers and academic paths was another key theme. The opportunity to immerse in Japan's academic environment, coupled with the program's focus on language and cultural studies, provided alumni with soft skills like adaptability and problem-solving (Paige et al., 2004) to excel in their future careers.

Yuyu, who is now pursuing graduate studies, credited the program with shaping their academic trajectory. “The program gave me confidence to approach academic challenges independently.” By encouraging students to engage in critical thinking and conduct independent research, JTW instilled skills that would later prove invaluable in graduate school and beyond. Their ability to navigate complex academic challenges and research independently was directly influenced by the academic rigor and support they experienced during their time in Japan.

Kai, whose career was also shaped by their JTW experience, highlighted the language skills and cross-cultural understanding they developed during the program. They recalled, “It was a ‘Karate Kid’ moment—I didn’t realize how much I had grown until I returned home.” Although initially they had not seen immediate improvements in their language abilities, the immersive environment in Japan gradually transformed their proficiency. This growth was not only in language skills but also in their ability to collaborate internationally, which has been critical in their current career path. Similar cases were discussed in Dolce et al.’s (2023) study that immersion in a local environment seems to help improve not simply language skills but also global career readiness, as an example of the transformative impact of intercultural interactions. The alumni experiences in Japan ignited a passion for international work, laying the foundation for future professional endeavors in cross-cultural settings.

4 . Advice for Future Students

The alumni’s advice for future JTW students was as varied as their experiences, yet all underscored the importance of embracing every opportunity the program offers, both academically and personally. Their insights were rooted in a deep understanding of what it takes to make the most out of a study abroad experience.

Pran, who recommended staying for two semesters, explained, “One semester is too short to truly experience all that Kyushu University and Japan have to offer.” A full academic year allows students to establish a routine, engage in deeper learning, and create lasting connections that can significantly enhance their experience. They emphasized how two semesters provide a fuller cultural immersion and a deeper appreciation of Japan’s complex history, traditions, and people.

Ro, who encouraged future students to prioritize building connections, said, “Organize dinners, trips, or even casual dorm hangouts—they’ll become your most cherished memories.” By taking the initiative to bond with fellow students, alumni found that the relationships they formed were not just limited to shared academic experiences but extended into shared cultural adventures. These moments, whether they were exploring Fukuoka or embarking on weekend trips, created lasting memories and strong networks.

Additionally, Carrie offered important advice about stepping out of one’s comfort zone. “Even if something doesn’t seem appealing at first, try it—you might be surprised by how transformative it can be.” This perspective will encourage future students to embrace uncertainty and challenge themselves to

engage with new experiences, whether academic or cultural, even if they initially feel uncomfortable. These challenges often lead to the most rewarding and transformative experiences.

Conclusion: Summary and Afterthought

The reflections shared by these seven JTW alumni illustrate the program's alignment with existing literature on cultural immersion, transformative learning, and internationalization efforts in higher education. Alumni experiences support Deardorff's (2009) argument that intercultural competences develop through meaningful engagement, and Belliveau's (2019) emphasis on the importance of cultural humility in intercultural interactions. Furthermore, the program's structure reflects Mezirow's (1997) transformative learning framework by providing opportunities for deep reflection and personal growth.

From hands-on experiences like planting rice in Saga to thought-provoking classroom discussions, their journeys highlight the transformative power of JTW's immersive approach to cultural and academic exploration. Each story underscores how the program's holistic focus—on experiential learning, community-building, and academic rigor—has left a lasting impact on its participants, shaping not only their worldviews but also their professional and personal paths.

Alumni testimonials also validate findings by Dolce et al. (2023), who highlight the role of resilience and intercultural interaction in fostering global career aspirations. Programs like JTW bridge the gap for local Japanese students who face barriers to studying abroad (Yonezawa, 2011), offering a local alternative that provides similar benefits, as noted by Suematsu et al. (2019).

At the heart of these alumni reflections is the profound sense of community that JTW cultivates. Whether it is the lifelong friendships forged with fellow participants, the enduring bonds with host families, or the professional connections that continue to inspire new opportunities, the relationships formed through the program are its most cherished legacy. As one alumnus so beautifully expressed, "Kyushu will always be a second home, a place where friendships and dreams blossomed." These connections transcend geographic boundaries, creating a global network of JTW alumni united by shared experiences and a mutual respect for cultural diversity.

Looking to the future, the 30-year legacy of the JTW program stands as a powerful testament to its success in preparing students for an interconnected, globalized world. By instilling resilience, curiosity, and a deep respect for other cultures, JTW equips its participants with the tools they need to navigate complex cross-cultural environments. As the program continues to evolve, it remains more than just a gateway to Japanese culture; it is a bridge that connects people, ideas, and values across continents.

This milestone anniversary is not just a celebration of JTW's past achievements but also a reflection of its ongoing commitment to fostering meaningful international exchange. It serves as both a tribute to the program's remarkable impact and a promise to continue shaping the lives of future generations of students, ensuring that the transformative experience of JTW endures for many years to come.

References

- Aizawa, I., & Rose, H. (2019). An analysis of Japan's English as medium of instruction initiatives within higher education: The gap between meso-level policy and micro-level practice. *Higher Education*, 77(6), 1125–1142. <https://doi.org/10.1007/s10734-018-0323-5>
- Belliveau, M. (2019). “I need to learn from you”: Reflections on cultural humility through study abroad. *Reflections: Narratives of Professional Helping*, 25(1), 70–81.
- Deardorff, D. K. (Ed.). (2009). *The SAGE handbook of intercultural competence*. SAGE.
- Dolce, V., Davoine, É., Wodociag, S., & Ghislieri, C. (2023). The road to an international career: The “Erasmus effect” on resilience, intercultural interactions and cultural intelligence. *International Journal of Intercultural Relations*, 92, 101741. <https://doi.org/10.1016/j.ijintrel.2022.101741>
- Mezirow, J. (1997). Transformative learning: Theory to practice. *New Directions for Adult and Continuing Education*, 1997(74), 5–12. <https://doi.org/10.1002/ace.7401>
- Paige, R. M., Cohen, A. D., & Shively, R. L. (2004). Assessing the impact of a strategies-based curriculum on language and culture learning abroad. *Frontiers: The Interdisciplinary Journal of Study Abroad*, 10(1), 253–276. <https://doi.org/10.36366/frontiers.v10i1.144>
- Suematsu, K. (Ed.). (2024). *Shinjidai no kokusai kyoiku koryu ni mukete: Tohoku Daigaku model [Towards a new era of international educational exchange: The Tohoku University model]*. Tohoku University Press.
- Suematsu, K., Akiba, Y., & Yonezawa, Y. (Eds.). (2019). *Kokusai kyoshu: Bunkateki tayosei o ikashita jugyo jissen heno apurochi [Intercultural collaborative learning: Approaches to classroom practices that capitalize on cultural diversity]*. Toshindo.
- Yonezawa, A. (2011). The internationalization of Japanese higher education: Policy debates and realities. In S. Marginson, S. Kaur, & E. Sawir (Eds.), *Higher Education in the Asia-Pacific* (Vol. 36, pp. 329–342). Springer Netherlands. http://link.springer.com/10.1007/978-94-007-1500-4_17

Annual Report for Japan in Today's World (JTW)

A Brief Review of the 30th Class (Oct. 2023 – Jul. 2024)

Chisato Nonaka *

Masa Higo **

Ryoichi Imai ***

Introduction

Kyushu University's **Japan in Today's World** (JTW hereafter) is an annual, year-long study-abroad program conducted in English for international students. Organized by the university's International Student Center, the program serves as a central pillar in Kyushu University's strategy to accelerate global student mobility. As such, the program has two primary objectives: educational and institutional. From an educational standpoint, JTW is designed for participants to immerse themselves in contemporary Japanese society and culture while helping to strengthen their academic knowledge in these areas. Its aim is to nurture future leaders and specialists in fields related to Japan. Institutionally, as Kyushu University's flagship short-term program, JTW bolsters inbound student mobility and fosters partnerships that enable outbound mobility for Japanese students to partner institutions worldwide.

In its design, JTW provides a comprehensive learning experience combining academic coursework and extracurricular activities. Academically, participants can enroll in JTW core courses, regular faculty courses, Japanese language courses (e.g., JACs = Japanese Academic Courses), and individualized study projects¹ spanning a semester. Outside the classroom, JTW encourages experiential learning through organized activities such as field study trips, host family program, student-tutor collaborations, and on-campus events such as lunch hour gatherings, Kimono workshops, and international exchange events.

Overview of the 30th JTW Class

Participant Demographics

The 30th JTW cohort (from October 2023 to July 2024) hosted 69 students from 39 partner

* Associate Professor, Kyushu University International Student Center

** Professor, Kyushu University International Student Center

*** Associate Professor, Kyushu University International Student Center

1 For Humanities and Social Sciences, students may enroll in Independent Study Projects (ISPs) for credit while Advanced Laboratory Research (ALR) is available for students in Biology, Engineering, and other Natural Sciences.

institutions across 17 countries/regions (see Image 1), one of the largest groups in the recent decade. The diverse participant base reflects growing global interest in the program, with major representation from Europe, Asia, and the Americas. Some of the regular institutions include University of Leeds (U.K.), Technical University of Munich (Germany), and Stockholm University (Sweden), which have consistently sent students over the years.



Image 1. Countries and regions where home institutions of the 30th JTW cohort are located.

Notable Trends

A significant milestone was the inclusion of first-time participants ² from six institutions, such as La Trobe University (Australia), Tsinghua University (China), and Sungkyunkwan University (South Korea). This expanded network underscores JTW's increasing global recognition and appeal. Additionally, the proportion of semester-only participants slightly rose, reflecting flexibility in accommodating varying academic schedules.

Program Activities and Highlights

Academic Offerings

JTW's robust curriculum continued to provide opportunities for interdisciplinary learning. Participants enrolled in JTW core courses exploring Japanese history, politics, and culture, alongside

² Based on the most current records available in the JTW Office

elective courses tailored to their academic interests. A notable highlight was the Individual Study Projects (ISPs), which allowed students to pursue research under the guidance of Kyushu University faculty. Topics ranged from Japanese philosophy to foreign language acquisition.

Extracurricular Engagement

The program offers a variety of immersive activities to deepen participants' cultural understanding:

- **Field Trips:** Visits to historical and cultural sites, such as Nagasaki's Peace Museum and Dazaifu Tenmangu Shrine, provided hands-on learning experiences.
- **Cultural Workshops:** Activities like kimono workshop (see Image 2) and Zen meditation enabled students to connect with Japanese traditions.
- **Community Programs:** The host family program and Tandem Language Learning (arranged by a student organization) helped to pair participants with local families and students, fostering meaningful cross-cultural exchanges.



Image 2. Photos from the Kimono workshop in Spring/Summer 2024

30th Anniversary Events

To celebrate its three-decade legacy, JTW organized special events, including an alumni panel featuring graduates from previous cohorts. Their stories of professional success and enduring connections highlighted the program's transformative impact over the years.

Reflections from Alumni Who Visited Kyushu University During the 30th Anniversary Year

Cultural Immersion and Personal Growth

Alumni emphasized the program's role in broadening their worldviews. Activities like rice planting in Saga and Zen meditation at Bairinji Temple offered unique insights into Japanese values. One alumnus noted, "The hands-on experiences turned abstract cultural concepts into lived realities." These immersive moments fostered resilience, adaptability, and a deeper appreciation for cultural diversity.

Building Lifelong Connections

The program's emphasis on community-building created a global network of friendships. Many alumni maintained ties with host families and peers, with some citing these connections as pivotal in shaping their personal and professional lives. As one alumnus remarked, "Kyushu will always feel like a second home."

Professional and Academic Impact

JTW's academic rigor and cultural exposure significantly influenced alumni careers. Skills gained—such as independent research, critical thinking, and cross-cultural communication—proved invaluable. An alumna currently pursuing graduate studies stated, "JTW gave me the confidence to tackle academic challenges and collaborate internationally."

Program Outcomes and Feedback by the 30th JTW Cohort

Survey Results

End-of-year evaluations revealed high satisfaction rates among participants. As shown in the figure below (Figure 1), out of the 44 respondents, 77.3% strongly agreed that the program has helped them deepen their understanding of contemporary Japan, while 22.7% responded "agreed" to the same question. The core courses were particularly effective in enhancing their academic knowledge of Japanese culture and society. Many students also appreciated the Japanese Academic Courses (JACs) for improving their language skills, though some found them less challenging.

Overall, the JTW Program has helped me deepen my understanding of Japan in today's world.

44 responses

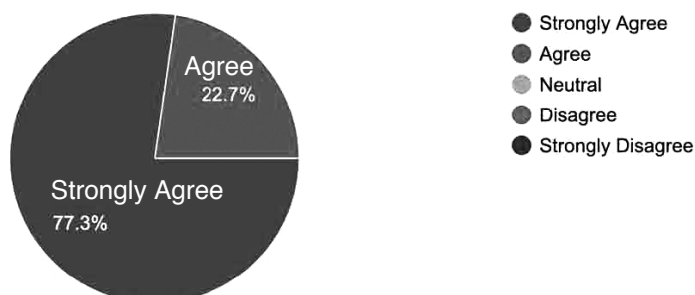


Figure 1. Program Evaluation Survey Responses

Interaction with Tutors and Host Families

Interactions with student tutors received mixed reviews. Some students found their tutors very helpful and supportive, while others experienced difficulties in communication and engagement. For instance, one student mentioned that their tutor was often busy, leading them to spend more time with other JTW students and Japanese students they met independently. Experiences with host families were overwhelmingly positive. Many students formed strong bonds with their host families, appreciating the cultural exchange and support. One student noted that their host family became like a real family to them, highlighting the deep connections formed.

Study Trips and Workshops

The study trips and workshops were highlights for many participants. Events like the Zen Meditation at Bairinji Temple, the Global Peace Symposium, and the Kabuki performance were particularly well-received. However, some students noted logistical issues, such as scheduling conflicts and transportation arrangements.

Areas for Improvement

Several students suggested more opportunities for interaction with Japanese students and deeper engagement with the local culture. Some participants expressed a desire for courses that are more challenging and academically rigorous. Additionally, some suggested that the program could offer more opportunities for students to take on greater responsibility and independence, similar to what is expected at the university level and beyond.

Opportunities for Enhancement

The JTW team received high praise for their support and responsiveness. Students felt well-guided

and appreciated the team's efforts in making their stay in Japan enjoyable and educational. Specific staff members were mentioned for their exceptional support, helping students navigate various challenges, including non-JTW issues like visa-related issues.

Overall, the feedback underscores the program's many strengths in delivering a rich and immersive cultural and educational experience. Participants appreciated the diverse activities and supportive environment, which greatly contributed to their understanding of Japanese culture and society. At the same time, some suggestions were made for potential enhancements, which will serve as valuable insights for further refining the program for the semesters to come.

Conclusion and Future Directions

The 30th year of the JTW program has reaffirmed its success in promoting cultural understanding and academic excellence. This milestone year has highlighted the program's ability to provide a rich and immersive experience, fostering a deeper appreciation of Japanese culture and society among its participants. The diverse activities, supportive environment, and strong academic framework have been instrumental in achieving these goals.

Looking ahead, the JTW program is committed to expanding its reach and impact. By incorporating innovative teaching methods and fostering deeper collaborations with partner institutions, the program aims to enhance its educational offerings and provide even more enriching experiences for future participants. These efforts will ensure that the program remains at the forefront of international education, adapting to the evolving needs of students and the global academic community.

As the JTW program continues to evolve, it remains a vital bridge connecting students worldwide to the rich tapestry of Japanese society. Through its dedication to cultural exchange and academic excellence, the program not only enriches the lives of its participants but also contributes to a greater understanding and appreciation of Japan on a global scale. The future of the JTW program is bright, and its ongoing success will undoubtedly continue to inspire and connect students from around the world.

2023年度 “AsTW2024” 実施報告

“ASEAN in Today’s World (ASTW)”

生 田 博 子*

1. ASEAN in Today’s World とは

ASEAN in Today’s World (AsTW) は、近年の世界政治経済への影響力を増している ASEAN 地域にフォーカスし、世界で活躍する次世代のアジアブリッジの核となる人材の育成を目的として本学が開発した教育プログラムである。平成20 (2008) 年度から ASEAN 諸国の有力大学を共同実施校 (ホスト校) として、毎年2月下旬から3月上旬に ASEAN 地域で実施している。毎年、日本人学生及び ASEAN 諸国からの留学生合計40名程度が参加しており、2週間のプログラム実施期間、生活を共にすることにより、活発な国際交流や異文化への相互理解を深める。

なお、新型コロナウイルス感染拡大により2020年度と2021年度はオンライン開催だったが、2023年3月に実施された2022年度 “AsTW2023” は、3年ぶりに現地開催となった。通常3年で共同実施校が交代するが、コロナ禍でオンライン授業が続いたため、続く2024年3月に実施された AsTW2024もマヒドン大学が共同実施校となった。

2. 共同実施大学 (ホスト大学) 及び協力大学

共同実施大学：

- マヒドン大学：第13回 (2020年度) ～第16回 (2023年度)

協力大学：

- マヒドン大学 (第1回～第3回、第13回～第15回の共同実施校)
- アテネオ・デ・マニラ大学 (第4回～第6回の共同実施校)
- ベトナム国家大学ハノイ校 (第7回～第9回の共同実施校)
- マラヤ大学 (第10回～第12回の共同実施校)
- 福岡女子大学 (学生・講師派遣について協力。マヒドン大学と独自の短期留学プログラムがあるため、2020年度から参加せず)

*九州大学留学生センター准教授

3. プログラム スケジュール (2023年度)

実施期間 2024年3月11日(月)～3月21日(木)

- 3月11日(月)：オリエンテーション・ASEAN事務局特別講演・開講式
- 3月12日(火)～3月15日(金)：授業
- 3月16日(土)：スタディ・トリップ
- 3月17日(日)：休日
- 3月18日(月)～3月21日(木)午前：授業
- 3月21日(木)午後：閉講式

4. 開講科目及び修了要件 (2023年度)

ASEAN 研究コース (ASC: ASEAN Studies Courses)：2科目

- Social Innovator Incubation (マヒドン大学講師)
- Multiculturalism in Asia (留学生センター生田准教授、木下准教授)

参加学生は、上記2科目を履修し、合計4単位の認定を受けることを修了要件としている。また、ASEAN事務局による特別講演、及び文化体験やスタディ・トリップ等、すべての講義・活動に参加することが求められた。

5. 参加学生数 (2023年度)

	人数	大学
日本	21	九州大学：共創 (12)、工 (4)、法 (1)、理 (1)、農 (1)、経済 (2)
タイ	6	Mahidol University (5)、Naresuan University (1)
ベトナム	7	Vietnam National University, Hanoi (2)、Vietnam National University - University of Languages and International Studies (1)、Vietnam National University (1)、Diplomatic Academy of Vietnam (2)、Van Lang University (1)
マレーシア	2	Universiti Malaya (2)
フィリピン	6	Ateneo De Manila University (1)、University of the Philippines Diliman (1)、University of The Philippines Manila (2)、University of the Philippines (1)、Central Luzon State University (1)
インドネシア	1	Universitas Gadjah Mada (1)
合計	43	

※ ASEAN 諸国からは計5カ国、14大学、22名が参加。

6. 奨学金（2023年度）

九州大学から参加者への経済的支援として、全学協力事業基金から ASEAN 加盟国の学生17名にプログラム参加費を支給した。また、九州大学の学生10名に JASSO の奨学金を支給した。条件を満たす者には、渡航支援金も支給した。

令和6年度海外留学派遣支援事業 学部生・大学院生共通基幹教育科目「世界が仕事場Ⅰ&Ⅱ」

Super Global University Initiative Lecture Series “Work in the World”

生 田 博 子*

1. はじめに

本章では本学における海外留学派遣支援事業の一環として開講されている「学部生・大学院生共通基幹教育科目・世界が仕事場Ⅰ&Ⅱ」について報告する。

2. 「世界が仕事場Ⅰ&Ⅱ」

2.1. 目的

「世界が仕事場」は、九州大学留学生センターにおける海外留学派遣支援事業の一環として、グローバル人材とは何かを探究する日本人学生を対象に開講された授業である。一般に大学が提供する留学支援は、語学の授業、留学プログラムや奨学金制度の充実、留学カウンセリングなどが挙げられるが、学生の海外留学や海外でのキャリアへの興味を引き出し、涵養することを目的にしたカリキュラムの例は少ない。近年、日本人学生の海外留学の減少が懸念されており、留学目的や意識・意欲の変化などの理由が挙げられている。九州大学も例外でなく、日本人留学生派遣促進に関する取り組みを提唱するも、留学希望者が増えないことへの懸念から、学生の自主性、広報活動だけに頼らず新たな取り組みが求められていた。本コースは、そのような状況を打開すべく、基幹科目として全学の学部生、大学院生、留学生を対象に企画したものである。

この授業では、単に短期留学や海外での研究経験があるというだけでなく、ジャーナリスト、起業家、医療従事者など世界の第一線で活躍している講師が、それぞれの仕事や生き様を語り、異文化や海外体験を含む、幅広い体験の意義や意味を考え、グローバル社会での生き方のヒントを得ることを目的としている。学生たちには、海外で活躍する人々も、色々な事に悩み、失敗を重ね、試行錯誤しながら、国際社会の中でキャリアを築き人生を歩んできたということを知り、生き方の多様性を学ぶことを期待している。

この授業は2016年後期に始まり、9年目を迎える今年、累計で約2600名を超える学生が履修している。

*九州大学留学生センター准教授

2.2. 実践

本コースは①講師による講義と質疑応答、②「問いとコメント」、③グループディスカッションと発表、が3本の柱となっている。秋学期と冬学期に開講し、全16回の講義はオリエンテーション1回、外部招聘講師8名と本学教員3名による講義11回、グループディスカッション4回から構成される(資料1)。受講生は、毎回の授業で、講義に関する短いレポートの提出、ディスカッションへの積極的な参加が求められている。今年度は、学部生は秋学期116名、冬学期108名。大学院生は後期8名の232名が受講した。また聴講生が多く、本学教職員も積極的に聴講している。

2.3. 成果

本学の大学間交換留学申請者の多くは、本授業の受講生であり、学生や教職員から地球市民、グローバル人材を考える上で、大変有意義な講義であるとのフィードバックを頂いている。学外からの参加や見学などの依頼等も多い。

3. まとめ

本授業は、九州大学に在籍する日本人学生や留学生に、国際社会の現代における人生の選択肢、個々がグローバル人材として要素の探求などを狙いとしている。大学のグローバル化やそれに伴う人材育成の達成にはさまざまなアプローチがあるが、学生の意識を変えていくことも大学の国際化に大きく貢献する。

(資料1)

2024

海外留学派遣支援事業 令和6年度秋冬学期・後期
学部生・大学院生共通基幹教育科目

世界が 仕事場

君は、人生の先輩にどんな夢を抱いたのか聞いたことがあるか？

本コースでは、多様な分野の第一線で活躍する講師が、人生やキャリアについて語る。異文化や海外体験を含む幅広い体験の意義や意味を考え、グローバル化の進む現代社会での生き方のヒントを得よう。

授業は、アクティブラーニングをもとに

- ① 講師による講義と質疑応答
- ② 「問いとコメント」
- ③ ディスカッション を3本の柱とする。詳しくは、後期シラバス参照のこと。

曜 限：水曜日4限

対 象：学部生・大学院生

教 室：2403教室（センター2号館4階）

単 位：学部生：秋学期（Ⅰ）冬学期（Ⅱ）各1単位

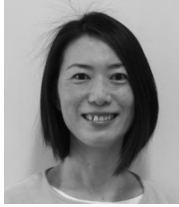
大学院生：後期 2単位

問い合わせ：留学生センター准教授・生田博子 Email: ikuta.hiroko.953@m.kyushu-u.ac.jp

講師紹介(1)

10月2日は、イントロダクション

10月30日、11月27日、12月25日、2月5日は、ディスカッション



10月9日「医療者・研究者としてできる途上国支援とは？」

疋田 直子 (九州大学教授・看護学)

東京大学医学部附属助産婦学校・同大学大学院卒業

前職：公益社団法人 日本国際民間協力会他

「途上国で働きたい。困っている人を助けたい。」そう最初に決心してから25年以上経ちますが、いまだに自分が納得できるような途上国支援はできていません。途上国支援とはどうあるべきなのか、一緒に考えましょう。

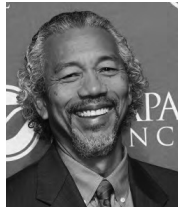


10月16日「テレビは“オワコン”？ 10年目のいま思うこと」

安 世陽 (NHK報道局 ディレクター)

早稲田大学卒業

19歳のとき、大学の講義をきっかけに目指したメディア業界。ネットや個人配信者が台頭するなか、いま出来ることは。報道番組を中心にディレクターとして積んだ約10年の経験をもとに、皆さんと考えたいです。



10月23日 “Confessions of an Accidental Academic”

Curtiss Takada Rooks (U.S.-Japan Council)

Dartmouth College B.A., Trinity College M.A.

University of California Irvine Ph.D.

I never imagined myself as an academic or a scholar. This talk explores how my life lived as “different normal” led me to become a Global Asia teacher/scholar.



11月13日「激動の金融界—仕事も遊びも本気でやる」

荻原 哲 (三井住友信託銀行 大分支店長)

早稲田大学卒業

海外畑の先輩に憧れ入社したもののバブル崩壊で国際業務縮小。海外畑は諦め、法人貸出部門に進み、小売業やマスコミグループを担当。半沢直樹でおなじみの金融検査を乗り越え、二度目の銀行統合では役職者の人事に関わる。現代の金融機関の役割や、女性の活躍の推進、地域社会への貢献などについてお話しします。



11月20日「『正しい』って何？『悪い』ってなぜ？」

長野 剛 (朝日新聞社アライアンス事業部)

京都大学・同大学院卒業

「我々は神が見ているから悪事はしない。無宗教の君は？」学生時代、旅先で度々聞かれた悩ましい問い。いや、そもそも善悪って？ 後に新聞記者になっても悩まされたテーマに、このとき気付かされたのは幸運でした。共に考えましょう！

講師紹介(2)



12月4日「21世紀の北極圏：気候変動、開発、伝統の中で」

生田 博子 (九州大学准教授・人類学)

University of Alaska Fairbanks B.A., M.A., University of Aberdeen Ph.D.

前職：米国アラスカ州政府野生動物管理局他

20代半ば、東京の金融機関を退職後、米国と英国で学生時代を送り、米国政府の研究者としてアラスカで約20年間生活しました。現代社会における先住民の狩猟生活と資源開発、持続可能な社会、海外でのキャリア等についてお話しします。



12月11日「デジタルマーケティングを20年やって思うこと」

伊東 周晃 (株式会社JADE 代表取締役)

京都大学卒業 前職：(株)ぐるなび他

私の大学生時代に「デジタルマーケティング」という職種は存在しなかったのですが、縁あって約20年間、その仕事をしてきました。ネットサービスの進化や今後の見通しを語りながら、皆さんの将来の人生の選択に役立つお話ができればと思います。



12月18日「私たちが世界に貢献できることは何だろうか？」

森木 亮太 (一般社団法人NTDs Youthの会代表)

九州大学卒業 大分大学医学部在学

私は8年前「世界が仕事場」の受講生でした。現在は医学生・社会起業家として、ゲイツ財団と共に顧みられない熱帯病のアドボカシー活動をしています。皆さんが8年後にどのような道を歩みたいかを一緒に考えましょう。



1月8日「サイエンスコミュニケーター：研究の次にある世界」

國包ターヒューン レイモンド (九州大学広報本部)

Lewis & Clark College B.A., 京都大学大学院卒業

自分の仕事を紹介したら大体「サイエンスコミュニケーションってなんですか?」と聞かれます。この仕事の肝はいろんな人が、いろんな方法で、違う人へ科学を伝える、その背景と現状を探っていきましょう。



1月22日「円満退社をしたくて渡ったフランスでの生活」

村井 浩二 (なにわフレンチびざん オーナーシェフ)

前職：(仏)ラ・フェルム・サン・シモン他

どんな料理でも作らせてもらえれば幸せだった社員食堂の18歳。厳しい修行時代から逃れる様に渡仏を決意した25歳。パリの星付きレストランで働いた26歳。現在のオーナーシェフの立場に至るまでを料理を背景にお話しします。



1月29日「記者の仕事、メディアを取り巻く環境のいま」

永田 工 (朝日新聞社 社長室主査)

一橋大学卒業

新聞社で、事件取材する記者や記者が取材したニュースを世に出すデスクとしてキャリアを重ね、現在は新聞業界やメディアの現状を広い視野で捉える役割を担っています。各地で経験した取材の様子、激変するメディアの現状についてお伝えします。

2023年度九州大学留学生センター・留学生指導部門報告 (カウンセリング関係)

Report on International Student's Advising and Counseling Division (2023)

黄 正 国*

肥 後 裕 輝**

1. はじめに

留学生が安心して充実した学生生活を送ることができるよう、学業、生活、心理面における相談支援を提供することは、当部門の重要な役割の一つである。本報告では、2023年度における留学生指導部門の活動の中でも、カウンセリングを含む相談支援に関連する取り組みについてまとめる。

2023年度は、新型コロナウイルス感染拡大の影響が徐々に収束し、学内の活動も大きく変化した。学部と大学院の授業はほぼ全面的に対面形式へと移行し、キャンパス内も以前の活気を取り戻しつつあった。一方で、留学生相談に関しては、コロナ禍を契機に導入されたオンライン面談が、伊都キャンパス以外の学生や、多忙なスケジュールを抱える学生にとって非常に利便性が高いことが確認された。このため、2023年度以降も、対面相談とオンライン相談の両方を並行して実施するハイブリッド型の相談体制を継続することとした。

2. 相談活動

(1) 3段階の相談支援モデル

九州大学留学生センター留学生指導部門では、留学生が安心して学業や生活を送れるよう、3段階の相談支援モデルを構築し、包括的なサポートを提供している。このモデルは、一次的相談支援（予防的支援）、二次的相談支援（早期介入）、三次的相談支援（専門的支援）に分かれ、それぞれの段階で適切な支援を行うことを目的としている。

一次的相談支援（予防的支援）は、主に留学生が入学直後に必要とする情報提供や適応支援を目的とし、オリエンテーションやガイダンスの実施、学内資源の紹介を通じて、留学生がスムーズに大学生活をスタートできるよう支援する。具体的には、以下の取り組みを行った。まず、4月初めと9月末に留学課と共同で新入留学生オリエンテーションを実施し、学業、生活、健康に関する情報を提供

*九州大学留学生センター准教授

**九州大学留学生センター教授

した。また、4月と10月に行われる新入生健康診断の会場に相談コーナーを設置し、留学生向けに健康情報の提供や相談対応を実施した。さらに、キャンパスライフ・健康支援センターのカウンセラーと連携し、各キャンパスで他大学から進学した大学院新入生向けオリエンテーションを開催し、手続きや学内資源の利用方法に戸惑う学生に対し、キャンパス内の関連窓口への案内を実施した。そのほか、異文化適応やコミュニケーションの促進を目的とした教育活動として、学部生を対象に「日本事情」(前期)、「Cross-Cultural Psychology of Japanese Communications」(前期)を、大学院生を対象に「異文化理解の心理学」(後期)を開講した。これらの授業を通じて、留学生と日本人学生が相互に異文化を学び合い、異文化適応能力やコミュニケーションスキルを高めることを目指した。

二次的相談支援(早期介入)は、留学生の中でも特に対人関係の問題を抱える学生や、母国で深刻な問題を経験した学生など、ハイリスクグループへの早期介入を目的としている。主な取り組みとして、以下の活動を行った。まず、キャンパスライフ・健康支援センターで実施されるアンケート問診を通じて、孤独感や不安が高いと回答した学生を特定し、個別の支援へとつなげた。また、母国で障がいや疾病のために合理的配慮を受けた経験のある学生に対し、学内外の医療機関や相談窓口の情報を提供し、必要に応じて具体的な支援を調整した。さらに、教職員や学生サポーターと連携し、孤立しがちな留学生との接点を増やし、適切な支援につなげるためのネットワークを強化した。この段階の支援を充実することで、留学生が深刻な問題に発展する前に適切なサポートを受けられるよう努めた。

三次的相談支援(専門的支援)は、心理的・精神的な問題や、危機状況に直面している留学生に対する個別のカウンセリングを中心とした支援である。キャンパスライフ・健康支援センターと連携して、「オンライン相談申込フォーム」(日本語・英語・中国語)を整備し、伊都キャンパスに限らず、病院キャンパス、筑紫キャンパス、大橋キャンパスの学生も予約制で相談可能とした。心理的な問題に限らず、日常生活、学業、進路に関する幅広い相談を受け付けている。また、緊急事態(急性の精神病、自殺や自殺未遂、事件・事故)には、対面相談を含め、他職種と連携したチーム対応を実施する。さらに、留学生の言語的、文化的背景を考慮し、キャンパスライフ・健康支援センターと連携して、非常勤の留学生担当カウンセラー(英語担当3名、中国語担当1名)体制を整えた。カウンセリングの新規申し込みがあった場合、常勤カウンセラー(筆者)が非常勤カウンセラーと情報共有して、適切なカウンセラーをアサインする。また定期的にケースカンファレンスを開催し、必要に応じてスーパービジョンを実施することで、カウンセリングの質の維持と向上を目指している。

(2) 来談状況

留学生の来談者数および相談回数の推移を表1に示した(参考のため、2016～2022年度のデータも併記した)。2023年度の相談実績は、相談者数124名(昨年に続き過去最多)、相談回数1,312回(過去最多)、一人あたりの平均相談回数10.6回、来談率4.9%という結果であった。特に、相談者数および相談回数が共に過去最大を記録しており、以下の要因がその背景として考えられる。

第一に、メンタルヘルスへの意識の向上である。近年、発展途上国を含め、世界的にメンタルヘルスに対する関心が高まっており、多くの留学生にとってカウンセリングを含む相談支援サービスがよ

り身近な存在となりつつある。また、疾患や障害を持つ留学生、あるいはセクシャルマイノリティの留学生など、母国ですでにカウンセリングを利用した経験を持つ学生の増加も、相談者数の増加につながったと考えられる。こうした学生は、日本でも継続的な支援を求める傾向が強く、大学の相談機関を積極的に活用している。

第二に、一人当たりの平均相談回数の増加が顕著である。2023年度のデータでは、一人あたりの平均相談回数が10.6回と、コロナ禍以前の年度と比較して増加傾向が見られる。この背景には、大学の国際化の進展による学術環境の多様化が影響している可能性が高い。例えば、英語のみで学位を取得できるプログラムの設置や、英語で行われる授業科目の拡充など、教育の国際化が進むことで、多様な文化背景を持つ学生が増加し、学習環境の適応に関する相談が増えている。また、多文化共存の環境では、異なる言語や文化的背景を持つ学生と教職員の間で誤解や対立が生じやすくなるため、人間関係に関する相談も増加傾向にある。

第三に、大学院留学生の増加と、彼らが抱える特有の課題が相談件数の増加に寄与している。学部留学生の約2倍の人数を有する大学院留学生は、研究室という閉鎖的な環境で活動することが多く、指導教員との関係や研究の進捗に関する悩みを抱えやすい。特に、指導方法の違いや研究に対する期待のギャップがストレス要因となり、長期的な相談支援を必要とするケースが増えている。このような環境下で、精神的負担の蓄積がメンタルヘルスの悪化につながることもあり、長期間にわたる継続的な支援を必要とする留学生の増加が、相談回数の増大につながっていると考えられる。

以上の要因を踏まえると、留学生支援においては、短期的な相談対応だけでなく、継続的かつ包括的な支援が求められる状況にある。今後は、個別相談の充実に加え、ピアサポートプログラムの強化や、異文化適応を支援するワークショップの拡充、さらには指導教員向けの留学生支援に関する研修の実施など、より多角的な支援体制の整備が必要である。これにより、留学生のメンタルヘルスケアを強化し、持続的に支援できる環境を構築していくことが重要である。

表1 来談者数と相談回数および来談率（留学生）

年度	相談者数（人）	相談回数合計（回）	一人当たりの平均相談回数（回）	来談率 （全学留学生数（人）※）
2016	65	454	7	3.1% (2,089)
2017	102	855	8.4	4.6% (2,201)
2018	85	623	7.3	3.7% (2,313)
2019	105	707	6.7	4.4% (2,387)
2020	91	859	9.4	3.9% (2,328)
2021	113	1,279	11.3	5.0% (2,270)
2022	124	1,169	9.4	5.3% (2,361)
2023	124	1,312	10.6	4.9% (2,526)

※各年度5月1日時点（九州大学概要より）

(3) 国・地域別の来談者数

大学の留学生集計の地域カテゴリに基づき、2023年度の国・地域別の相談者数を表2に示した。例年と同様に、中国出身の相談者が最も多く、65名で全体の約5割を占めている。また、アジア地域全体の相談者数は90名と、留学生相談者の約7割を占めており、引き続き多数を占める傾向が続いている。アジア地域以外の相談者数を見ると、ヨーロッパ地域が9名(7.3%)と比較的多く、次いで中南米地域が6名(4.8%)と続いた。これは、英語圏やスペイン語圏など、多様な文化的背景を持つ留学生が増加していることを示している。また、北米、アフリカ、中東地域からの相談者も一定数おり、留学生相談支援の対象がより多様化していることが分かる。この結果から、アジア地域に限らず、様々な地域出身の留学生にも相談支援の利用が広がっていることがうかがえる。

近年、各部局において英語で授業を行う国際コースや短期留学プログラムが拡充されている。これに伴い、アジア地域出身の留学生であっても、日本語ではなく英語での相談を希望するケースが増加している。また、多文化共生が進む中で、言語の壁だけでなく、文化的価値観や支援ニーズの違いにも配慮した相談支援が求められている。例えば、メンタルヘルスへの意識やカウンセリングに対する考え方は、地域や文化によって大きく異なるため、単なる言語対応だけでなく、異文化間の心理的、社会的背景を理解した上での支援が不可欠である。

今後は、オンライン相談の充実、多文化対応のカウンセラーの確保、ピアサポートの強化など、留学生の多様なニーズに対応するための包括的な支援体制を強化していく必要がある。特に、英語を共通言語とする留学生の増加を考慮し、英語による相談支援の質を向上させることが重要な課題となる。こうした取り組みを通じて、より多くの留学生が安心して大学生活を送れる環境を整えていくことが求められている。

表2 国・地域別の来談者数、留学生数、来談率

年度	集計項目	アジア地域					中東地域	欧州地域	アフリカ地域	アメリカ地域			不明	合計
		中国	韓国	インドネシア	その他	計				北米地域	中南米地域	計		
2022	来談者数	65	7	5	20	97	7	9	4	2	3	5	2	124
	留学生数	1,327	180	115	411	2,033	49	85	119	21	54	75		2,361
	来談率	4.9%	3.9%	4.3%	4.9%	4.8%	14.3%	10.6%	3.4%	9.5%	5.6%	6.7%		5.3%
2023	来談者数	65	7	6	12	90	5	9	2	1	6	7	11	124
	留学生数	1,439	181	108	387	2,115	56	128	123	40	57	97		2,526
	来談率	4.5%	3.9%	5.6%	3.1%	4.3%	8.9%	7.0%	1.6%	2.5%	10.5%	7.2%		4.9%

(4) 相談内容

2023年度より集計データベースが更新されるとともに、相談内容の分類方法も見直された。従来の分類方法を基に項目を整理し、必要に応じて新たな項目を追加する形で、7つのカテゴリとそれぞれのサブカテゴリが設定された。本年度の留学生の学年別相談内容の詳細は表3に示されている。

全体的な相談傾向として、最も多かったのは感情面に関する相談（187件）であり、次いで修学面（142件）、対人面（134件）、症状面（88件）が続いた。サブカテゴリ数の違いにより単純な比較は難しいが、この傾向は留学生が抱える特徴的な課題を反映していると考えられる。ただし、2023年度のデータベース改変により、カテゴリ設定が大幅に見直されたため、今後の経年変化を継続的に追跡する必要はある。

サブカテゴリ別の詳細な傾向をみると、最も多かったサブカテゴリは、感情面の「不安感」（63件）であり、次いで修学面の「研究の悩み」および進路面の「卒業後の進路」がそれぞれ40件を超えた。さらに、修学面の「学業上の悩み」、生活面の「異文化適応」、対人面の「家族の問題」、感情面の「抑うつ感」も30件以上の相談件数を記録している。

留学生は異国での学業・研究を進める中で、言語の壁や文化的な違いにより、研究に関するコミュニケーションが十分に取れない状況に直面することが多い。また、各国の教育システムの違いにより、同じ学問領域であっても習得済みの知識に偏りが生じ、それが学業上の困難につながるケースも見受けられる。このような課題に対応するためには、入学前の情報提供や入学後のオリエンテーションを通じた予防的なアプローチが重要である。

一方、卒業後の進路に関する不安も大きな相談テーマとなっている。留学生は、帰国、日本での就職、他国への移動など、人生の重要な選択を迫られることが多く、その過程で強い不安を感じるケースが少なくない。さらに、家族と共に来日している留学生も一定数存在し、異文化適応や家族関係の問題が相談内容として頻繁に取り上げられている。これらの傾向から、留学生支援は学業面のサポートにとどまらず、生活やキャリアに関する包括的な支援が求められることが示唆される。

学年別の相談傾向をみると、修士課程1年次では、生活面の「異文化適応」、対人面の「対人緊張」、進路面の「卒業後の進路」に関する相談が多く寄せられた。留学生にとって、新しい文化や環境への適応は容易ではなく、特に入学直後は人間関係の構築や進学後のキャリアについて不安を感じることが多い。同様の傾向は、専修生1年次の留学生にも共通して見られた。修士課程2年次では、修学面の「研究の悩み」、進路面の「卒業後の進路」、対人面の「家族の問題」、感情面の「不安感」の相談が多かった。研究を本格的に進める時期に入ると、研究成果のプレッシャーや進路選択の悩みが増加する。また、留学生の場合、母国の家族との距離が心理的な負担となることがあり、特に家族と共に来日している場合には、家族の適応問題も相談の要因となる。博士後期課程では、特に2年次、3年次において「研究の悩み」、「卒業後の進路」に関する相談が多く見られた。博士課程の留学生は、研究活動の最終段階に入り、学位取得が母国でのキャリアに直結するため、精神的な負担が大きくなる傾向がある。博士論文の執筆や発表に伴うストレス、指導教員との関係性、将来のキャリアに対する不安が重なり、相談件数の増加につながっていると考えられる。博士後期課程の留学生に対しては、研究に関するメンタルサポートに加え、キャリア相談や将来設計のサポートの強化が求められる。

今後、留学生の多様な背景やニーズを踏まえ、学業、生活、キャリアの各側面にわたる統合的な支援を提供し、留学生が安心して大学生生活を送れる環境の整備を進めることが求められる。

表3 学年別相談内容(重複あり)

所属課程	学部							修士課程				専修生		研究生		一貫制博士		博士後期課程						総計		
	1年次	2年次	3年次	4年次	5年次	6年次	7年次	1年次	2年次	3年次	4年次	5年次	1年次	2年次	1年次	2年次	3年次	5年次	1年次	2年次	3年次	4年次	5年次		6年次	
修学面	履修ガイド								1																1	
	履修不良				1	1	2																		4	
	修学意欲	1	1			1	1		3	1			1								2	1		1	13	
	休学・復学		1																	1					2	
	学業上の悩み	1	2	2	1	1	1	1	3	5	2		5		2						3	2			31	
	研究の悩み					1			4	8	2		1	1	1	1	1			4	5	5	3	2	1	40
	卒論・修論・博論					1		1	6	4		1	1	1						1	4	4	2	1	1	28
	不登校				1	1	1																			3
	学部入学時の適応			1																						1
	進級配属時の適応																									0
	大学院入学時の適応								2	1				1	1						2	1				8
	留学の悩み		2		1	1		1		2	1		1										2			11
	その他																									0
計	2	6	3	4	7	5	3	12	24	9	0	1	9	2	5	1	1	0	0	6	16	15	5	4	2	142
進路面	進路情報収集																								0	
	転学部																								0	
	再受験																								0	
	退学の悩み																			1						1
	就職不安		1						3	9		1	1	1						1	1	1	1	2		22
	卒業後の進路			1	2	2		1	5	11	3	1	1		2					1	4	5	2	3	1	45
	その他									1								1								2
計	0	1	1	2	2	0	1	8	21	3	2	0	2	1	2	0	1	0	0	3	5	6	3	5	1	70
生活面	生活リズム・習慣	1			1	1	2	2	4	1	2							1			2	1			18	
	課外活動																								0	
	経済的問題				1	1			1																3	
	アルバイト		1																					1	2	
	宗教団体等勧誘																								0	
	消費生活トラブル																								0	
	寮生活																								0	
	異文化適応	1		1	3	2			5	4		1	5	2						1	3	1		1	30	
その他	1																	1		2				4		
計	3	1	1	5	4	2	2	10	5	2	1	0	5	0	2	0	0	2	0	3	5	2	0	1	1	57
対人面	友人関係		1	1	2		1	1	3	1	1		2		1					3	1	4			22	
	恋愛関係		1	1	1	1			6						1					1	3	3	1			19
	家族関係				2	1			2	5				1	1	1				2	1	2			18	
	家族の問題				1	1		1	2	9	2				1					2	4	3		3	1	30
	教職員との関係				1	1				1	1											2				6
	教職員とのトラブル	1								1	1									1		2				6
	研究室の人間関係								2	3					1		1				4	2	1			14
対人トラブル								3	1				1							1		1			7	

3. 留学生相談における新しい変化

(1) オンライン相談の併用

九州大学には、伊都キャンパスのほか、病院キャンパス、大橋キャンパス、筑紫キャンパスなど遠隔地にあるキャンパスが存在している。コロナ禍以前は、緊急時を除き、カウンセリングを希望する留学生は伊都キャンパスまで直接来談する必要があった。しかし、2020年にオンライン相談を導入し、留学生がどのキャンパスに所属していてもカウンセリングを利用できる体制が整備された。これにより、キャンパス間の移動が困難な学生や、多忙なスケジュールを抱える学生にも、より柔軟な相談対応が可能となった。

加えて、オンライン相談の導入により、国内にいる留学生のみならず、一時帰国した留学生や、海外留学中の日本人学生に対する支援も実施できるようになった。特に、精神疾患を発症し緊急入院が必要となった留学生の場合、オンラインミーティングを活用することで、母国にいる家族との迅速な連絡や情報共有が可能となり、支援体制の強化につながった。今後もより多様な学生がアクセスしやすい支援環境を構築していく必要がある。

(2) 多様なニーズに応える体制の構築

九州大学には、1年未満の短期留学生や交換留学生から、学位取得のために長期滞在する留学生まで、さまざまな背景を持つ留学生が在籍している。それぞれが直面する課題や異文化体験は大きく異なり、相談内容も多岐にわたる。

近年、日本語を学ばずに母国から直接入学する留学生が増えている。これらの学生は、授業や研究活動を英語で行うため、日本語を使用する機会がほとんどない。特に、大学院生の場合は研究活動に専念することが多く、地域コミュニティとの接点を持つ機会が限られるため、数年間日本に滞在しても、日常会話レベルの日本語能力も身につかず、周囲との交流も限定的になりがちである。その結果、異文化適応の難しさや孤立感を抱える留学生が増えている。

また、発達障害や精神疾患の診断を受けた留学生、セクシュアルマイノリティの留学生からの相談件数が増加している。これらの学生には、合理的配慮を含めた支援の充実が不可欠であり、学内外のリソースと連携しながら、多様なニーズに対応できる包括的な支援体制の整備が求められる。実際に周囲の教職も対応に困っているため、単なる個別対応にとどまらず、適切な情報提供や、教職員向けの研修を通じて、大学全体の支援環境を向上させることが重要である。

さらに、留学生活に伴うストレスによって精神的に不安定になる学生も一定数おり、対応が複雑化するケースも少なくない。精神的に危機的な状況に陥った学生に対する緊急対応や、家族への連絡、部局の教職員や医療機関との連携が必要となる事例に、迅速かつ適切に対応するためには、支援ネットワークの強化と危機対応マニュアルの整備が不可欠である。

4. おわりに

留学生への相談支援の目標は、留学生が「言語の壁」「文化の壁」「心の壁」を乗り越え、日本人学生と対等な立場で学びながら自己の強みを発見し、多様なキャリアを形成できるよう支援することにある。この目標を達成するためには、異文化適応支援、生活支援、健康支援、キャリア支援といった多角的なアプローチを統合し、個別カウンセリングの強化と、より広範な支援ネットワークの構築が求められる。特に、学内外の関係者との協力体制を強化することで、留学生が安心して学び、生活できる環境を整えることが重要である。

また、国際共修授業や文化交流イベントの実施を通じて、留学生と日本人学生が相互に学び合う場を創出し、異文化理解を促進することも欠かせない。こうした取り組みを通じて、留学生が学業だけでなく、社会的・心理的な側面でも充実した経験を得られるような大学環境を整えていくことが、今後の留学生支援における大きな課題である。

執 筆 者

(執筆順)

小 山	悟	九州大学留学生センター准教授
今 井	亮 一	九州大学留学生センター准教授
郭	俊 海	九州大学留学生センター教授
大 神	智 春	九州大学留学生センター教授
脇 坂	真彩子	九州大学留学生センター准教授
楠 木	理 香	九州大学留学生センター准教授
柴 田	あづさ	九州大学留学生センター准教授
野 中	ちさと	九州大学留学生センター准教授
肥 後	裕 輝	九州大学留学生センター教授
生 田	博 子	九州大学留学生センター准教授
黄	正 国	九州大学留学生センター准教授

投 稿 規 定

1. 投稿できるのは、国立大学法人九州大学留学生センターの専任・兼任教員、および非常勤講師である。ただし、上記以外の研究者でも、国立大学法人九州大学留学生センターの専任・兼任教員が共著者である場合には投稿できる。
2. 掲載希望者は、pdf ファイル (adobe 社) を編集委員メールアドレスまで送ること。
3. 掲載を許可された著者は、編集委員が指定する方法で原稿を作成し、編集委員まで送ること。

編 集 委 員

大 神 智 春	九州大学留学生センター教授
今 井 亮 一	九州大学留学生センター准教授
	imai.ryoichi.303@m.kyushu-u.ac.jp

九州大学留学生センター紀要 第33号

発 行 日 2025年 3 月 発 行

編集・発行 九州大学留学生センター
〒819-0395 福岡市西区元岡744
☎092-802-2216

印刷・製本 城島印刷株式会社
〒810-0012 福岡市中央区白金2-9-6
T E L 092-531-7102
F A X 092-524-4411

Research Bulletin
No.33
International Student Center
Kyushu University
2025

CONTENTS

(Articles)

- Flipped Japanese Classroom for Beginners
A Proposal for Community Japanese Language Classes Satoru Koyama ... 1
- Will the BOJ Policy Shift Revive the Yen Appreciation? Ryoichi Imai ... 27

(Reports)

- Report on the Fundamental Subjects for Language and Culture/Japanese
..... Junhai Guo, Chiharu Ohga, Masako Wakisaka and Rica Kusunoki ... 49
- Japanese Training for Advanced Studies Chiharu Ohga ... 57
- Japanese Language Courses at *Chikushi/Ohashi* campus (2024) Satoru Koyama ... 65
- Japanese Academic Courses (JACs) / Fundamental Subjects for Language and Culture, Japanese
..... Rica Kusunoki and Masako Wakisaka ... 69
- Japanese Training Courses (JTCs) Azusa Shibata ... 83
- 2024 Overview of the Japanese Language Education for those in the Undergraduate
International Program in English (IUPE) at the Faculties of Engineering and Agriculture
..... Azusa Shibata ... 91
- Report on Japanese Language and Culture Course (JLCC 2023-2024) Junhai Guo ... 95
- Fostering Global Citizenship: The Long-Term Impact of Kyushu University's JTW Program
..... Chisato Nonaka ... 101
- Annual Report for Japan in Today's World (JTW)
A Brief Review of the 30th Class (Oct. 2023—Jul. 2024)
..... Chisato Nonaka, Masa Higo and Ryoichi Imai ... 111
- “ASEAN in Today's World (ASTW)” Hiroko Ikuta ... 117
- Super Global University Initiative Lecture Series “Work in the World” Hiroko Ikuta ... 121
- Report on International Student's Advising and Counseling Division (2023)
..... Zhengguo Huang and Masa Higo ... 127